

吹 浦 遺 跡

第1次緊急発掘調査報告書

1984

建設省東北地方建設局酒田工事事務所

山形県教育委員会

吹浦遺跡

第1次緊急発掘調査報告書

昭和59年3月

建設省東北地方建設局酒田工事事務所

山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和58年度に実施した国道7号線吹浦バイパス建設工事に伴う「吹浦遺跡」第1次緊急発掘調査の結果をまとめたものであります。

吹浦遺跡は昭和26年から28年まで4次にわたって、本県では最初の科学的な学術調査が行なわれた遺跡で、昭和28年5月25日に「吹浦石器時代遺跡」として県の史跡に指定された、全国でも著名な遺跡であります。

今回の発掘調査で、庄内地方では類例が少なかった平安時代前半の竪穴住居跡が発見され、これまでの吹浦遺跡の調査成果とはまた違った成果を得ることができました。また、縄文時代の遺構も竪穴住居跡のほか、多くのプラスコ状土壌が発見されるなど新しい成果も得られました。

これらの文化遺産は私達の祖先の歴史を語る資料としてかけがえのない財産であります。幾千もの長い間にわたって土に埋もれてきたこのような遺産を保護し、未来に継承していくことは現代に生きる私達の重要な責務であると考えます。

近年、県民福祉の向上や地域環境の整備を目的とした諸開発事業と埋蔵文化財との関わりが増加の傾向にあります。県教育委員会におきましては「心広くたくましい県民の育成」という立場から、これらの間の調整をはかり、今後とも埋蔵文化財の保存と活用のために努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが、本調査にご協力いただいた関係各位並びに地元の方々に感謝申し上げると共に、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護・普及の一助となれば幸いと存じます。

昭和59年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹 正治

例　　言

- 1 本書は、建設省東北地方建設局酒田工事事務所の委託を受け、山形県教育委員会が昭和58年度に実施した国道7号線吹浦バイパス建設工事に係る「吹浦遺跡」の第1次緊急発掘調査の報告書である。なお、昭和59年度には第2次調査が予定されていることから、今回は主に遺構を中心に記載し、遺物の総合的な検討は2次調査の結果を待って行うこととする。発掘調査は昭和58年6月6日から同9月30日まで延76日間にわたって実施した。
- 2 調査にあたっては建設省東北地方建設局酒田工事事務所、遊佐町教育委員会などの関係諸機関のご協力を得た。また、次の方々からご指導、ご助言を賜った。柏倉亮吉氏(県立米沢女子短大学長)、酒井忠一氏(致道博物館次長)、加藤　穂氏(県立山形南高校)、佐藤慎宏氏(市立酒田中央高校)。そして、遊佐町中央公民館の高橋信夫氏には調査の全期間にわたってご協力を賜り、山形大学生の佐藤嘉広、門脇耕一郎氏にも実測図作成などにご協力を賜った。ここに記して感謝申し上げる。
- 3 調査体制は下記のとおりである。

調査主体	山形県教育委員会
調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者	佐々木洋治(主任調査員)　渋谷孝雄(現場主任)　長橋　至(調査員) 〔山形県教育府文化課〕
調査補助	高橋信夫(遊佐町中央公民館社会教育指導員)
- 4 挿図縮尺は遺構は1/40、遺物は1/3を基本とし、それぞれにスケールを示した。図版の遺物は平安時代の土器は1/3、土製品は2/3、縄文時代の土器片は1/2、完形土器は1/3、打製石器・磨製石器は2/3、礫石器は1/3とした。
- 本文・挿図中の記号はST—竪穴住居跡、SK—土壤、EP—柱穴を表わす。
平安時代の土器実測図で断面白ぬきは土師器、黒が須恵器、点描が赤焼土器を表わす。
なお、遺構断面図にはBMマイナスで記載したがBMの標高は13.686mである。
- 5 本報告書の作成は渋谷孝雄、佐藤正俊、長橋　至が担当し、遺構挿図の作成とII章1・2を長橋が、IV章1～3、V章2を佐藤が、その他を渋谷が分担した。なお、挿図・図版の作成、土器の復元・実測にあたって、遠藤淑子、加藤まち子、三沢友子、浦山和子、福島日出海、佐藤達弥、伊豆田昌希、村山正市の補助を得た。また、写真図版の作成は後藤　浩が担当した。
- 6 本書の編集は佐藤正俊、渋谷孝雄が担当し、全体については佐々木洋治が統括した。

目 次

I 調査の経緯	
1 吹浦遺跡とその出土土器について の研究史	1
2 調査に至る経過	4
3 調査の経過	5
II 遺跡の概観	
1 遺跡の立地と環境	8
2 周辺の遺跡	8
3 層序	10
4 遺構と遺物の分布	10
III 平安時代の遺構と遺物	
1 穫穴住居跡	12
2 土壙	24
IV 縄文時代の遺構と遺物	
1 穫穴住居跡	36
2 土壙	41
3 土器	62
4 石器	66
V まとめと課題	
1 平安時代の遺構と遺物について	68
2 縄文時代の遺構と遺物について	70

挿図目次

第1図 遺跡全体図	7	第14図 遺構外出土遺物（2）	31
第2図 遺跡位置・分布図	9	第15図 300号住居跡	37
第3図 土層図	11	第16図 301号住居跡	39
第4図 1号住居跡	13	第17図 縄文時代土壙（1）	44
第5図 1号住居跡出土遺物	15	第18図 縄文時代土壙（2）	45
第6図 4号住居跡	17	第19図 縄文時代土壙（3）	46
第7図 5・6号住居跡	19	第20図 縄文時代土壙（4）	47
第8図 6号住居跡	20	第21図 縄文時代土壙（5）	48
第9図 7号住居跡	22	第22図 縄文時代土壙（6）	49
第10図 4～7号住居跡出土遺物	23	第23図 縄文時代土壙（7）	50
第11図 土壙平面・断面図	25	第24図 縄文時代土壙（8）	51
第12図 土壙・ピット・落込み出土遺物	28	第25図 縄文時代土壙（9）	52
第13図 遺構外出土遺物（1）	30	第26図 縄文時代土壙（10）	53
		第27図 縄文時代土壙（11）	54

第28図	縄文時代土壌 (12)	55	第33図	縄文時代土壌 (17)	60
第29図	縄文時代土壌 (13)	56	第34図	縄文時代土壌 (18)	61
第30図	縄文時代土壌 (14)	57	第35図	完形・一括土器実測図 (1) ..	64
第31図	縄文時代土壌 (15)	58	第36図	完形・一括土器実測図 (2) ..	65
第32図	縄文時代土壌 (16)	59			

図版目次

図版 1	遺跡遠景・近景	図版25	平安時代の土器 (1)
図版 2	発掘調査風景	図版26	平安時代の土器 (2)
図版 3	土層セクション	図版27	平安時代の土器 (3)・土製品
図版 4	S T 1 プラン確認状況他	図版28	S T 300出土土器 (1)・(2)
図版 5	S T 1 完掘状況	図版29	S T 301出土土器 (1)・(2)
図版 6	S T 4 完掘状況他	図版30	S T 301出土土器 (3)・(4)
図版 7	S T 5・6 完掘状況他	図版31	S K30出土土器 (1)・(2)
図版 8	S T 7 完掘状況他	図版32	S K28・29出土土器
図版 9	縄文土器出土状況	図版33	S K34, 35出土土器
図版10	縄文土器出土状況	図版34	S K278, 279, 282他出土土器
図版11	S T300, 301完掘状況他	図版35	S K285, 293a出土土器 (1)
図版12	S K26, 27, 28完掘状況他	図版36	S K293a出土土器 (2)・(3)
図版13	S K34, 35完掘状況他	図版37	S K293b, 286, 290出土土器
図版14	S K278, 279完掘状況他	図版38	S K294, 299, 305他出土土器
図版15	S K285, 286完掘状況他	図版39	S K308, 310, 311他出土土器
図版16	S K290, 294完掘状況他	図版40	S K314a・b・d出土土器
図版17	S K299, 302完掘状況他	図版41	S K314c, 315a・d出土土器
図版18	S K308, 309完掘状況他	図版42	S K317, 319他出土土器
図版19	S K313, 314完掘状況他	図版43	S K324出土土器 (1)・(2)
図版20	S K315完掘状況他	図版44	S K324 (3), 327他出土土器
図版21	S K316, 319完掘状況他	図版45	S K332, 333, 334出土土器
図版22	S K324完掘状況他	図版46	一括完形土器 (1)
図版23	S K325, 326完掘状況他	図版47	一括完形土器 (2)
図版24	土壤群完掘状況他	図版48	出土石器 (1) 石 鎌

- | | | | |
|--------------|---------|--------------|----------|
| 図版49 出土石器（2） | 石錐，尖頭器 | 図版53 出土石器（6） | 磨製石斧他 |
| 図版50 出土石器（3） | 石匙（1） | 図版54 出土石器（7） | 磨石 |
| 図版51 出土石器（4） | 石匙（2） | 図版55 出土石器（8） | 凹石，石皿，石錐 |
| 図版52 出土石器（5） | 範状石器，削器 | | |

付表目次

表－1 I・II層出土の杯・高台付杯の底部	29
表－2 平安時代の図示遺物観察・計測表（1）	33
表－3 平安時代の図示遺物観察・計測表（2）	34
表－4 平安時代の図示遺物観察・計測表（3）	35
表－5 繩文時代土壤一覧表（1）	41
表－6 繩文時代土壤一覧表（2）	42
表－7 繩文時代土壤一覧表（3）	43

I 調査の経緯

1 吹浦遺跡とその出土土器についての研究史

吹浦遺跡が中央の学界で知られるようになったのは大正8（1919）年のことである。この年の3、4月頃、地元の松田又彦氏は羽越本線の酒田一吹浦間の新設工事の現場において、運搬された土砂のなかにおびただしい貝殻と土器片が混っていることを知り、土取場の追跡により、字一本木で貝塚を発見したのである。このことが、酒田の越島三郎治氏を通して、當時東北帝国大学におられた長谷部言人博士に知らされ、同年7月に現地を訪れた博士によって試掘を含む踏査が行われた。その結果は、同年8月15日刊行の人類學雑誌に報告されている（長谷部1919）。試掘地点では薄い間層をはさんで、厚さ数寸の3枚の貝層が検出され、ニホンシジミを中心とし、コタマガイなど14種の貝類と、鳥獸魚骨、蟹爪など少量、それに石鏃1個、石斧2個、凹石1個、土器片若干が出土した。土器片は1片に帶状斜繩紋があったが、他は簡単な繩紋を有するものだけであったという。また、この時に、後に調査の行われた崖面の洞窟と同じような洞窟から「直線又は曲線的彫刻文様ある土器片」が出土したが、試掘地点の土器片とは「両者の関係は未だ明ならず」として慎重な態度を示している。そしてまた、現地表面に貝殻が少量しか分布しないことについて、丘陵傾斜から推測して、少なくとも4、5尺という深い所に包含されていることを理由としてあげている。

その後、本遺跡が再び関心を集められたのは昭和24年のことであった。村道の敷設によって一本木貝塚の東方の堂屋台地が切りくずされた際、多くの土器片と貝殻が出土し、その崖面に洞窟の痕跡があらわれたのである。この事実を確認した村上孝之助氏は鶴岡の致道博物館に連絡し、これが契機となって、本県での科学としての考古学の出発点として学史に残る吹浦遺跡の発掘調査が行なわれたのである。発掘調査は昭和26年から昭和28年まで4次にわたって行われ、昭和30年3月にその報告書が刊行された（柏倉他1955）。昭和26年8月30、31日の第1次発掘調査では崖面に露出していたA～Fの各洞窟が発掘されB洞窟からはヤマトシジミの貝殻が出土し、C洞窟の内部中央では灰、焼土が遺存していることが確認され、また、E洞窟からは完形土器1個が出土した。第2次調査は翌27年の7月21～25日までB地区を対象として実施され、一括土器40個体弱が出土し、また、竪穴住居跡も検出された。第3次調査はB地区の出土土器を整理した結果、二様式の土器があったことから、それらが層位的に分離できるかどうか、また、側壁の確かな竪穴住居の検出を目的として、昭和28年4月3～7日に実施された。しかし、結果的には悪天候等によって目的は達成できなかったという。また、3次調査直前に土取りによる削平が進行し、D～E洞窟

は湮滅するという事態が起こったことから、史跡指定の準備、事務手続き等がこの調査と併行して行われ、A地区のA～C洞とその台地上の畠地、それにB地区のそれぞれ一筆が県史跡に指定されることになった。しかし、指定から漏れたA地区のD、E洞窟上の畠地はその後も破壊が進行したことから、緊急調査の意味合いも兼ねてA地区を対象とした第4次調査が同年10月2～6日に行なわれた。この調査では一部で壁の立上る住居跡や竪坑（本稿でのプラスコ状土壤にあたる）3基が検出され、その中から一括土器や厚さ60cmの貝層が発見されている。さて、この4次にわたる発掘調査で出土した「縄文文化前期末の土器」は報告書では第1～3類に分けられて詳記されている。第1類土器は「大木6式土器として標式的なものと、近似のもの」で、A地区的住居跡と竪坑、それにD、E洞窟から多く出土した。第2群土器は「円筒下層c式またはd式に類似の器形・文様をもつもの」でB地区やA・B・C洞窟から出土したが「青森県方面に分布する円筒土器下層c式、d式土器は認められず」、それは「本遺跡の所在位置にも起因する」と理解された。また、第3類土器については「円筒土器下層式c式よりもd式に類似点多く、また、大木6式に類似点あり、両者に見出せない独特なものもあり、この地方の前期末の特色を示すかと思われる」と述べられた。「この三類の土器が吹浦遺跡を代表する土器であり、このような組合せがこの地方の一つの地方的特色であり、第3類のみを吹浦式と呼ぶことなく、三類を総称して吹浦式土器の名称で呼ぶべきであろう」として、「吹浦式」が提唱されたのである。

また、洞窟内と住居跡などからあわせて6ヶ所の小貝塚が発見されたが、貝の種類はあわせて13種類が同定され、長谷部博士の一本木貝塚と同様、ヤマトシジミが圧倒的多数を占めている。そして、貝層中からはイシガメ、サギ、イノシシ、ニホンジカ、ニホンイヌ等の甲骨や骨が検出された。そのなかで、小松昌一氏がE洞窟から採取したニホンイヌについては昭和38年に斎藤弘吉博士によって詳細な観察結果とコメントが発表されている（斎藤1963）。それによると、年齢は生後10ヶ月ないし1年ぐらいの若犬で、小形家犬、そして体格は「日本史前家犬においては勿論、世界史前家犬でも最も小体格に属し一中略一現代の日本犬を比較すると所謂柴犬でも小体格のものに匹敵し、その生時の肩の高さは凡そ37cm前後と推測される」という。

「吹浦式土器」については、その後も、概説書や図録等でたびたび取りあげられる一方、その理解をめぐっては数々の論文がある。ここで、それらを網羅することはできないが、「吹浦式土器」が現在どのような評価を受けているかを、代表的な論文を通して振り返ってみたい。

報告書が出版されてから10年後の昭和40年、林謙作氏は吹浦出土の土器にみられる爪形文は器面に粘土紐を貼付して、その上から爪形文を施す、いわゆる「D型爪形文」である

こと、そして、大木系の爪形文は大木 2a 式以来ほとんどが器面に直接施文される「C型爪形文」だけであることから、吹浦の爪形文は十三菩提式や鍋屋町式など、中部、関東からの影響を受けていることを指摘した。また、吹浦の土器の一つの特徴をなす「木目状撚糸文」は円筒下層 c 式から d 式にかけての特徴で、その分布状態は、表日本側にはほとんどなく、裏日本側では北海道西南部から北陸にまで及んでいるとして、相当広範囲にわたる地域からの影響を受けて成立したことを示唆している（林1965）。

昭和44年に刊行された「山形県史考古資料」で、赤塚長一郎氏は「吹浦遺跡では、標準的な大木 6 式の土器と共に、東北北部を圏内とする円筒土器系の文化と、東北南半の大木式文化圏とが融合折衷したかたちの土器がでている」として、いわゆる金魚鉢形の土器をとりあげ「吹浦式といわれる地方特異の文化を生み出していることに注目したい」と述べ、いわゆる金魚鉢形の土器について一括して吹浦式とする報告書とはまた違った「吹浦式」が登場する（赤塚1969）。

昭和47年、柏倉亮吉、加藤稔氏らは先の林謙作氏の業績も踏まえて「従来はあまりにも大木系土器群の影響を過大に評価してきたように思える。今後は、北陸方面の交流といった視点をも含めて研究が推進されねばならない」と述べ、さらに、「吹浦式は単一型式としてとらえることができない面をもつことを見逃してはならない」とし、金魚鉢形の土器を例にあげ、それらが大木 5b, 6, 7a の古型式（糠塚式）に対比される土器であることから、「いわゆる『吹浦式』は型式論上三型式に区分すべきであって、それらが円筒式土器と大木系土器との融合型式であるかどうかの問題は、その上で厳密に行うべきものだったのである。」と述べ、報告書の「吹浦式」が単一型式としては成立しないことを、調査者の立場ではじめて明らかにした（柏倉・加藤他1972）。

昭和49年には小笠原好彦氏が「円筒式文化の崩壊とその意義」という論文を発表し、吹浦遺跡出土の土器についても興味ある見解を述べている（小笠原1974）。土器の形態と文様の関係から B 地区では円筒式土器固有の円筒形の形態に円筒式固有の文様要素のみによって器面に施文したものと、同じく円筒式固有の形態に、大木式と円筒式の両者の特徴をもつ文様要素で施文されたもの、それに大木式固有の形態に大木式固有の文様要素で施文するものの三者がある。A 地区では円筒式固有の形態に、円筒式固有の、また、大木式固有の、それに両者の特徴をもつものの、そして、大木式固有の形態に同筒式固有の、また大木式固有の、それに両者の特徴をもつものの、合わせて 6 類の土器がある。そして、A・B 両地区に円筒下層 D 式土器が共通して共伴しているが、細かな時間的な差違にもとづくとして、結論的には B 地区から A 地区の様相に変遷したとみるべきであるとしている。

また、同じ年に保角里志氏は先の柏倉氏らの論を一步進めて、いわゆる金魚鉢形の土器

だけでなく、深鉢形土器も3型式に分かれることを指摘し、報告書でいう「吹浦式」が「それがいかなる意味でも型式にはなり得ない」として、柏倉氏らが融合型式について、なお慎重な態度を保留しているのに対し「吹浦式」を全面否定した（保角1974）。

さて、柏倉氏等や保角氏によって、「吹浦式」が単一型式としては成立しないという指摘もあったが、昭和51年の佐藤慎宏氏の一般向け概説書「庄内を掘る」では「吹浦の土器は大半が深鉢形である。口の部分が朝顔形に開き胴部がまるくふくらみ、下半部ですべて台をなしているのが特色である。一中略—このような土器の形や文様は青森県を中心とした円筒土器の影響がみられ、また同時に仙台湾中心の大木式土器の影響がある。したがって吹浦遺跡は円筒文化と大木文化が接触・融合した文化と考えられる。こんなところから吹浦式土器と呼ばれる。庄内にはこの手の土器が割合多い。」と述べ「吹浦式」は吹浦遺跡だけでなく、庄内地方にある程度の分布をもつ土器であることを認めている（佐藤1976）。

以上のような「吹浦式土器」の評価を踏まえて、昭和57年、阿部明彦氏はその精緻な実測図をもとに、吹浦遺跡の土器は少なくとも三型式を含み、器形は三系列があることを明らかにした。また、その文様、地文などについて詳細に検討した結果、「全般的に、大木式の要素が強く感じられ、少なくとも円筒式が主体を占める時期は認められない。すなわち、吹浦遺跡では大木型式を母体としながら円筒式の一部を享受しているとみなされるわけで、その享受の仕方は各段階で異なり、いわゆる融合折衷の盛行は同筒下層d式よりも上層a式ないし上層a式直前段階において最も顕著に認めることが出来る。」という結論を示している（阿部1982）。

1次調査から4次調査までに得られた土器の理解については、現在のところ、最も多方面から検討を行った阿部氏の結論に代表されると考えられるが、吹浦遺跡の再調査にあたって土器について当面の課題となるべきことは以下の2点に要約されよう。

- ① 報告書で「吹浦式土器」として扱われたものが、少なくとも三型式にわたる土器とすれば、それらを層位的に、または遺構単位で検出できるかどうかを確認すること。
- ② 北陸方面との交流があるとすれば、それは前記三型式のどの段階の土器に共伴するか。

2 調査に至る経過

昭和28年の第4次調査終了後は、遺跡にとってはしばらく平穏な日々が続いたが、昭和48年の庄内広域営農団地農道整備事業関係の分布調査（山形県教委1974）、さらに、昭和49、50年度に県下全般にわたって実施された分布調査（山形県教委1978）により吹浦遺跡の範囲も次第に明らかになってきた。そして、昭和52年頃から国道7号線の遊佐町女鹿から吹浦までの海岸を走る区間が冬期にはしばしば危険な状態となることから、その解消措置と

して山側を通す「吹浦ミニバイパス」の建設計画がおこってきた。建設省から委託を受けた県教育委員会は、計画がやや具体化した昭和55年に、その計画路線を中心とする幅1kmを対象として詳細分布調査を実施した(山形県教委1981)。その結果、新規遺跡6ヶ所を含む19ヶ所の遺跡が存在することが明らかになり、このことも踏まえて、路線が正式に決定されたが、本遺跡の指定部分を除く箇所も含め、数遺跡の一部がその路線内にかかることになった。その後、これらの遺跡の保護対策をめぐって県教育委員会と建設省東北地方建設局酒田工事事務所とで数回にわたる協議がもたれた結果、用地買収後に、必要に応じて記録保存のための緊急発掘調査を実施することになった。そして、建設省からは本遺跡が最初の発掘調査として委託され、県教育委員会では昭和57年11月に範囲確認と経費積算のための最終的な分布調査を実施した(山形県教委1983)。その結果、路線内にかかる面積が広いことから2ヶ年にわたる事業となり、昭和58年度はその第1次調査、通算で5回目の発掘調査として6月6日から実施されることになった。

3 調査の経過

発掘調査は昭和58年6月6日から9月30日まで延76日間実施した。今年度の調査対象地区は一部未買収地もあったことから、第1図に示した範囲のうちY列50以南、80以北とし他の地域についても既買収地を中心に数本のトレンチを入れて、遺構、遺物の全体的な分布状況を把握するように努めた。グリッドはNo60と65のセンター杭を結んだ線(N-42°50' - E)を基線にとり第1図に示したような2×2mを1単位として組んで調査を進めた。最終的には約2,200m²の拡張区を設定して精査に当り、平安時代の遺構面についてはほぼ完掘したが、縄文時代の遺構の分布する面積約1,500m²のうち、完掘したのは約500m²にとどまった。調査の経過は以下のとおりである。

6月6～24日

6日に器材を搬入し、15時30分から鉛入式を行う。7～9日に蔽払い、立木の伐採等の調査の準備を行い、平行して杭打ち作業を進める。9日の午後から2×8～10mのトレンチを設定して粗掘りを始める。1週目の10日まではY軸(南北)に沿って合わせて10本のトレンチをあけ、25～60～79で主に縄文時代の遺物が集中して出土することを確認。また、2週目の13～17日にはX軸とY軸に沿って本年度の調査区である2～29～50～70の範囲内を中心に計27本のトレンチを調査した。この結果2～19～70～80区の範囲には平安時代の遺物が、また、15～29～50～70区では縄文時代の遺物が、そして20～29～70～80区には平安時代、縄文時代の遺物が分布する状況を把握できた。3週目の21～24日には来年度の対象区も含めて合わせて10本のトレンチを調査し、来年度の調査予定となるY列の90以南では地表面まで相当の深度をもつことが明らかとなった。また、2～5～70～74区では平安

時代の竪穴住居とみられる土色変化を確認し、一部手掘りによる拡張作業に入った。

6月27日～7月22日

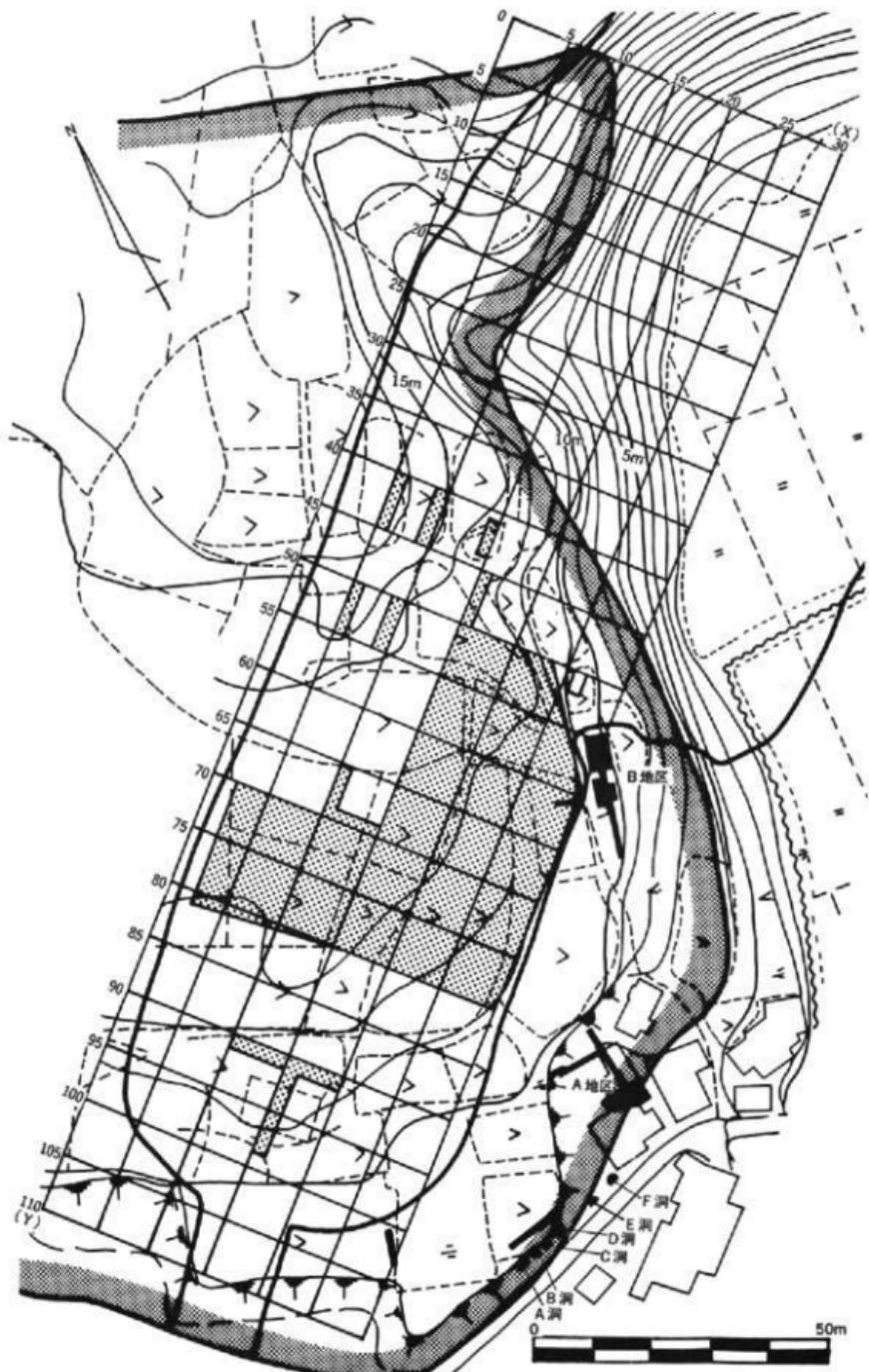
27日から重機による表土剥ぎに入る。この作業は7月4日まで延5日間実施し、15～29-50～80区と10～14-70～80区の計約1,900m²について拡張した。また、2～9-70～80区は手掘りで掘り下げた。その後、順次10×10mを単位として掘り下げ、面精査による遺構検出作業を実施した。掘り下げ・面精査の第1週目にあたる7月4～8日には10～19-70～79区で平安時代のピット群、落込み等を多数検出し、また、25～29-60～64区で縄文時代の土壌等を検出した。11～15日には15～29-55～69区の拡張区北半の掘り下げを実施し、地山の落込みに堆積した遺物包含層を検出し、20～29-55～59区では一括土器10個体、玦状耳飾りが出土した。また25～29-75～80区でも同じような落込みを検出。18～22日には拡張区全域の面精査を行い、15～29-55～79区と2～14-70～80区において、平安時代の竪穴住居跡5軒、性格不明の落込み、ピット多数、縄文時代の遺物包含層を3ヶ所、そして、縄文、もしくは平安の土壌25基を検出し、その写真撮影を行った。

7月25日～8月12日

25日から、遺構の登録と百分の一の略測分布図の作成に入り、ピット群の精査を行う。また、8月1日から平安時代の竪穴住居跡の精査に入り、各住居跡の層位断面図の作成や床面の精査を実施。これと併行して、平安時代の土壌や柱穴とみられるピット群の精査も行い、11日までに平安時代の遺構をほぼ完掘する。9日からその最終平面図の作成に入り、12日までに平安時代の調査は完了。そして、これらの作業と併行して、縄文時代の遺物包含層のうち、Y列59区と60区の境界のアゼの両側他に幅1mのトレンチをあわせて6ヶ所で入れ、土層を確認しながら掘り下げたところ、15～29-55～65区の間では、地山面で遺構を検出できることが確認された。

8月22日～9月30日

盆休み明けの22日から31日まで15～29-55～65区内の縄文時代の遺物包含層の掘り下げと遺構検出作業を行い、竪穴住居跡2軒、土壌約50基を検出・登録した。そして、9月1日からこれらの住居跡、土壌の精査に入ったが、土壌は袋状や、フラスコ状となって深くなるものが多く、また、切り合うものも多いが、遺物の多い土壌は少なかった。これらの掘り下げと併行して層位断面図や一部平面図の作成を行い、9月27日までに、15～29-55～65区内に存在する縄文時代の遺構はほぼ完掘した。また、9月26日からは最終平面図の作成に入り、29日にはレベリングまで終了し、28日からは土壌の埋戻しも併行して進めた。30日には、埋戻しも完了し、本年度の調査を打切って現場を撤収した。なお、この間、14日には調査の成果を公表する現地説明会を開催し、町民など約140名の参加があった。



第1図 遺跡全体図

II 遺跡の概要

1 遺跡の立地と環境

山形県の最北端、秋田県との県境に聳える鳥海山は「出羽富士」とも呼ばれ、そのなだらかな西側裾を日本海へと広げる。遺跡はこの裾の緩斜面の泥流台地上に立地し、標高は6~16mを測る。台地下南側には牛渡川が西流し、ほどなく月光川と合流し日本海へと注ぐ。この河川には現在中流域に鮭孵化場が設けられ、毎年初冬、大量の鮭が遡上する。

遺跡から現在の海岸線までの直線距離は約500m程で、海岸は遺跡を中心に南側が砂丘、北側が岩礁となっている。

台地から南側に広がる平野部は日本屈指の穀倉地帯である庄内平野の北端にあたり、庄内米の中でも良質な「遊佐米」の産地として知られる。鳥海山麓の斜面はほとんどが樹林で、「鳥海ブルーライン」沿いにわずかに蔬菜畑が開拓されている。遺跡の立地する台地は畠地として利用されており、遺跡北部では切土、盛土がおこなわれ、全体では5~6枚の段差をもった平坦地となっている。

これらの自然環境を背景に鳥海山麓、南に開ける平野部に多数の遺跡が確認されており、縄文時代、平安時代を中心に遊佐町は行政単位としての遺跡数は県内一を誇る。

2 周辺の遺跡（第2図）

本遺跡周辺の遺跡については鳥海山麓の台地上に立地する遺跡、南側平野部に立地する遺跡に大別できる。第2図には本遺跡を中心に、時代に別なく現在までに判明している遺跡90箇所を掲載した。山麓部に縄文、平野部に平安~中世の遺跡が多い傾向が理解できる。

本遺跡のひとつの主体である縄文時代前期末に時期的に近い遺跡は周辺には極めて少ない。僅かに物見峠A・B遺跡（35・36）が現在までに知られているに過ぎない。時代が下がれば本遺跡東方200mに縄文時代中期の小谷地遺跡（37）、北東700mには縄文時代中期~晩期の小山崎遺跡（38）、その北東に隣接して縄文時代後期末~晩期と古墳時代の丸池遺跡（39）、さらにその東方には縄文時代中期を主体とする柴燈林遺跡（40）などが分布している。また、遺跡北側の秋田県境付近の山麓に目を転じれば縄文時代中期、後期末、晩期に亘る三崎山C遺跡（3）（青銅刀出土）なども注目されよう。

本遺跡のもうひとつの主体である平安時代については、この時期、遺跡は平野部に立地する傾向があるが、周辺には本遺跡と同様に山麓に立地する遺跡がある（2・3・17~19・25・26・34~36他）。これらについてはほとんど未調査のため不明な点が多いが、立地の違いに関しては各々の遺跡の時期的な差、あるいは遺跡の性格の差を一応想定することも可能であろう。

遺跡群一覧

NO.	道路名	時代
1	吹三	平
2	崎山	平
3	タニ	平
4	トヤトヤ	平
5	坂本	平
6	安水	平
7	女曾	平
8	戸田	平
9	田原	平
10	上根子	平
11	谷地野	平
12	日ノ	平
13	山	平
14	山	平
15	山	平
16	小院	平
17	水木	平
18	谷地野	平
19	山	平
20	山	平
21	山	平
22	山	平
23	山	平
24	山	平
25	山	平
26	山	平
27	山	平
28	山	平
29	山	平
30	山	平
31	山	平
32	山	平
33	山	平
34	山	平
35	山	平
36	山	平
37	山	平
38	山	平
39	山	平
40	山	平
41	山	平
42	山	平
43	山	平
44	山	平
45	山	平
46	山	平
47	山	平
48	山	平
49	山	平
50	山	平
51	山	平
52	山	平
53	山	平
54	山	平
55	山	平
56	山	平
57	山	平
58	山	平
59	山	平
60	山	平
61	山	平
62	山	平
63	山	平
64	山	平
65	山	平
66	山	中
67	山	中
68	山	中
69	山	中
70	山	中
71	山	中
72	山	中
73	山	中
74	山	中
75	山	中
76	山	中
77	山	中
78	山	中
79	山	中
80	山	中
81	山	大下
82	山	大下
83	山	大下
84	山	大下
85	山	大下
86	山	大下
87	山	大下
88	山	大下
89	山	大下
90	山	大下



第2図 遺跡位置・分布図

3 層 序 (第3図)

遺跡ののる台地は北から南に、緩かに傾斜しており、地山も台地縁辺部では急激に落込んで、縁辺部には1mを越える厚い縄文時代の包含層を形成している。一方、台地の中央部は15~20cmの表土直下が地山になっている。遺跡の東西と南北の断面柱状図と、縄文時代の竪穴住居跡や、土壙が集中して検出されたY59列の層位断面図を第3図に示した。基本層位としては大きくI~V層に分けられるが、各地区で共通するあり方を示すとは限らないようである。以下、Y59列の層位断面図をもとに略述する。

I層：褐色砂質シルト（表土で厚さは15~30cmである）

II層：暗褐色粘土質シルト（縄文土器片、炭化物を含むが、25~29-75区では暗褐色砂質シルトとなり、次のIIb層である褐色シルトとともに平安時代の遺物を含む。）

III層：黒褐色粘土質シルト（大粒の炭化物と縄文土器片、石器を含む。縁辺部に分布。）

IV層：暗褐色粘土質シルト（黄褐色粘土ブロックや、縄文時代の遺物を含む。）

V層：縄文時代の遺物を多量に含む層で、a：黒褐色粘土質シルト、b：褐色シルト質粘土、c：明褐色細砂を含む暗褐色粘土質シルト、d：暗褐色シルト質粘土、e：黒褐色シルト質粘土、f：暗褐色シルト質粘土に細分される。層厚は20~40cm。

VI層：黄褐色粘土（平安、縄文時代の遺構確認面で、この下に黄褐色砂礫層が続く。）

4 遺構と遺物の分布（付図）

本遺跡からは平安時代前半と縄文時代前期末～中期初頭の遺構が検出され、これらの時代の遺物と、少量ではあるが縄文時代後期の土器片も出土している。以下、平安時代と縄文時代に分けて、その分布の状況を概観する。

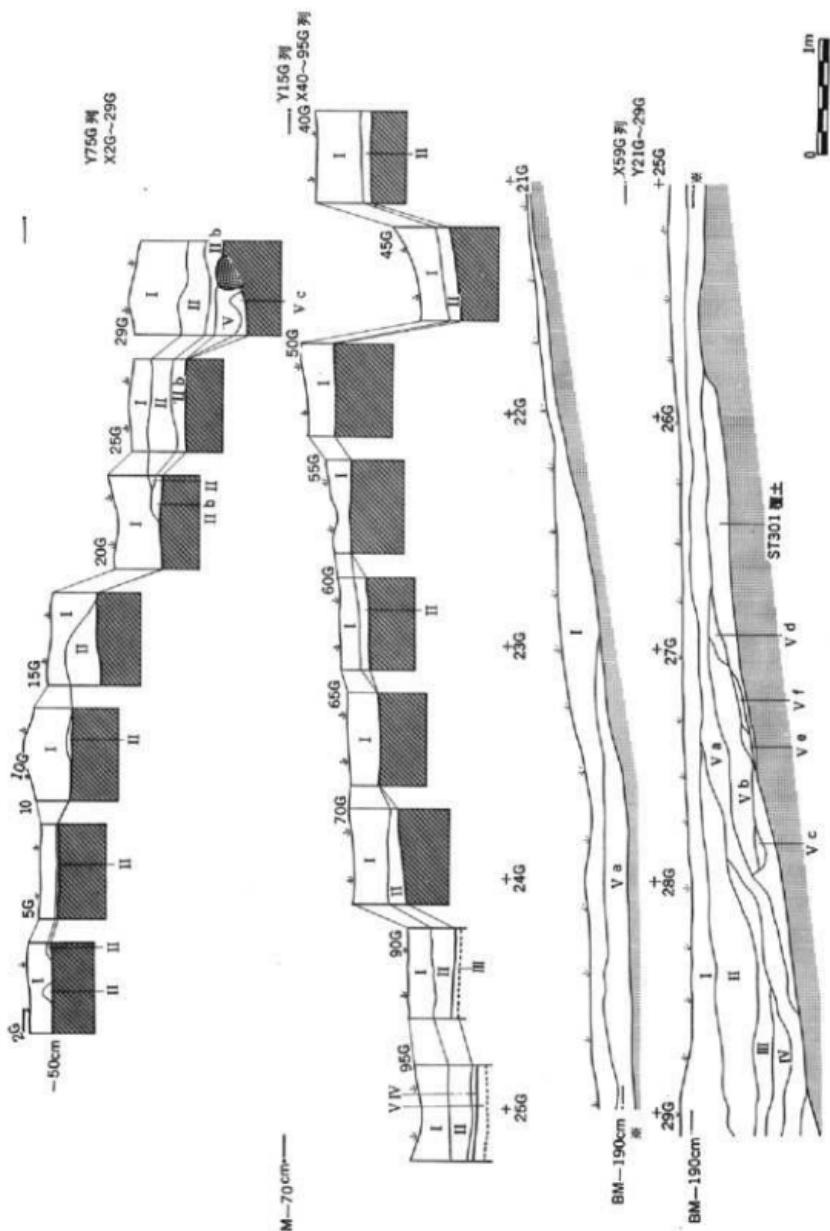
a 平安時代

平安時代の遺構には竪穴住居跡5棟、土壙、ピット群などがあり、竪穴住居跡は、1号住居跡を除き、確認面の標高がほぼ12mのラインにのる。住居跡の長軸または一辺の向きは、ほぼ南北方向に向く。Y65列以北には平安時代の遺構はない。また、土壙、ピット群は2~15-70~80区内の台地中央部に集中して発見された。遺物は整理箱にして7箱程度の土器、土製品が出土したがそのうちの3箱は遺構内から、また、4箱は2~29-70~80区内のI層、II層、IIb層から出土した。

b 縄文時代

縄文時代の遺構はX15以東に広く分布するが、精査が完了したのはY列55~64区内だけである。竪穴住居跡2棟と、81基の土壙が集中して検出され、土壙にはフラスコ状になるものも多い。遺物は、これらの遺構と、III~V層から一括土器32個体のほか、整理箱にして108箱分の磨石などの石器や土器片が出土した。

第3図 土層図



III 平安時代の遺構と遺物

1 穫穴住居跡

今回の拡張精査区ではST1～7までを登録したが、このうち、ST2, 3については竪穴住居跡との確証は得られなかった。

1) 1号住居跡（第4・5図 図版4・5）

2～5-70～73区の地山面で検出した住居跡である。東西4.20m、東西6.04mのほぼ長方形のプランをもつが、南辺から西南隅にかけては壁の立上りを確認していない。また、西辺の南部で不自然な張り出しがあったことから当初は、2棟の切合いも考慮に入れて精査を進めたが、平面的にも、また断面観察によっても確認することはできなかった。北東隅と南東隅を結ぶ線は北から西にわずか1度弱振れていますが、南北棟とみてよい。

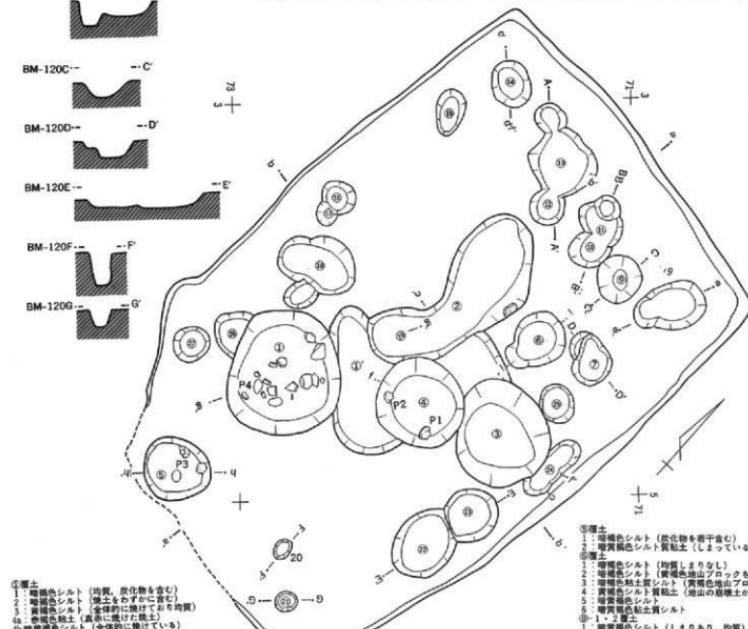
北辺と東・西辺の北部で、やや傾斜をもって立上る高さ10cmほどの壁が検出されたが、地山の絶対高が低い南部では顕著ではない。床面は地山面を利用しているが、この床面精査では大小27の土壙、ピット等が検出された。これらの土壙、ピットは2～3時期の切合いで認められる。このうち、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮のピットが柱穴としての可能性をもつと考えられるが、⑬が34cmと深いほかは、いずれも20cm未満と浅い。また、土壙のうち、①、②は焼土、焼面を伴うもので炉跡と考えられる。そして、④、⑤は、前者が径90cm、後者が径65cm前後と規模は異なるが、同じような覆土をもち、ともに杯の一括土器が出土した。

住居跡の覆土は4層に分けられた。そして、この覆土や、床面発見の土壙からは多くの土器が出土した。そのうち、実測可能なものについては第5図に示した。

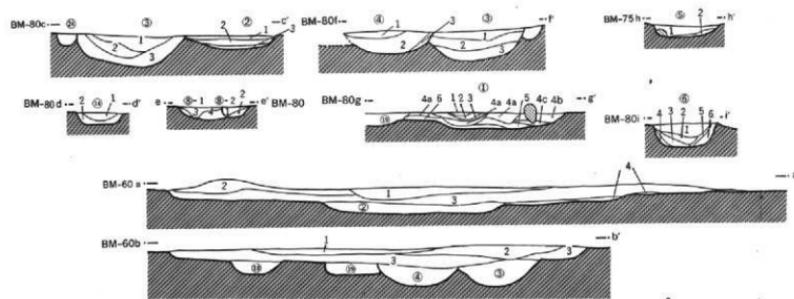
1は土師器の杯蓋である。外面天井部はナデが施され、切り離しの状況は不明である。内面は、天井部が放射状の体部から口唇部にかけては口縁に平行するヘラミガキが施され、その後に黒色化処理を受けている。つまみは中央の窪むものがつけられている。2～5は須恵器の杯蓋である。いずれも回転ヘラ切りによって切り離されており、ケズリ調整は認められない。2には擬宝珠様の、3～5は中央部の窪むつまみがつけられている。2、5は口径が150mm、4は140mm、3は130mmと法量から3種に分けられる。6は高台付杯の底部資料でヘラ切り痕が残されている。7～10はヘラ切りの須恵器杯である。7～9は器高が低く、8は大きな底部から急角度で立上り、7、9は開き気味に立上っている。10は口縁部を欠くが、大形の杯で急角度の立上りを示している。11～12は回転糸切りの須恵器杯で、ヘラ切りの杯よりはやや器高が高い。14は赤褐色を呈し、底部に回転ヘラ切り痕を残す赤焼土器の杯である。

STI, ピット土壤一覧

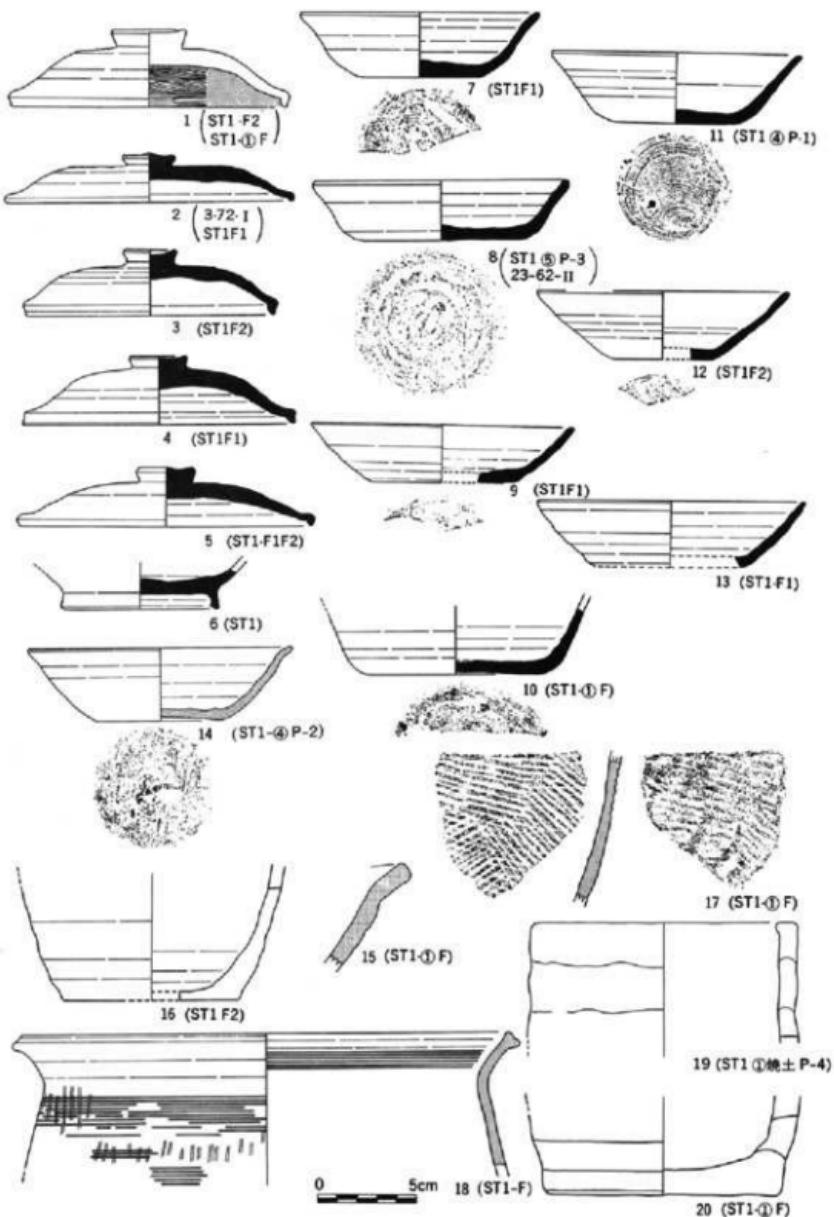
%	深さ	土	標示	%	深さ	土	標示	%	深さ	土	標示
①	10cm	明褐色シルト		②	10cm	暗褐色シルト		③	17cm	暗褐色地シルト	
④	10cm	明褐色シルト		⑤	10cm	暗褐色シルト		⑥	15cm	暗褐色シルト	⑦切られ
⑦	10cm	明褐色シルト	⑧切られ	⑧	10cm	暗褐色シルト	⑨切られ	⑩	13cm	暗褐色シルト	⑪切られ
⑪	10cm	やや緑の暗褐色シルト	⑫切られ	⑫	10cm	暗褐色シルト	⑬切られ	⑬	16cm	灰褐色地シルト	⑭切られ
⑬	20cm	明褐色地シルト	⑭切られ	⑭	20cm	明褐色地シルト	⑮切られ	⑮	8cm	黄土色の暗褐色シルト	⑯切られ
⑯	10cm	明褐色シルト	⑰切られ	⑰	10cm	明褐色シルト	⑱切られ	⑱	13cm	暗褐色シルト	
⑲	10cm	暗褐色地シルト	⑳切られ	⑳	10cm	明褐色シルト	㉑切られ	㉑	13cm	暗褐色シルト	



1: 売土
 2: 暗褐色シルト (均質に付ける)
 3: 明褐色シルト (均質に付ける)
 4: 暗褐色シルト (均質に付ける)
 5: 明褐色シルト (均質に付ける)
 6: 暗褐色シルト (均質に付ける)
 7: 明褐色シルト (均質に付ける)
 8: 暗褐色シルト (均質に付ける)
 9: 明褐色シルト (均質に付ける)
 10: 暗褐色シルト (均質に付ける)
 11: 明褐色シルト (均質に付ける)
 12: 暗褐色シルト (均質に付ける)
 13: 明褐色シルト (均質に付ける)
 14: 暗褐色シルト (均質に付ける)
 15: 明褐色シルト (均質に付ける)
 16: 暗褐色シルト (均質に付ける)
 17: 明褐色シルト (均質に付ける)
 18: 暗褐色シルト (均質に付ける)
 19: 明褐色シルト (均質に付ける)
 20: 暗褐色シルト (均質に付ける)



STI 土
 1: 暗褐色シルト質粘土 (粘性強く、変化物、赤色粒子を含む。やや緑色調)
 2: 暗褐色シルト (変化物をわずかに含む。均質であります)
 3: 明褐色シルト質粘土 (均質な粘土を含む。均質であります)
 4: 暗褐色シルト (均質な粘土を含む。均質であります)



15は赤焼土器壺の口縁部資料である。口縁部は短かく外反し、口唇部は若干上方につまみ出されて肥厚している。16は赤焼土器の平底の甕である。体部は下半までロクロ調整となっておりケズリはなく、また、底部はナデ調整を受けており、切り離しは不明である。17、18も甕であるが、体部にタタキが認められる。17は体部中央から下半にかけての資料で内、外面ともに平行タタキ、アテが施されている。18は口径260mmをはかる大形の甕で、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は上方にわずかにつまみ出されている。19・20は輪積痕を残す厚手の土器で、共に二次的な火熱を受けている。19は焼土を伴う土壙①から出土した口縁部資料で、ほぼ直立する平坦な口縁をもつ。また、20はその底部資料で内面は凹凸があるが、底部外面はナデによって平坦になっている。この土器は大半が細片となり、底部資料から判断して最低2個体、破片数にして208片が出土した。

ほかに、破片資料として、刷毛目をもつ土師器甕が18片、須恵器蓋が33片、杯が27片、赤焼土器甕が87片、赤焼土器ないしは土師器の甕であるが細片や風化が著しいことから判別ができない資料247片が出土した。

2) 4号住居跡（第6、10図 図版6）

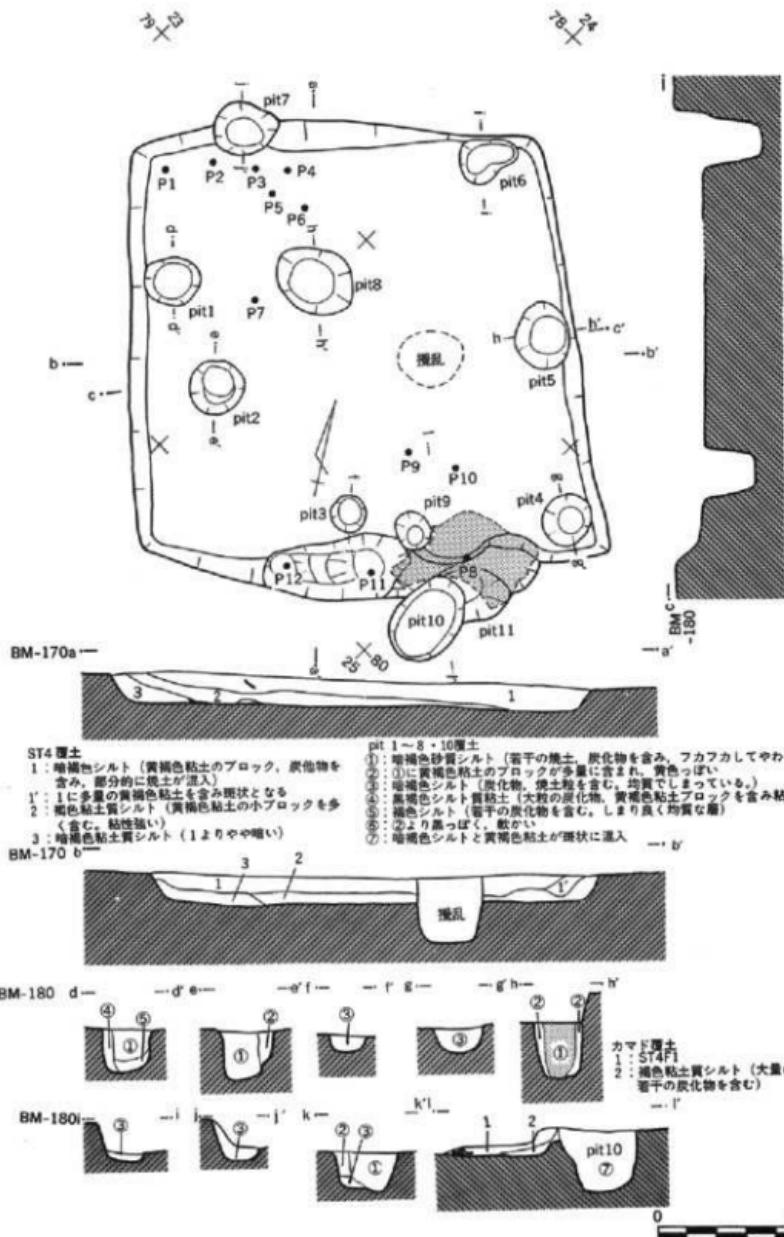
23~25-78~80区において地山面で検出された住居跡である。北辺2.80m、西辺2.75m、南辺3.20m、東辺2.90mをはかる、南東隅がやや突出する略方形のプランをもつ。西辺の方向は北から西に11度の振れをもつ。住居跡の壁は確認面からの高さが15~20cmで、やや傾斜して立上っている。床面は黄褐色粘土の地山を利用しているが硬く叩きしめられている。

住居跡の床面で発見されたピットは、1~6、8、9の合わせて8個で、ピット7は住居跡に切られ、10・11は住居跡を切っている。このうち、割合深く、アクリないしは抜取痕が認められる1、2、5、8のいずれかが主柱穴とみられる。

南辺東寄りにカマドの袖とみられる床面よりは一段高い施設が認められた。両袖に囲まれた部分は掘り込みは確認できず、また、主要部が新しい時期のピット10・11に切られていたが、ここを中心として東西約80cm、南北約60cmの範囲の床面と壁の一部は真赤に焼けている。

また、カマドと考えられる施設のすぐ西には長さ約1m、幅40cmの落込みがあり、最も低い東端では床面から20cmの深さを測る。部分的な周溝とも考えられる。図版6上段では他に2基の土壙があるが、床面でプランを確認したことから縄文時代の袋状ないしはフランコ状の土壙を誤って掘り下げたものである。

住居跡の覆土は3層に分かれ、床面直上、ないしはやや浮いた状態で、カマドの西部とピット8の東部に多数の角礫が検出されたが、住居廃絶後の投棄と考えられる。覆土から



第6図 4号住居跡

は1層から土師器壺1片・輪積痕のある土器7片、2~3層から須恵器壺1片、土師器壺2片の合わせて11片の土器が出土しただけであるが、床面直上からはまとまった土器が出土している。その出土地点については第6図に示した。

第10図21、22は須恵器の壺である。21は風化が激しく断定はできないが、ともに天井部外面にヘラケズリはないようである。22には墨痕が認められる。23は大形の高台付杯で、体部と底部の境界が明瞭で体部は急角度で立上っている。24・25はヘラ切り無調整の杯である。両者とも器高が39mmとヘラ切りにしては高く、24は急角度で、25は開き気味に立上っている。26~28は須恵器壺の体部破片である。3片とも別個体であり、26・27の外面は格子目ふうのタタキが、内面には青海波のアテが施されている。28の外面は格子目ふう、ないしは平行タタキがナデによって消され、内面には弧状のアテが施されている。

29、30は赤焼土器の壺である。ともにタタキのある丸底の壺で29は体部下半から底部にかかる部分で、外面には格子目タタキ、内面には平行アテが施されている。30は体部中央から底部までの資料で、P1~5の住居跡北西寄りの床面出土の破片と27~79区の包含層から出土した破片が接合した。外面は格子目ふうのタタキが施された後、体部中程まで底部に向うヘラケズリが施されている。内面も同じく格子目ふうのアテが施され、その後、体部中程までカキメが施されている。外面にはススが付着している。

31はカマド周辺からまとめて出土した輪積痕のある土器で二次的な火熱を受け焼けている。ほぼ直立しており、口唇部は平坦で、わずかに内湾する。図示できなかったが平底の底部も出土している。

3) 5・6号住居跡(第7・8、10図 図版7)

24~26・72~74区で検出した切り合いのある住居跡である。確認面は両住居跡の北半では黄褐色粘土の地山で、南半は縄文時代の包含層を切っていた。また、5号住居跡が6号住居跡を切っている。

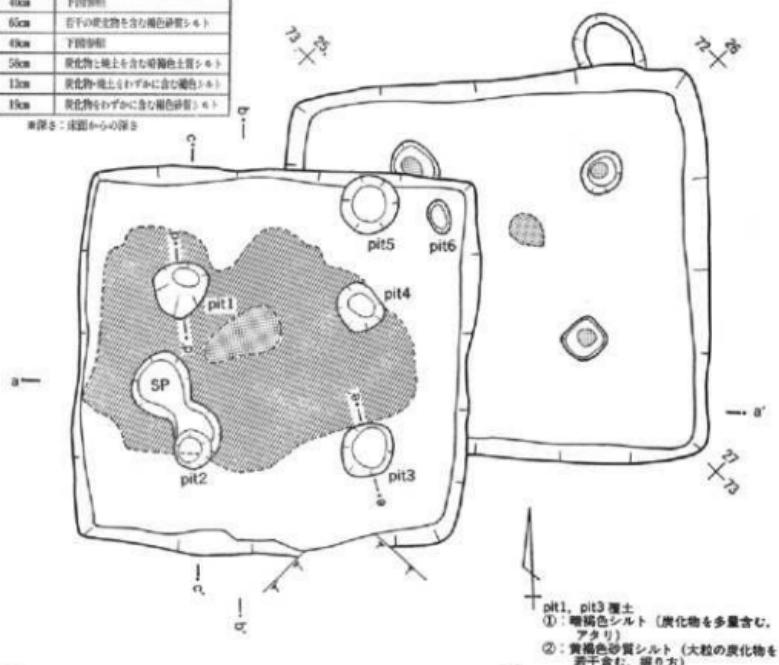
5号住居跡は北辺が2.62m、西辺が2.50m、南辺が2.52m、東辺が2.46mと、ほぼ一辺が2.5mの方形プランをもち、北西隅、南西隅を結ぶ線は北から1度東に振れるだけで、各辺はほぼ東西南北の線にのっている。住居跡の壁は確認面の絶対高の低い南側では30cm前後、北側では40cmの高さを検出し、床面から急角度で立上っている。床面は地山を利用しており、中央部には炭化物が敷き詰められたような状態で検出された。編物の痕跡は確認できなかったが、何らかの敷物の残存とみられる。また、床面の中央に東西50cm、南北25cm前後の焼面が検出された。地床炉と考えられる。

床面で発見されたピットは1~6の6個で、そのうち、中央にあり床面から40~65cmの深さをもつ1~4が主柱穴と考えられる。ピット1、3には明確なアタリが認められた。

ST5 ピット一覧

	深さ	土
pit 1	40cm	下層地盤
pit 2	65cm	若干の炭化物を含む褐色砂質シルト
pit 3	40cm	下層地盤
pit 4	55cm	炭化物・地土を含む褐色土質シルト
pit 5	110cm	炭化物・地土を含む褐色シルト
pit 6	110cm	炭化物をわずかに含む褐色砂質シルト

*深さ：床面からの深さ



ST5 地土

1 黄褐色シルト [黄褐色粘土、焼土、炭化物をそれぞれわずかに含む。全体的に砂っぽい]

2 黄褐色シルト [添加物少なめ・均質な層]

2' 黄褐色シルト [黄褐色粘土ブロックを多く含み、斑状となる]

3 黄褐色粘土質シルト [炭化物をわずかに含む。黄褐色粘土ブロックを大量に含み斑状となる]

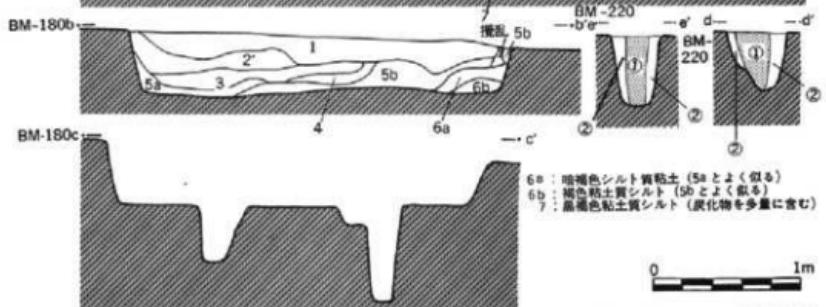
4 黄褐色シルト [炭化物を含むが均質]

5 黄褐色シルト [炭化物を含むが均質]

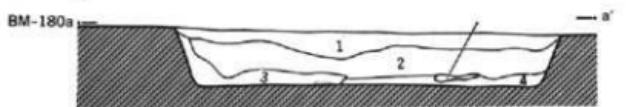
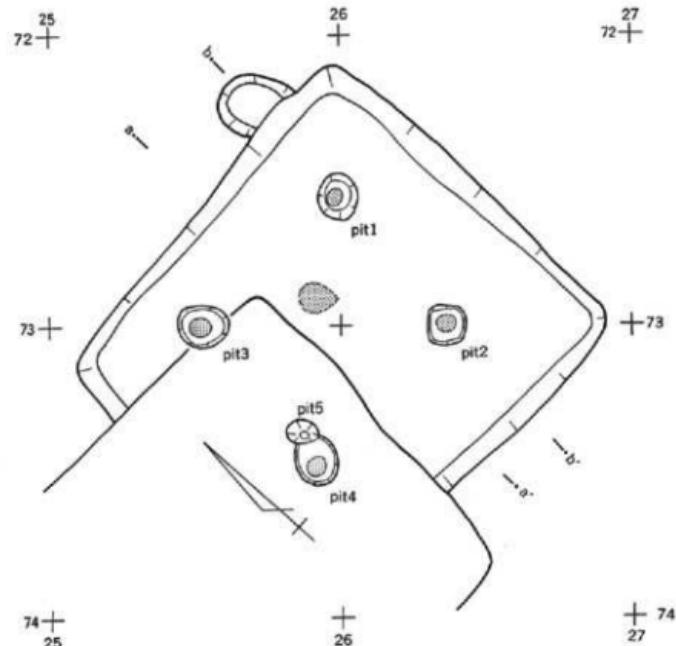
5b 黄褐色シルト質粘土 [大粒の炭化物を若干含み、径 1cm 大の黄褐色粘土ブロックも含む。しまりなくカクカクする]

BM-180a -

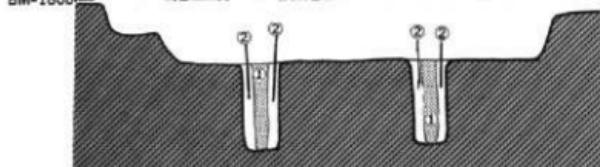
- pit1, pit3 土
 ① : 黄褐色シルト (炭化物を多量含む。
 アクリ)
 ② : 黄褐色土質シルト (大粒の炭化物を
 若干含む。握り方)



第7図 5・6号住居跡



ST6 覆土 1: 單褐色シルト (炭化物をわずかに含むが均質な層)
2: 單褐色シルト (よりやや暗く、焼土ブロックと大粒の炭化物を若干含む)
3: 單褐色シルト (より黒味が強く、後 2cm 大の地山ブロック、大粒の炭化物を含む)
4: 褐色粘土質シルト (黄褐色粘土のブロックをわずかに含む)



pit1, pit2 覆土
①: 單褐色砂質シルト (径 2mm 大の炭化物、焼土粒を含む。
若干粘性があるが全体的にしまりがなく、やわらかである。アクリ)
②: 褐色砂質シルト (掘り方の覆土)



ST6 ピット一覧

	床面からの深さ	覆土
Pit 1	62cm	いずれも掘り方は褐色砂質シルト。
Pit 2	56cm	15cm前後円形のアクリは、上図の
Pit 3	42cm	①のとおり
Pit 4	43cm	
Pit 5	17cm	炭化物をわずかに含む褐色砂質シルト

覆土は部分的に堆積するものも含め7層に大別できる11枚の層から成っていた。平安時代の遺物は1層から15点、2～4層から4点、5～7層から4点の合わせて23点が出土しただけで床面にのる遺物は1点もなかった。覆土から出土した遺物の内訳は内黒の土師器杯の体部破片が1片、須恵器杯のヘラ切りの底部破片が1片、体部破片が2片、赤焼土器の壺の口縁部破片が2片、体部破片が11片、輪積痕の残る土器が5片、土錐1点である。

第10図32は赤焼土器壺の口縁部資料である。小形の壺で口縁部は「く」の字状に強く外反し、さらに口唇部は上方につまみ出されている。33は手捏ねで製作された土錐である。

6号住居跡は北辺が2.73m、東辺が2.58mをかる東西がやや長い住居跡で、北東隅と南東隅を結ぶ線の方向は磁北の線と合致する。住居跡の壁は確認面から35～40cmの高さをもち、床面から急角度で立上っている。床面のレベルは一部で5号住居の方が低くなっていたが、段差がつくほどではなかった。床面中央やや北東寄りに径20cm前後の焼面があり、地床炉と考えられる。

床面からは5個のピットが検出されたが、このうちピット5は5号住居跡のもの可能性がある。ピット1～4はいずれも径ないしは1辺が25～30cmの円形ないしは隅丸方形のプランをもち、そのほぼ中央に径15cm前後の円形のアタリが認められた。深さは42～62cmと深く、4本柱によって上屋を支えていたと考えられる。

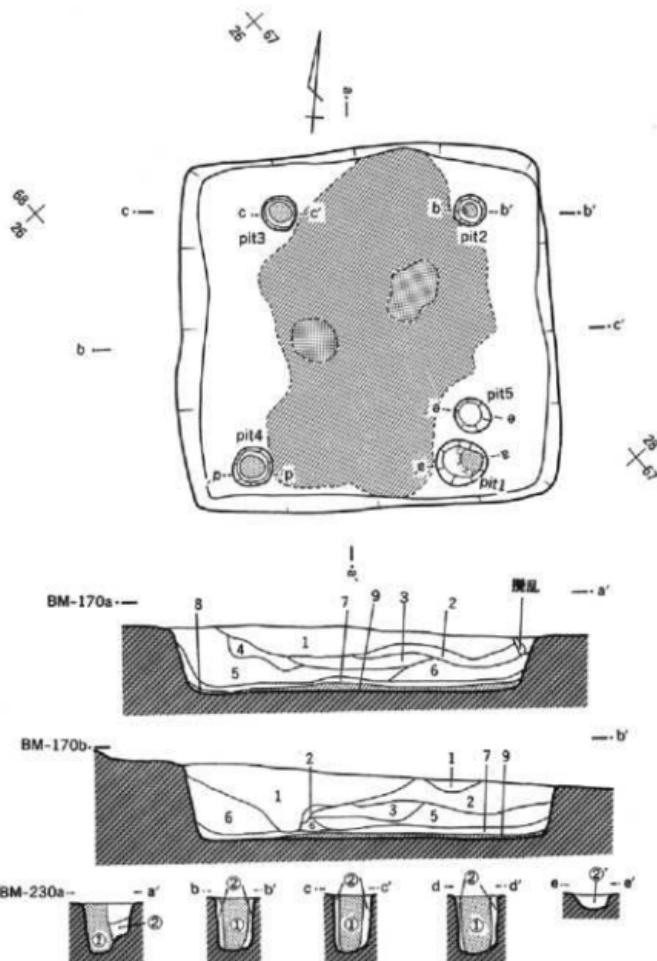
覆土は4層に分けられ、平安時代の土器は1層から7片出土しただけである。内訳は土師器壺の体部破片が1、ヘラ切り痕をもつ須恵器底部破片が2、赤焼土器壺の体部破片が2、輪積痕のある土器が2片である。

第10図34はこのうちの赤焼土器壺の体部破片で外面、内面ともに平行タタキ、アテが施されている。

4) 7号住居跡(第9・10図 図版8)

26～28-66～68区において地山である黄褐色粘土の上面で検出した住居跡で、縄文時代の土壤を数基切っている。北辺が2.40m、西辺が2.32m、南辺が2.24m、東辺が2.24mをかるほぼ方形の住居跡で北東隅と南東隅を結ぶ線は北から西に8度の振れがある。住居跡の壁は確認面の絶対高の高い北西部では約50cm、低い南東部で35cm前後の高さをもち、急角度で立上っている。床面は大半が地山を利用していたが、南西隅からピット4付近まで縄文時代の土壤の覆土の上に一部黄褐色粘土の貼床が認められた。また、5号住居跡と同様、床面中央部には炭化物の層(F9)が検出され、何らかの敷物の存在を窺わせる。床面中央やや北東寄りと西寄りの2ヶ所に地床炉とみられる焼面があった。

床面で発見されたピットは5個で、そのうち、1～4が35～43cmと深く、径25～30cmのほぼ円形の掘り方をもち、径15～20cmのアタリが明瞭に認められたことから、主柱穴と考



- ST7
- 暗褐色シルト (炭化物を若干含むが均質)
 - 褐色シルト (大粒の黄褐色粘土ブロックを若干含む)
 - 暗褐色シルト (径 1cm 大の黄褐色粘土ブロックが混入し塊状となる)
 - 暗褐色シルト (1 よりやや細く、若干の粘土、炭化物、混入する)
 - 褐色粘土質シルト (2 より細く、大粒の炭化物、径 1cm 大の黄褐色粘土ブロックを含む)

- 褐色粘土質シルト (若干の粘土、炭化物と、径 5cm 大の黄褐色粘土ブロックを含む)
- 暗褐色粘土質シルト (均質で混入物少ないと)
- 黄褐色粘土 (部分的に櫻花の床面にのる)
- 黄褐色粘土 (床面にのる炭化物、炭化物の痕跡か?)

BM-170c -



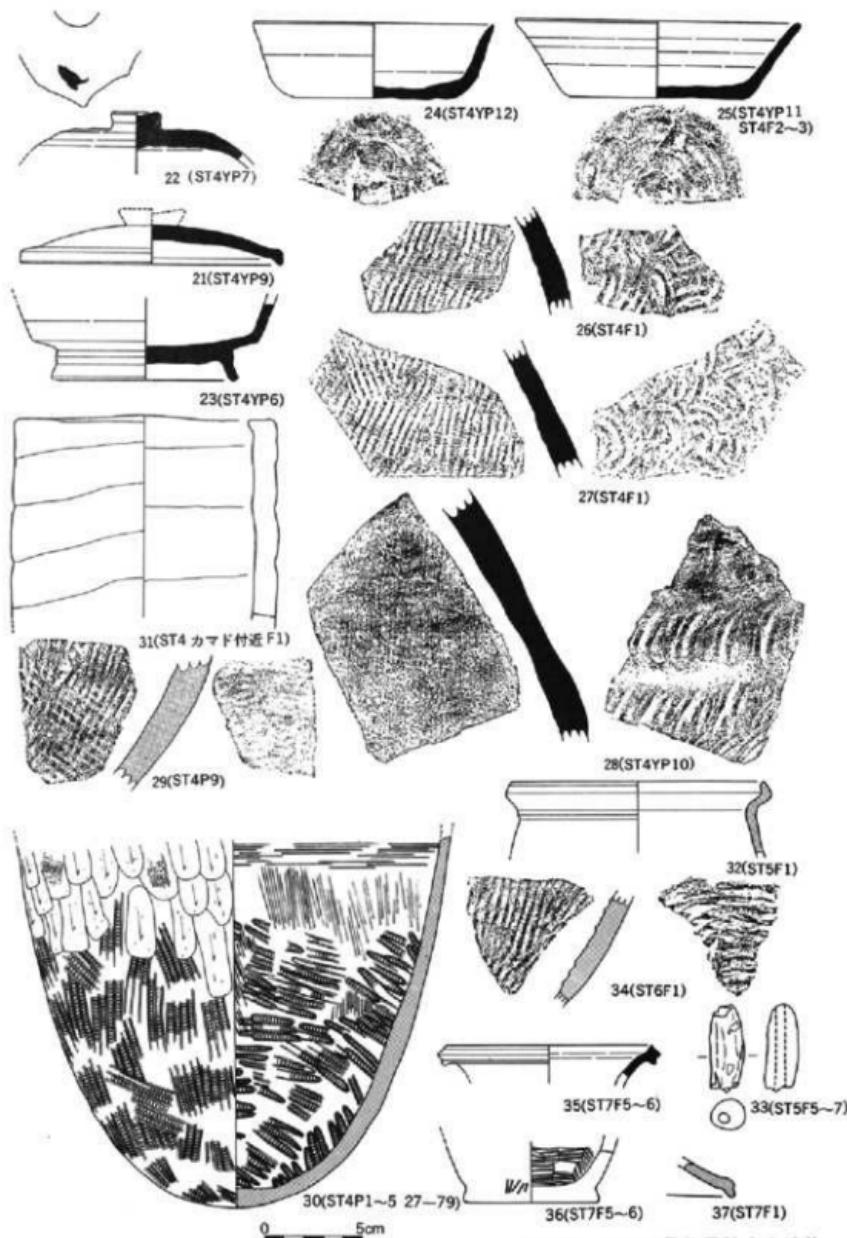
0 1m

-22-

S T 7 ピット一覧

	床面からの深さ	覆 土
Pit 1	35cm	①: 暗褐色粘土質シルト (炭化物含む) / ②: 黄褐色粘土質シルト (櫻花方理土)
Pit 2	37cm	
Pit 3	40cm	
Pit 4	43cm	③: 暗褐色粘土質シルト (炭化物含む)
Pit 5	10cm	

第9図 7号住居跡



第10図 4～7号住居跡出土遺物

えられる。

覆土は9層に分けられたが、その最下層は前述した炭化物の層である。平安時代の土器は覆土1層から3片、5~6層から4片、pit3の掘り方から2片の計10片が出土した。内訳は土師器甕の底部が1片、須恵器杯の口縁部が2片、須恵器の壺の口縁部が1片、赤焼土器の蓋の口縁部が1片、甕の体部破片が3片、輪積底のある土器2片である。

第10図35は須恵器の壺の口縁部資料で、内外面に自然釉が認められる。36は土師器の甕の底部資料で内外面に刷毛目が施され、底部端が突出している。37は赤焼土器の蓋とみられる資料で、本遺跡でも唯一のもので、山形県庄内地方でも現在までのところ類例はない。

2 土 壤 (第11・12図)

平安時代の土壤は2~15~70~80区内で11基検出された。確認面はいずれも黄褐色粘土の地山層である。

8号土壤

10~78区で検出された、南北70cm、東西78cmのほぼ円形を呈する土壤である。確認面からの深さは8cmと浅いが、赤褐色粘土の覆土には細かなカナクソが含まれており、周囲は焼けていた。土器片の出土はない。

37号土壤

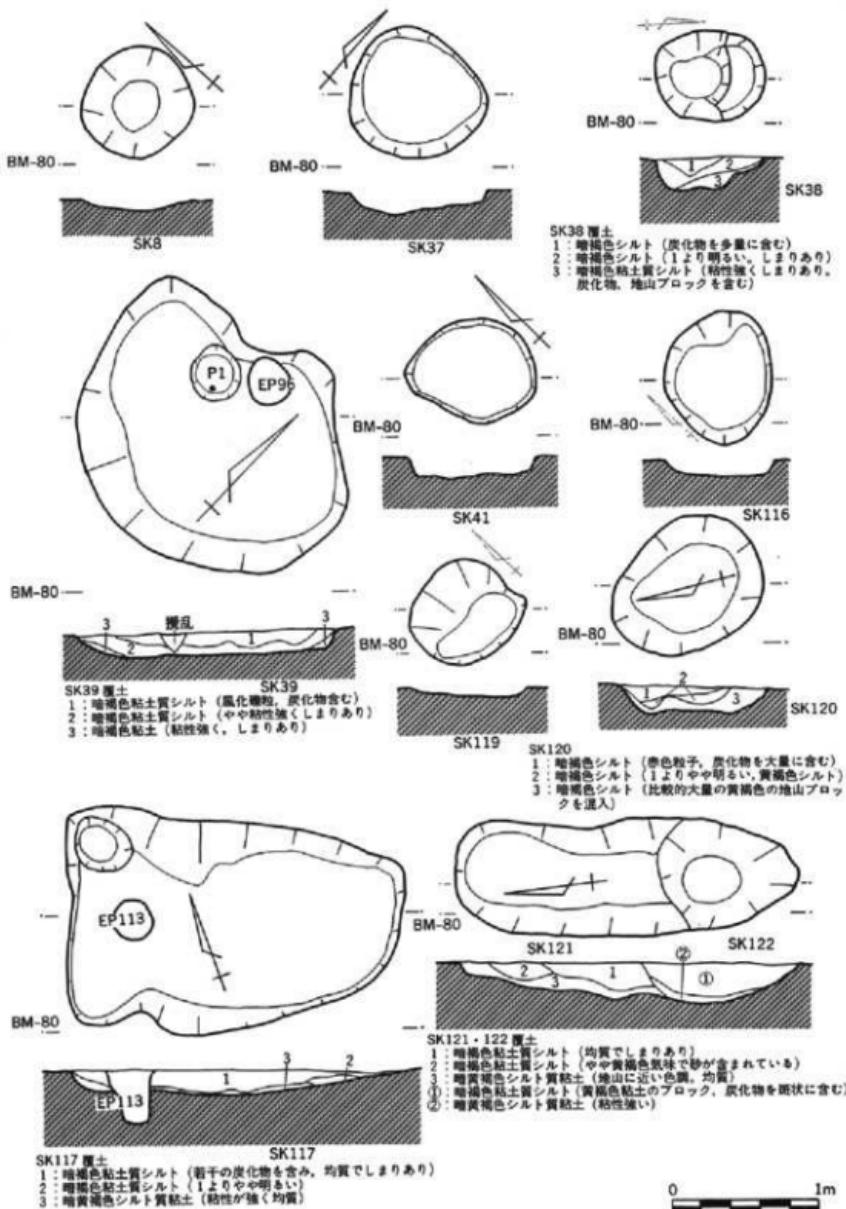
8~77区で検出された南北87cm、東西92cmの不整円形のプランをもち、確認面からの深さは最も深いところで16cmをはかる。底面は凹凸をもち南側でゆるやかに、北側で急角度で立上る。覆土は炭化物を若干含む暗褐色シルトの単一層で、赤焼土器のタタキをもつ甕が3片、ロクロ整形のものが3片、同じく平底の底部が1片、輪積底の残る土器が5片の他、第12図38に示した大形の須恵器杯もしくは高台付杯が出土した。なおこの資料には1号住居跡の覆土1層から出土した破片が接合している。

38号土壤

9~10~77~78区で検出された南北75cm、東西62cmの橢円形のプランをもつ土壤で、北部に段が認められた。確認面からの深さは21cmをはかり、覆土は3層に分けられたが、遺物の出土はない。

39号土壤

9~10~79~80区で検出された南北180cm、東西204cmの不整橢円形のプランをもつ土壤である。E P96によって切られており、底面で径36cm、深さ55cmのピットが検出された。確認面からの深さは15cm前後をはかり、底面はほぼ平坦、北部で急角度で、それ以外ではゆるやかな立上りを示す。覆土は3層に分けられ、第12図39~44に示した土器の他、以下の土器片が出土した。土師器杯の体部1、甕の体部8、須恵器蓋の体部が3、杯の口縁部



第11図 土壌平面・断面

が4、体部1、ヘラ切りの底部2、壺5、甕1、赤焼土器の杯口縁部5、体部4、甕の口縁部が2、タタキのある体部11、ロクロ整形の体部10、輪積痕のある土器が14である。

第12図39はヘラ切りの小形の須恵器杯である。40は赤焼土器の杯で、底部は回転糸切り無調整である。口径の割に器高は高く、内面はナデによって平滑に仕上げられている。41、42は甕の口縁部資料である。46の口縁部は「く」の字状に短かく外反した後、口唇部が上方につまみ出されている。また、42の口縁部は、ほぼ直角に上方に曲げられ、明瞭な段を形成している。43は赤焼土器甕の体部下半から底部にかけての資料でピット内から出土した。外面、内面ともに平行タタキ・アテが観察される。44は赤焼土器の壺の口縁部資料で、一旦外反したあとで口唇部が上方につまみ出されている。

41号土壤

5・6-77区で検出された南北78cm、東西73cmの西側がやや張り出す土壤で、底面は若干の凹凸をもち、全周で急角度で立上る。確認面からの深さは15cmをはかり覆土は暗褐色シルトの單一層で遺物の出土はない。

116号土壤

8-74区で検出された南北82cm、南北78cmの不整円形の土壤で、底面はほぼ平坦、東部で急に、それ以外はゆるやかな立上りとなっている。確認面からの深さは10cm前後で、覆土は炭化物を含む暗褐色粘土質シルトの單一層で、風化の著しい縄文土器が2片出土した。

117号土壤

8・9-79・80区で検出された、東西227cm、南北164cmの不整な長方形の土壤で、E P 113に切られ、底面の北西隅で深さ35cmのピットが検出された。底面は中央部に向ってゆるやかに傾斜し、最も深いところで確認面から18cmをはかる。覆土は3層に分かれ、須恵器の口縁部破片1、ヘラ切りの底部1片、輪積痕の残る土器が7片出土した。

119号土壤

9-79区で検出された東西72cm、南北66cmの不整円形の浅い土壤である。覆土は炭化物と赤色粒子を含む暗褐色粘土質シルトの單一層で、遺物の出土はない。

120号土壤

9-74区で検出された東西106cm、南北87cmの長円形の土壤である。底面はやや凹凸をもち、確認面からの深さは18cm前後で、覆土は3層に分けられた。覆土1層から須恵器蓋と杯の口縁部破片がそれぞれ1片、赤焼土器の甕の口縁部が1片、タタキのある体部破片が2片、ロクロ整形の破片が2片、輪積痕の残る土器が5片出土した。

121・122号土壤

120号土壤に隣接する土壤で122号が121号を切っている。122号は東西75cm、南北が107cm

の長円形の土壤で底面は鍋底状を呈し、確認面からの深さは29cmをはかる。覆土は2層に分けられたが遺物の出土はなかった。121号は東75cm、南北は恐らく200cm前後となる長円形で土で中央部が深くなる土壤で、底面は凹凸があり、最も深いところで、確認面から36cmをはかる。覆土は3層に分けられたが、遺物の出土はなかった。

3 ピット群（付図、第12図 図版24）

2~14~70~80区内では合わせて220個強のピットを検出した。これらのピットは直径20~40cmで、確認面からの深さが20~60cmであったが、40cm前後のものが最も多かった。しかし、掘立柱建物や柱列としての把握はできなかった。このうち、遺物が出土したのは16個と少なかったが、10~78区のE P100からは一括土器を含む20片余りの土器が出土した。第12図45は土師器の高台付杯である、内外面とも風化が著しく調整については不明であるが、内面は黒色処理が施されている。また、46、47は壙の口縁部資料である。

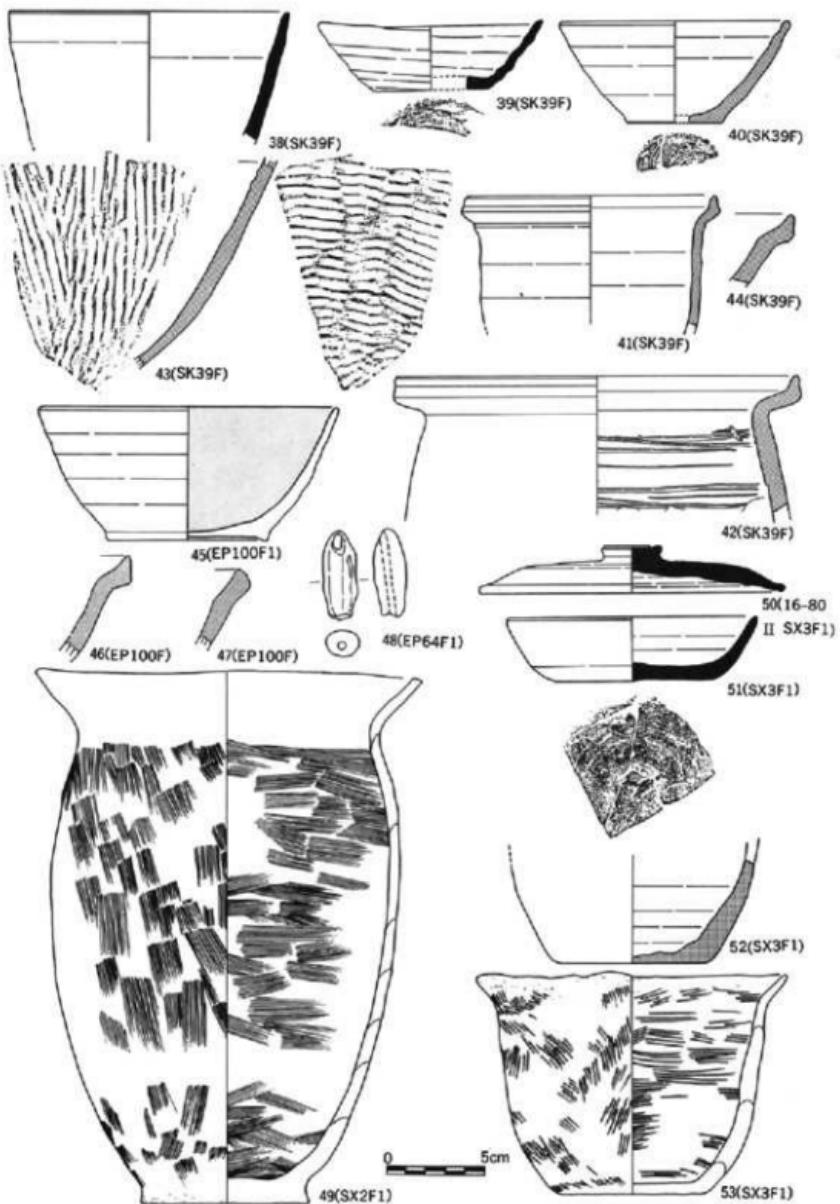
48は8~77区で検出したE P64から出土した土錘で手捏ねによって成形されている。

4 性格不明の落込みから出土した土器（付図 第12~13図）

当初は竪穴住居跡として登録して精査を進めたが、壁の立上り状況や、柱穴とみられるピットがないことから最終的にはその性格を明らかにできない落込みが2ヶ所で検出された。ひとつは15・16~74・75区で検出したS X 2で、もうひとつは11~13~77~80区で検出したS X 3である。両者とも覆土には平安時代の土器が含まれていた。

第12図49はS X 2の覆土から出土した土師器の甕である。口縁部は「く」の字状に長く外反し、頸部で一旦収縮したあと体部がややふくらみをもつ。底部端は突出している。口縁部内外面はヨコナデが施され、体部外面には概ね縦方向の、そして内面には横方向の刷毛目調整が施されている。

第12図50から第13図54はS X 3から出土した土器である。50は須恵器の蓋である。口径は比較的大きく、器厚は厚い。天井部外面は外転ヘラ切り無調整で中央の窪みつまみが付けられている。また、外面には自然釉が付着し、一部は二次的な火熱で剥落を見せている。51はヘラ切り無調整の杯である。52は赤焼土器甕の底部資料で、内面にはロクロによる凹凸が観察されるが、体部外面と底部はナデによって平滑に仕上げられており、切り離し技法は不明である。53は土師器の甕である。最大径は口縁部にあり、この値は器高よりも大きい。口縁部は単純に「く」の字状に外反し、内外面ともヨコナデが施されている。器壁は二次的な火熱によって剥落し、保存状況は良いとは言えないが、体部内外面には刷毛目が観察される。底部はナデによって平滑に仕上げられている。54は須恵器甕の底部資料で、外面には格子目ふうタタキ、内面には上部に青海波のアテが、また、底部付近は雜な刷毛目ふうのナデが施されている。



第12図 土壙・ビット・落込み出土土器

5 遺構外出土の遺物（第13・14図）

基本層位のI・II層からは平箱にして4箱分の平安時代の遺物が出土した。そのうち実測可能なものは第13、14図に示した。また、供膳形態の杯、高台付杯の底部破片は図示したもの以外に80点あったが、その組成については表-1に示した。須恵器が全体の9割近くを占め、そのなかでもヘラ切りの杯が圧倒的に多いことが指摘できる。

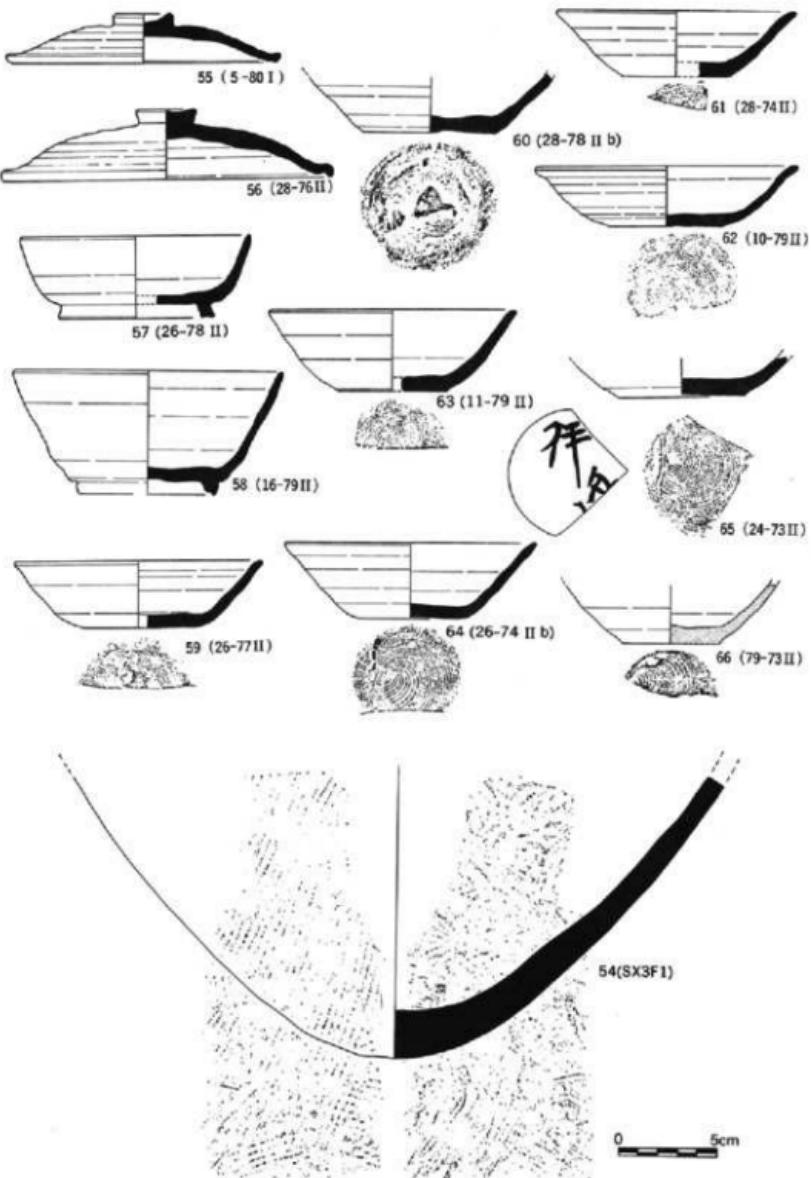
第13図55は須恵器の蓋で、天井部外面に回転糸切りの痕跡を残す唯一の例である。口縁部は玉縁状になり、中央部が窪むつまみがつけられている。56は本遺跡から出土した蓋の中では最大の口径をもつ。57、58は高台付杯で57は底径は大きいが器高は低く、58は器高が高い。59、60はヘラ切り無調整の杯で59は体部下半でやや丸味をもって立上り、60は大きな底部から直線的に開いている。61～65は回転糸切り無調整の杯である。61、62は器高が低く、61は直線的な立上りを示し、62は体部中程にふくらみをもつ、ともに口縁部は外反している。これらにくらべて63、64は器高が高く直線的に外傾している。65は底径の大きな杯でゆるい立上りを示す。底面には「祥」とも読める文字と、もう一文字の墨書がある。第14図67は長頭壺の口頭部資料で口縁部を若干欠く。頭部の接合はいわゆる三段接合となり、接合部の外面には回転ヘラケズリが施されている。68は壺の底部資料、69も恐らく壺の底部で体部下半には手持ちヘラケズリの後、最終的に回転ヘラケズリが施されている。

66は赤焼土器の底部資料で小さめの底部からやや急に立上っている。底部は回転糸切り無調整である。70～74は赤焼土器の壺である。70は口径が160mmの中形の壺で口縁部に最大径をもつ。口縁部は「く」の字状に強く外反し、口唇部が長く上方につまみ出されている。71は口縁部に最大径をもつ恐らく長胴形の壺で、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は肥厚する。72は口縁部が長く外反した後、やや内湾気味に折れ曲って明瞭な段を形成する壺で内面には一部刷毛目状のナデが観察される。74は器壁は厚いが形態的には71に類似する。74は体部にふくらみをもつ壺で、口縁部は「く」の字状に外反し、途中からやや内側に向きを変えて口唇に達している。

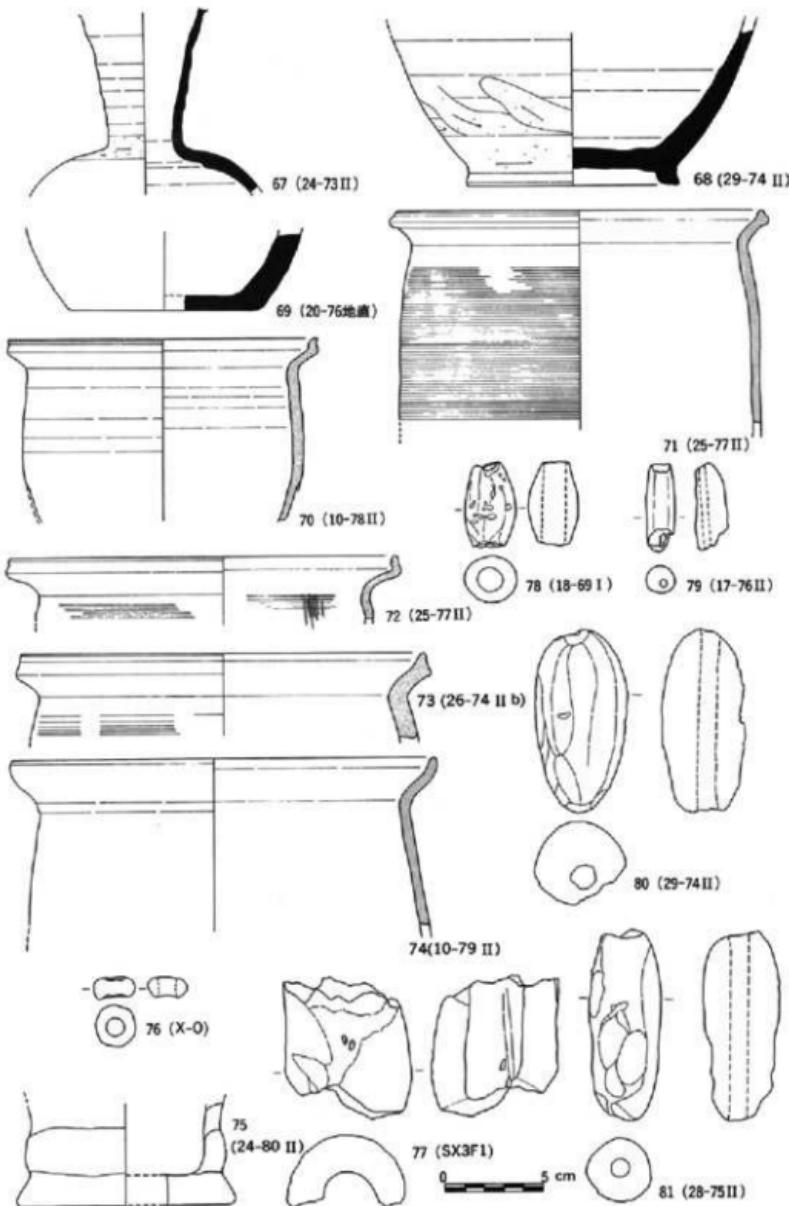
75は輪積痕を残す土器の底部資料で、底部端は突出し、ほぼ直立するように立上っている。

表-1 I・II層出土の杯・高台付杯の底部

	土 器		須 惠 器			赤 焼 土 器	
	糸 切 り	ナ デ に よ り 不 明	ヘ ラ 切 り	糸 切 り	高 台 付	ヘ ラ 切 り	糸 切 り
破 片 数	1	2	54	9	9	1	4
%	1.3%	2.6%	67.4%	11.2%	11.2%	1.3%	5 %



第13図 遺構外出土遺物（1）



76~81は土製品である。76は手捏ねによって成形された環状土製品である。表探資料であるが、同じ遊佐町の宅田遺跡からも出土している(阿部他1983)。77はSX3から出土したフイゴの羽口の破片である。胎土には多量の雲母、白色粗砂が含まれている。風孔径は27mmをはかる。76~81は土鍤である。すべて、手捏ねによって成形されているが、80、81は重さが100gを越える大形の土鍤である。

6 出土土器の年代

近年、山形県庄内地方では圃場整備事業等に関連して20ヶ所以上の平安時代の遺跡が調査され、土器群のおおよその編年が確立されつつあり、絶対年代についての言及も行われはじめている(安部・佐藤1983)。また、遊佐町内の地正面遺跡のSX11とSE3の土器群そして宅田遺跡の土器群の年代については、昭和57年度の宅田遺跡の報告書のなかで筆者らが検討したが、地正面SX11の土器については年代観に若干のズレがある(阿部・渋谷1983)。本遺跡の平安時代の遺物は、昭和59年度に予定されている第2次緊急調査によって増加することは確実で、全体的な土器の分類や、遺構単位の土器による細部の編年の検討は2次報告にゆずり、本報では、今回の調査によって出土した土器群の上限と下限年代について供膳形態の土器を中心として検討してみたい。

平安時代の供膳形態の土器は全体的な流れとして、須恵器杯類ではヘラ切りから回転糸切りへ移行し、須恵器の日常什器に占める割合が減少し、変って赤焼土器の比率が増大するという傾向性が認められる(阿部・渋谷前掲)。この傾向は安部・佐藤氏も指摘している。本遺跡では図示資料と底部資料から合わせて114点の杯、高台付杯を確認したが、その比率をみると、土師器杯が26%、高台付杯が0.9%、須恵器杯のヘラ切りが64.0%糸切りが14.0%、高台付杯(すべてヘラ切り)が11.4%、赤焼土器杯のヘラ切りが1.8%、糸切りが5.2%となり、須恵器の占める割合は9割に近い。また、須恵器杯の底部切り離しをみると、82%がヘラ切り、18%が糸切りで圧倒的にヘラ切りのものが多いことが指摘できる。庄内地方で、これと類似する組成をもつものとして、須恵器が80%となり、そのうちヘラ切りの割合が約85%となる酒田市上ノ田遺跡のSD401の土器群(佐藤他1982a)と、須恵器が93%を占め、そのうちヘラ切りが92%となる遊佐町地正面SX11の土器群(佐藤他1982b)がある。この二つの土器群は上ノ田SD401から地正面SX11へ変遷したものと考えられている(安部・佐藤前掲)。そして、筆者らは地正面SX11の土器群は9世紀前半~中葉という立場をとっている(阿部・渋谷前掲)。したがって本遺跡の土器群は9世紀中葉を下限とすることができ、上限については、なお確証を得てはいないが、4号住居跡の床面出土の杯、高台付杯は9世紀の初頭まで通り得るのではないかと考えている。

表一2 平安時代の図示遺物観察表（1）

遺物 番号	図版 番号	出土地区	種類	断面	焼成	胎土	色調	法量 (mm)			調査			底部	備考
								口径	底径	高さ	外面	内面			
1	ST1F ₂ ST1-QF	土器窯	蓋	良	露胎。粗砂を含む	灰褐色	145	—	39	ロクロ	ミガキ 黒色処理	ナゲ不明			
2	ST1F ₁ 3-72-1	須恵器	フ	良	石英粗砂を含む	淡青灰色	150	—	26	フ	ロクロ	ヘラ切り ナゲ			
3	25	ST1F ₂	フ	フ	良	フ	灰白色	132	—	34	フ	フ	フ		
4	25	ST1-F ₁	フ	フ	良	白色微砂。粗砂を含む	淡青灰色	141	—	34	フ	フ	フ		
5	25	ST1-F ₁ , F ₂	フ	フ	良	白色粗砂を多量含む	淡青灰色	154	—	32	フ	フ	フ		
6		ST1	フ	高台付杯	良	粗砂。小釋を含む	淡青灰色	—	80	—	フ	フ	フ	ヘラ切り 付高台	
7	25	ST1F ₁	フ	杯	良	粗砂を多量含む	淡青灰色	124	62	33	フ	フ	フ	ヘラ切り	
8	25	ST1-QF-3 23-62-II	フ	フ	良	黑色微砂を含む	淡青灰色	132	82	32	フ	フ	フ		
9		ST1F	フ	フ	良	白色微砂を若干含む	青灰色	136	79	30	フ	フ	フ		
10		ST1-QF	フ	フ	不良	石英粗砂を多量含む	灰白色	—	90	—	フ	フ	フ		
11	25	ST1-QF-1	フ	フ	良	混入物少なくち窓	青灰色	129	62	36	フ	フ	回転糸切り		
12		ST1F ₂	フ	フ	良	白色微砂を若干含むがち窓	青灰色	130	72	35	フ	フ	フ		
13		ST1dF ₁	フ	フ	良	粗砂を含む	青灰色	138	52	35	フ	フ	不明(系?)		
14	25	ST1-QF-2	赤焼	フ	良	黑色微砂を含む	赤褐色	136	65	36	フ	フ	ヘラ切り		
15	27	ST1-QF	フ	場	良	石英粗砂を含む	赤褐色	—	—	—	フ	フ			
16		ST1F ₁	フ	壺	良	黑色微砂を若干含む	赤褐色	—	90	—	フ	フ	ナゲ不明		
17		ST1-QF	フ	フ	良	石英粗砂を含む	暗赤褐色	263	—	—	平 タク 行	平行アテ			
18	27	ST1-QF	フ	フ	良	石英粗砂を含む	赤褐色	—	—	—	タク ロクロ	タク ロクロ			
19	26	ST1-QF 土p-4	輪縁土器		良	粗砂を大量含む	赤褐色	139	—	—	輪 横 み ナ デ	輪 横 み ナ デ			
20	26	ST1-QF	フ		良	フ	赤褐色	—	138	—	フ	フ	ナゲ		
21	25	ST4YP-9	須恵器	蓋	不良	粗砂を若干含む	淡青灰色	136	—	—	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り? ナゲ		
22		ST4YP7	フ	フ	良	白色微砂を若干含むがち窓	暗青灰色	—	—	—	フ	フ	ヘラ切り ナゲ		
23	25	ST4YP6	フ	高台付杯	良	石英粗砂を含む	淡青灰色	—	96	—	フ	フ	ヘラ切り 付高台		
24	25	ST4YP12	フ	杯	良	石英粗砂を若干含む	灰白色	124	80	39	フ	フ	ヘラ切り		
25	25	ST4YP11 ST4P-3	フ	フ	良	白色微砂を若干含む	青灰色	148	90	40	フ	フ	フ		
26		ST4F1	フ	壺	良	黑色微砂を若干含む	青灰色	—	—	—	格子目ふう タク タク	青 霧 波 ア テ			
27		ST4F1	フ	フ	良	白色微砂を若干含む	青灰色	—	—	—	フ	フ			
28		ST4YP10	フ	フ	良	白色粗砂を含む	暗青灰色	—	—	—	タク ロクロ	弧 状 ア テ			

表一 3 平安時代の図示遺物観察表（2）

遺物番号	図版番号	出土地区	種類	器種	焼成	胎土	色調	法星 (mm)			調整		底部	備考
								口径	底径	高さ	外面	内面		
29		ST4P9	赤 燐	甕	良	白色粗砂含むが ち密	暗褐色	—	—	—	格子目	平行	ナ	
30	27	ST4Y P1~5	#	#	良	白色粗砂を若干 含む	赤褐色	輪幅 (mm) (底)	—	—	タタキア ケズリロクロ			外面 スス付着
31	27	ST4 ヨマツル付P1	輪横土器		良	粗砂を大量含む	赤褐色	134	—	—	輪幅み ナ	輪幅み ナデ	ナデ	
32		ST5F1	赤 燐	甕	良	赤色粗砂を含む	赤褐色	130	—	—	ロクロ	ロクロ		口縁 スス付着
34		ST6E1	#	#	良	白色粗砂を含む	赤褐色	—	—	—	平行	平行	ナ	自然触
35		STTF5~6	須恵器	壺	良	粗砂を含む	暗褐色	106	—	—	ロクロ	ロクロ		
36		STTF5~6	土 蔵 器	甕	良	粗砂を含む	赤褐色	—	70	—	刷毛目	刷毛目	ナデ	底部端突出
37		ST7F1	赤 燐	甕	良	粗砂を含む	灰褐色	—	—	—	ロクロ	ロクロ		
38		SK39F	須恵器	杯	良	粗砂を含む	暗青灰色	144	—	—	#	#		
39		SK39F	#	#	良	粗砂を若干含む	青灰色	116	60	33	#	#		ヘラ切り
40	25	SK39F	赤 燐	#	良	粗砂を若干含む がち密	赤褐色	116	50	53	ロクロ ナデ	#		糸切り
41	27	SK39F	#	甕	良	粗砂を若干含む	暗褐色	128	—	—	ロクロ	#		
42	27	SK39F	#	#	良	白色粗砂を若干 含む	赤褐色	206	—	—	#	#		
43	27	SK39F	#	#	良	粗砂を若干含む が均質	赤褐色				平行	平行		
44		SK39F	#	壺	良	赤色微砂を含む	赤褐色	—	—	—	ロクロ	ロクロ		
45	25	EP100F1	土 蔵 器	高台付杯	不良	黑色微砂を含む	灰白色	152	80	70	ミガキ 黒色處理	#		
46		EP100F	赤 燐	壺	良	粗砂を若干含む	暗褐色	—	—	—	ロクロ	#		スス付着
47		FP100F	#	#	良	赤色微砂を若干 含む	灰白色	—	—	—	#	#		
49	26	SX2F1	土 蔵 器	甕	良	粗砂を含む	暗赤褐色	194	86	274	刷毛目	刷毛目	ナデ	底部端突出 外側スス付着
50	25	SX3F1	須恵器	甕	良	石英粗砂を含む	暗青灰色	156	—	24	ロクロ	ロクロ		
51		SX3F1	#	杯	良	小擗をわずか含 むがち密	淡青灰色	130	78	33	#	#		
52		SX3	赤 燐	甕	良	粗砂を含む	暗褐色	—	74	—	#	#	ナデで不明	
53	26	SX3F1	土 蔵 器	#	良	黑色微砂を含む	灰褐色	162	74	112	刷毛目	#	#	
54	26	SX3F1	須恵器	#	良	粗砂を含む	青灰色	—	—	—	格子目 タタキ	青海波 ア		
55	25	5-80 I	#	甕	良	粗砂をわずか含 むがち密	淡青灰色	136	—	36	ロクロ	ロクロ	糸切り ナデ	内面に墨付 着
56	25	26-76II	#	#	良	石英粗砂を若干 含む	淡青灰色	170	—	36	#	#	ヘラ切り ナデ	
57	25	26-78II	#	高台付杯	良	石英粗砂を若干 含む	青灰色	118	80	43	#	#	ヘラ切り 付高台	
58	25	16-79II	#	#	良	粗砂をわずか含 むが均質	暗青灰色	138	70	63	#	#	ヘラ切り 付高台	

表一四 平安時代の図示遺物観察表（3）

遺物番号	国版番号	出土地区	種類	器種	焼成	胎土	色調	法量 (mm)			測定		底部	備考
								口径	底径	高さ	外面	内面		
59		26-77-II	須恵器	杯	良	白色粗砂を含む	青灰色	128	60	36	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り ナデ	
60		28-78II _a	#	#	良	白色粗砂をわずか含むがち密	青灰色	-	68	-	#	#	ヘラ切り	
61		28-74II	#	#	良	小礫を含むがち密	青灰色	124	54	34	#	#	条切り	
62	25	10-79II	#	#	良	小礫を含むがち密	淡青灰色	136	59	31	#	#	#	
63	25	11-79II	#	#	良	石英粗砂を含む	灰白色	128	56	42.5	#	#	#	
64	25	26-74II _a	#	#	良	小礫を含むがち密	淡青灰色	130	54	40	#	#	#	
65	25	24-73II	#	#	良	白色粗砂を若干含むがち密	淡青灰色	-	64	-	#	#	#	墨書きあり 「祥」?
66		29-73II	紫焼	#	良	白色粗砂を若干含む	赤褐色	-	50	-	#	#	#	
67	26	24-73II	須恵器	盃	良	白色粗砂を含む	青灰色	-	-	-	#	#		
68	26	29-74II	#	#	良	石英粗砂を若干含む	青灰色	-	110	-	ロクロ ケズリ	#	ナデで不明	
69		24-74地底	#	#	良	白色粗砂を多量含む	青灰色	-	96	-	ロクロ	#	#	
70		10-78II	赤焼	甕	良	白色粗砂を含む	赤褐色	160	-	-	#	#		
71	27	25-77II	#	#	良	雪母を若干含む	赤褐色	188	-	#	#	#		
72		25-77II	#	#	良	白色粗砂を含む	赤褐色	178	-	-	#	ロクロ 刷毛目?		
73		26-74II _a	#	#	良	石英粗砂を含む	灰褐色	208	-	-	#	ロクロ		
74		10-79II	#	#	良	白色粗砂を含む	赤褐色	228	-	-	#	#		
75		24-80II	輪模土器		良	粗砂を大量含む	赤褐色	110	-	-	輪模み ナ	輪模み ナ	ナデ	

遺物番号	国版番号	出土地区	種類	名称	焼成	胎土	色調	法量			底形	備考
								最大長 (mm)	最大幅 (mm)	重量 (g)		
33		ST5F5~7	土製品	土鍋	良	粗砂、礫を含む	灰褐色	44	17	11.5	手捏ね	
48	27	EP64F ₁	#	#	良	粗砂を多量含む	赤褐色	45	18	14.5	#	
75	27	X-O	#	理状土製品	良	黒色粗砂を含む	灰褐色	19	22	4.0	#	
77	27	SXCF ₁	#	フィゴ羽口	良	粗砂を含む	灰褐色	(75)	(63)	(110.0)		
78	27	18-69 I	#	土鍋	良	粗砂を若干含む	暗褐色	43	26	21.7	手捏ね	
79	27	17-76II	#	#	良	粗砂を多量含む	暗褐色	(45)	16	(8.8)	#	
80	27	28-74II	#	#	良	粗砂を多量含む	赤褐色	91	46	150.0	#	
81	27	28-75II	#	#	良	粗砂を若干含む	赤褐色	93	38	114.9	#	

IV 縄文時代の遺構と遺物

1 壁穴住居跡

1) 300号住居跡 (第15図 図版11)

今次調査の精査地区の北東側緩傾斜地、22~24・55~58グリッド内に位置する。住居跡の北側壁中央部で337号土壇と、北西側で未精査土壇とそれぞれ重複している。また、住居跡の北側で297号土壇、西側で298号土壇、南側で279・280・281・318号土壇と、東側で319号土壇と隣接している。遺存状態は、南側で電柱支線のためVI層下部まで正方形に擾乱を受けている。他はほぼ良好である。確認面は、西側から南側にかけてVI層上面で明瞭に確認され、東側は壁や床面の精査の際認められた。住居跡の構築は、恐らくVI層の上層面より掘り込まれていると考えられ、床画はVI層中を掘り込んで構築されている。

(平面形) 住居跡の南側が擾乱しているが、各辺が全体に脹らむ不整の隅丸長方形を呈し、南側辺に若干の張り出し部を有している。

(規 模) 長軸5.26m(推定)・短軸3.94mで長軸N-13.5°-Eを測る。確認面から床面までの深さは12~25cmである。

(壁) 全体に緩やかに掘り込まれている。現存高は確認面からの深さと一致する。

(床面の状態) 全体的には平坦であるがP2付近が若干起伏がある。北西側の土壇と重複している部分は、ブロック状に貼り床となっている。

(柱 穴) 現時点では3本検出されているが、構成・配置などの詳細は不明である。

P1-径20cm・深さ11cm, P2-径28cm・深さ14cm, P3-径60cm・深さ33cm

(炉跡 E L) 住居跡の中央部に位置し不整形を呈する地床炉である。大きさは長軸1.75m・短軸1.00mで、若干の掘り込みをもつ。中央部がとくに焼けている。

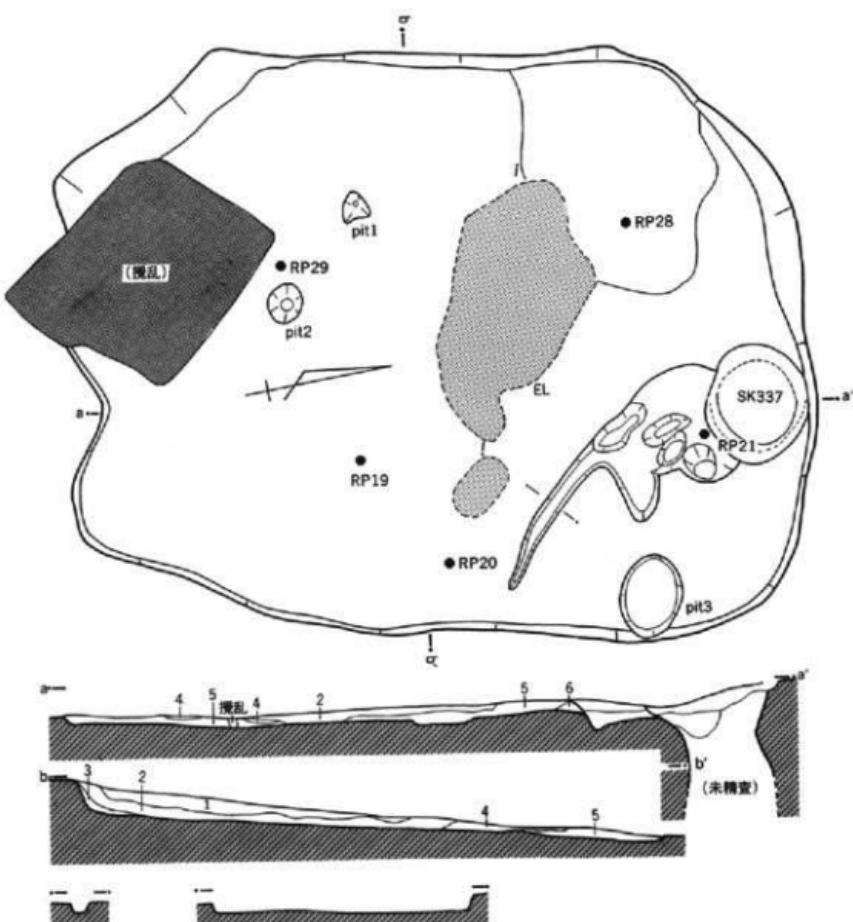
(土層の堆積) 大きく4層に分けられ、北西側へ流込むようにレンズ状に堆積している。

(出土遺物) P19~21・28、床面より約1~1.5cm浮いて、押しつぶされた状態で出土している。土器片は整理箱で2.5箱でa類・c類土器が多くみられ、石器は石鏃・磨石5が出土しており、いずれも覆土上層から中層にかけて出土している。

(時 期) 337号土壇より旧く、出土した土器から縄文時代前期大木6式期に相当する。

2) 301号住居跡 (第16図 図版11)

今次調査の精査地区の北東側緩傾斜地、25~29・58~62グリッド内に位置する。住居跡の東側で276・324a・324b号土壇と、西側で331・332・329号土壇と、住居跡の中央部では295号土壇とそれぞれ重複している。住居跡の南側では28・29号壙をはじめとして、10基



300号住居跡

- 1: 黒褐色粘土質シルト (灰化物を細かい状態で多く含む)
- 2: 黒褐色粘土質シルト (よりやや多く灰化物、燒土を含む)
- 3: 増強色シルト質砂層
- 4: 明褐色粘土質シルト (純粹な砂層)
- 5: 黑褐色粘土質シルトと黄褐色粘土が混り合う層 (若干の灰化物と燒土を含む)
- 6: 棕色シルト質粘土 (増強色粘土と若干の灰化物を含む)

0 1m

ほどの土壤群がそれぞれ重複して隣接している。遺存状態は、確認面あたりまでは一部擾乱している他はほぼ良好である。確認面は、北側から西側・南西側にかけてはVI層で確認され、東側では壁や床面の精査・検出の際に認められた。住居跡の構築は、VI層中を掘り込んで、VI層中を床面として構築している。

(平面形) 住居跡の東側のプランが不明確であるが、恐らく不整の隅丸方形を呈していると考えられる。

(規模) 長軸6.50m(推定)・短軸5.40m(推定)で長軸N-81°-Wを測る。確認面から床面までの深さは25~35cmである。東側は不明である。

(壁) 全体的に緩やかに、擂鉢状に掘り込まれており、壁体はやや軟弱である。現存高は、確認面からの深さと同一で25~35cmである。

(床面の状態) 全体としては、起伏があり凸凹しており、中央部付近がやや窪むようになっている。炉跡付近と西側付近ではやや固く踏しめられ、295号土壇付近では暗褐色土のブロックが貼り床となり非常に固くなっている。他は、壁際になるにしたがって軟弱となっている。

(柱穴) 本住居跡に伴う柱穴はP1~P6で、6本検出されている。いずれも柱穴は、炉跡を中心として円形状に巡っている。恐らく主柱穴様と考えられる。

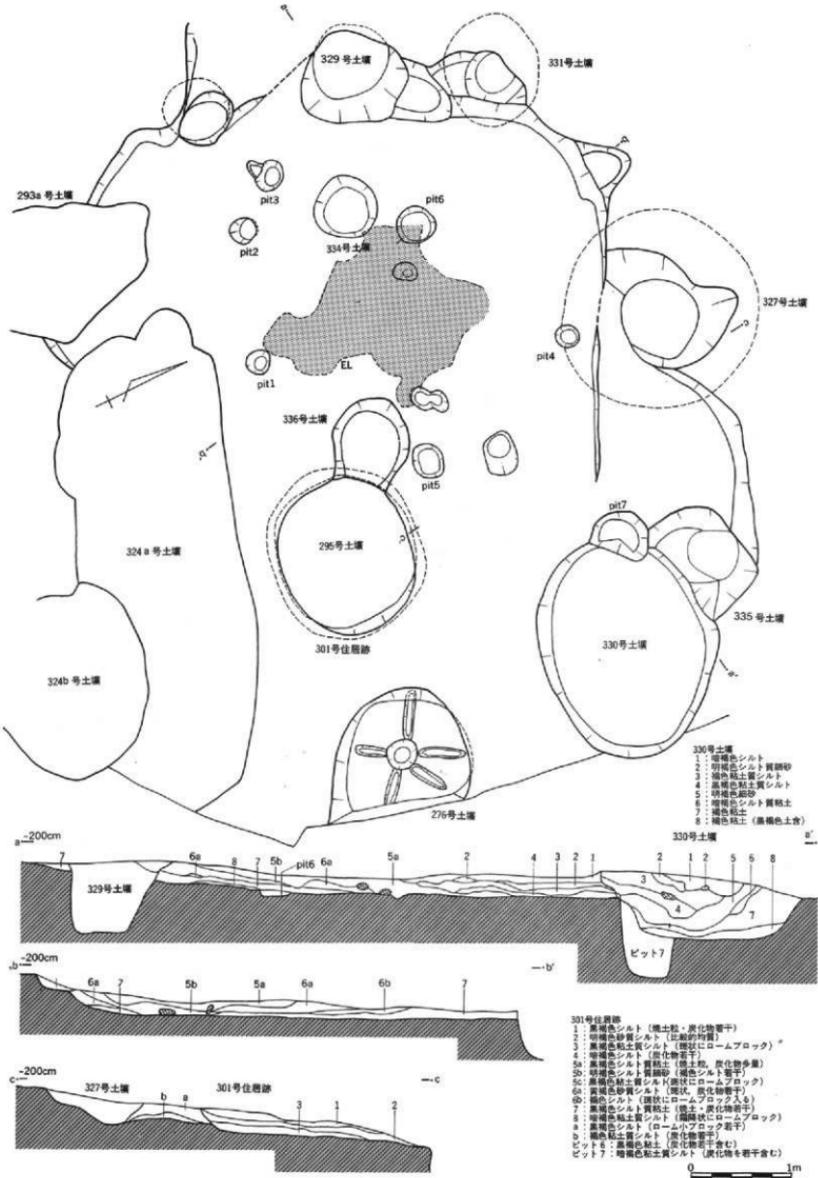
P1-径24cm・深さ19cm, P2-径27cm・深さ21cm, P3-径31cm・深さ16cm
P4-径22cm・深さ15cm, P5-径36cm・深さ20cm, P6-径37cm・深さ25cm

(炉跡E L) 住居跡の中央部からやや西側に位置し、不整形を呈する地床炉である。大きさは長軸2.30m・短軸1.50mで、中央部がやや擂鉢状になっている。とくに中央部は良く焼けており、周囲は焼土が飛び散っている。

(土層の堆積) 覆土層は大きく8層に分けられる。東側へ流れ込むようにレンズ状に堆積している。

(出土遺物) 遺物の出土する状況は、覆土の堆積状態と同様に東側へ流れ込むように、覆土5~7層にかけて多く出土している。土器はa類1~3土器とc類土器の量が圧倒的に多く、とくに住居跡の中央から東側にかけて出土している。石器はいずれも覆土中からの出土で、石鏃1・石匙2・石箋2・磨製石斧1・磨石6である。これら遺物の出土状態から、住居跡廃絶後の遺物投棄が行なわれているとみられる。

(時期) 本住居跡と276・324a・324b・331・339・295号土壇との重複する新旧関係は、それぞれの土層堆積状態や住居跡の検出作業の状況から判断して、295号土壇は本住居跡より旧く、他の土壇は新しくなる。住居跡の時期は、出土した土器からみて、縄文時代前期大木6式期に相当する。



第16図 301号住居跡

2 土 壤 (第16~34図 図版12~24)

今次の調査で検出された縄文時代の土壤は、精査区の北東側の一帯、平坦地から緩傾斜地にかけて、300・301号住居跡と重複するように遍在している。土壤群は、単体で在る土壤は7基と少なく、その大半が重複している。なかでも、土壤上部で重複するのはもちろんのこと、33・34土壤、282・285号土壤では、土壤の底面(フラスコ状を呈する場合)で重複しているのが特徴である。土壤の確認面は、住居跡と同様にVI層上面で確認され、VI層中を掘り込んで造られ、286号土壤のように岩盤を切り抜いた土壤なども認められる。

検出された土壤の数は、81基である。形状は、上面では円形ないし梢円形を呈して、断面形が袋状やフラスコ状のものが多く、その他断面形が血状やタライ状になるものもある。今回は、次回調査とあいまって概略的に表にまとめた。

表-5 縄文時代土壤一覧表 (1)

(単位:cm)

土壤号	地区名	上部平面形	規模 (長径×短径)	深さ	壁の掘込 状態	底面の 状態	時期	備考
S K26	27-64-65	不整梢円形	150×109	43	南側袋状	西側凹凸	大木6	
27	26-27-63	梢円形	200×148	53	ほぼ垂直	ほぼ平坦	大木6	
28	25-26-62	梢円形	140×118	73	ほぼ垂直	平坦	大木6	
29	28-29-63-64	不整円形	81×72	113	フラスコ状	壁際凹凸	大木6	櫛器1・磨石4出土
30 b	28-62	不整梢円形	87×56	164	フラスコ状	平坦	大木6	磨石3、ビット有り(30aは30bに切られて大木不明)
31	28-62-63	不整円形	152×148	67	袋状	ほぼ平坦	大木6	S K30a・bより古い
32	28-63	(梢円形)	(80)×64	18	緩るやか	ほぼ平坦	大木6	S K31より古い
33	19-20-59-60	(梢円形)	(160)×(135)	152	フラスコ状	全体凹凸	大木6	(南側未検出)
34	18-19-60	円形	184×179	166	フラスコ状	平坦	大木7a	(テピカルなフラスコ状を示す)
35	15-16-61-62	不整円形	168×154	68	擂鉢状	全体凹凸	大木7a	石器2・石錐1・磨石2
276	28-29-59-60	(梢円形)	(不明)×142	81	ほぼ垂直	ほぼ平坦	大木6	磨石、ビット1あり、5本の溝が放射状になる
277	27-28-57-58	(梢円形)	134×(120)	135	フラスコ状	全体凹凸	大木6	
278	25-26-58	不整梢円形	105×87	49	ほぼ垂直	ほぼ平坦	大木6	磨石1出土、S K279より新
279	25-26-58-59	長梢円形	(185)×130	56	ほぼ垂直	やや凹凸	大木6	S K278より古
280	24-59	(不整円形)	(70)×65	32	ほぼ垂直	ほぼ平坦	大木6	S K318より古
281	23-24-59	不整円形	182×160	58	西側袋状	全体凹凸	大木6	石器1・石錐1・櫛器1
282	19-20-61-62	梢円形	143×115	144	ほぼ垂直	平坦	大木6	石器2・石錐1・櫛器2・磨石3
283	20-62-63	不整円形	124×120	38	袋状	やや凹凸	大木6	
284	20-61	梢円形	120×112	153	フラスコ状	平坦	大木6	石器1・石錐1・磨石15

() 内数字は推定

表一六 縄文時代土壤一覧表(2)

(単位:cm)

土壤番号	地区名	上部平面形	規模(長径×短径)	深さ	壁の掘込状態	底面の状態	時期	備考
285	20-61	不整円形	169×163	62	袋状	全体凹凸	大木6	石匙3・磨石8出土 (溝が巡る)
286	22-23-26	不整円形	167×159	73	袋状	全体凹凸	大木6	磨石2出土
287	23-62-63	不整円形	112×86	69	袋状	全体凹凸	大木6	S K286より古
288c	23-24-62	不整円形	60×55	72	緩るやか	ほぼ垂直	大木6	(a+b)はcにより切られ 不明)
289	#	円形	85×80	35	袋状	中央凹凸	大木6	
290	22-23-63-64	不整橿円形	112×82	61	袋状	ほぼ垂直	大木6	
291	19-68-69							平面プランのみ (S59年調査)
294	28-29-61-62	不整円形	108×105	128	プラスコ状	ほぼ平坦	大木6	磨製石斧・磨石1, S K 324bより新
293a	26-27-61-62	円形	50×48	210	プラスコ状	ほぼ垂直	大木6	石鍬2・磨石2・R P32出土
# b	#	橿円形	186×124	42	ほぼ垂直	ほぼ平坦	大木6	磨石1, S K293aより古
295	27-28-60	橿円形	150×120	48	袋状	全体凹凸	大木6	
297	21-22-55-56	不整橿円形	164×148	20	緩るやか	平坦	大木6	石鍬1出土
289a	20-21-56-57	不整橿円形	112×91	9	緩るやか	平坦	大木6	
# b	#	円形	45×39	32	緩るやか	平坦	大木6	
299	26-57-58	不整円形	105×97	150	プラスコ状	全体凹凸	大木6	磨石44出土
302	21-22-56-57	不整円形	72×54	27	緩るやか	平坦	大木6	石鍬1出土
303	21-55-57	円形	52×48	46	緩るやか	平坦	大木6	
304	21-56-57	不整円形	71×65	54	緩るやか	平坦	大木6	
305	19-20-57	橿円形	132×114	57	緩るやか	全体凹凸	大木6	搔器1出土
306	20-21-55-56	橿円形	148×115	114	ほぼ垂直	平坦	大木6	石鍬1・石匙4・搔器3・ 磨石2
307	18-19-57	不整橿円形	122×107	106	上部緩るやか	ほぼ平坦	大木6	磨石1
308	18-57	不整円形	120×113	83	プラスコ状	全体凹凸	大木6	石匙1・搔器1 磨製石斧1
309	17-18-57-58	不整橿円形	100×75	14	緩るやか	平坦	大木6	
310	18-58-59	不整橿円形	120×100	54	袋状	全体凹凸	大木6	
311	18-58	不整円形	50×46	91	緩るやか	平坦	大木6	
312	19-57-58	橿円形	150×60	35	緩るやか	平坦	大木6	磨石1出土
313a	16-17-59	不整円形	80×65	85	緩るやか	全体凹凸	大木6	磨石1, S K313bより古
# b	16-17-59	円形	74×68	79	緩るやか	全体凹凸	大木6	磨石2, S K313a+cより新
# c	#	不整円形	140×132	59	袋状	全体凹凸	大木6	S K313bより古
314a	15-16-58	不整円形	126×116	126	プラスコ状	全体凹凸	大木6	R P31出土 磨石2, S K314bより新
# b	#	不整円形	165×151	59	袋状	やや凹凸	大木6	S K314aより古・S K 314cより古

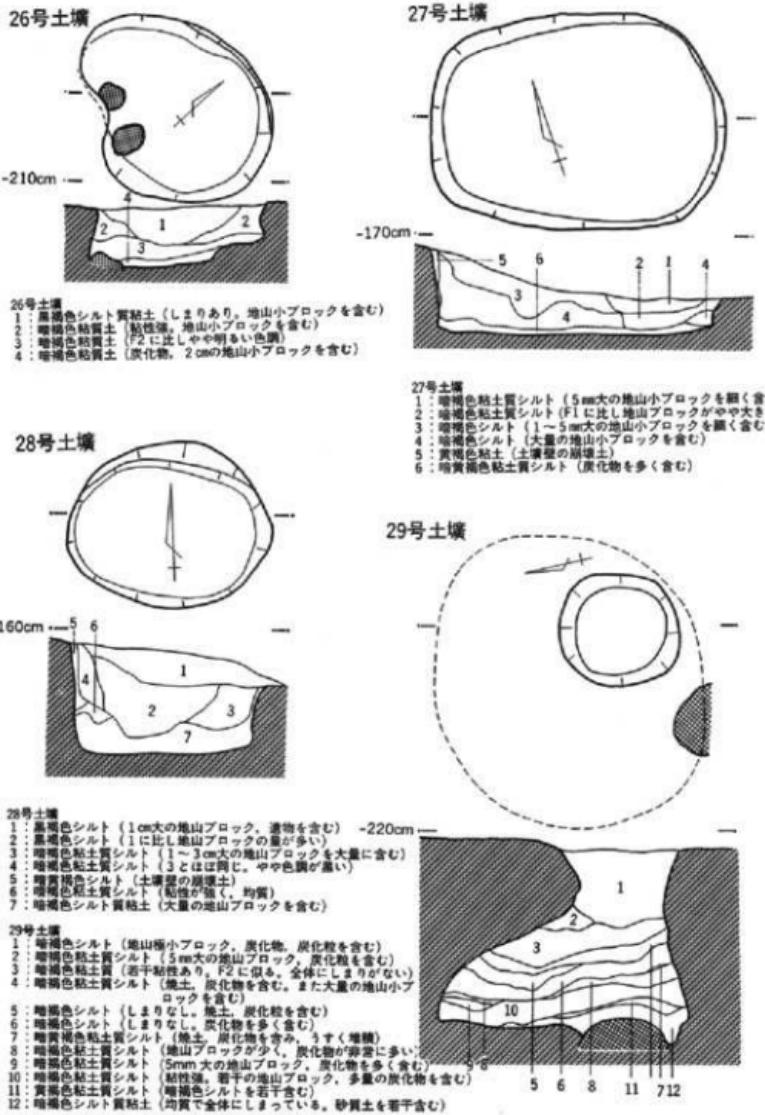
() 内数字は推定

表一7 繩文時代土壤一覧表(3)

(単位:cm)

土 種 番 号	地 区 名	上 部 平 画 形	規 模 (長径×短径)	深 さ	壁の掘込 状 態	底面の 状 態	時 期	備 考
314c	15-59	不 整 円 形	152×(140)	137	袋 状	ほぼ平坦	大木6	S K314bより新。(ビットあり)
315a	15-16-55-57	不 整 円 形	(不明)×98	92	緩 る や か	ほぼ平坦	大木6	S K315dより新
" b	"	不 整 円 形	105×98	84	緩 る や か	ほぼ平坦	大木6	S K315dより新
" c	"	長 橫 円 形	252×81	50	緩 る や か	全体凹凸	大木6	
" d	"	不整横円形	(不明)×94	35	(不 明)	(不 明)	大木6	石器1・石器1 磨石片1
" e	"	不整横円形	(不 明)	16	緩 る や か	平 坦	大木6	a~dによって切られているため詳細は不明
316	16-17-55-56	横 円 形	142×163	100	ほ ぼ 垂 直	平 坦	大木6	石器1・磨石2, S K315 eより新
317	16-60	円 形	70×62	98	フ ラ ス コ 状	平 坦	大木6	石器1・石器1・振器1・ 磨石5
319	26-55-56	横 円 形	182×141	65	ほ ぼ 垂 直	ほ ぼ 平 坦	大木6	
320a	21-22-60-61	円 形	81×75	77	ほ ぼ 垂 直	ほ ぼ 平 坦	大木6	振器2・磨石2 S K320bより新
" b	"	不 整 円 形	(不 明)	107	(フ ラ ス コ 状)	ほ ぼ 平 坦	大木6	S K320a-cより古
" c	"	不 整 円 形	75×70	82	(フ ラ ス コ 状)	全体凹凸	大木6	S K320bより新
321	22-62	横 円 形	100×78	20	ほ ぼ 垂 直	ほ ぼ 平 坦	大木6	
322	21-62	横 円 形	88×65	18	ほ ぼ 垂 直	ほ ぼ 平 坦	大木6	
323	21-55	不 整 円 形	62×60	30	ほ ぼ 垂 直	平 坦	大木6	磨製石斧1
324a	27-29-60-61	不 整 方 形	(476)×172	43	ほ ぼ 垂 直	中央凹凸	大木6	石器1・磨石2, S K324 bより新
" b	"	不 整 円 形	200×152	74	袋 状	平 坦	大木6	(周溝が巡る) S K294-324aより古
325	27-28-63	不 整 円 形	90×81	42	緩 る や か	平 坦	大木6	
326	27-63-64	横 円 形	100×54	55	袋 状	水側凹凸	大木6	
327	26-59	不 整 円 形	(142)×132	102	フ ラ ス コ 状	平 坦	大木6	S T301より古
328	25-59-60	不 整 円 形	80×72	64	袋 状	全体凹凸	大木6	石器1・磨石2
329	25-61	不 整 円 形	100×87	64	東 側 袋 状	ほ ぼ 平 坦	大木6	S T301より新
330	27-28-58-59	横 円 形	222×177	64	緩 る や か	平 坦	大木6	S T301より新
331	25-60	不 整 楕円形	121×82	36	緩 る や か	平 坦	大木6	
332	26-61-62	横 円 形	63×41	65	フ ラ ス コ 状	平 坦	大木6	S T301より新
333	25-26-61-62	不整横円形	150×92	53	緩 る や か	ほ ぼ 平 坦	大木6	石器1, S T301より新
334	26-60-61	円 形	64×62	29	緩 る や か	ほ ぼ 平 坦	大木6	振器1, S T301より古
335	27-58	(横 円 形)	110×(不明)	34	緩 る や か	全体凹凸	大木6	S K330より古
336	27-60	(横 円 形)	(100)×79	41	緩 る や か	平 坦	大木6	S T301より新, S K295 より古
337	23-55-56	不 整 円 形	71×62	(不明)	(フ ラ ス コ 状)	(不 明)	大木60	S T300より新 土壌下部未発(559年調査)
338	21-22-58-59	不整横円形	129×97	38	緩 る や か	全体凹凸	大木6	

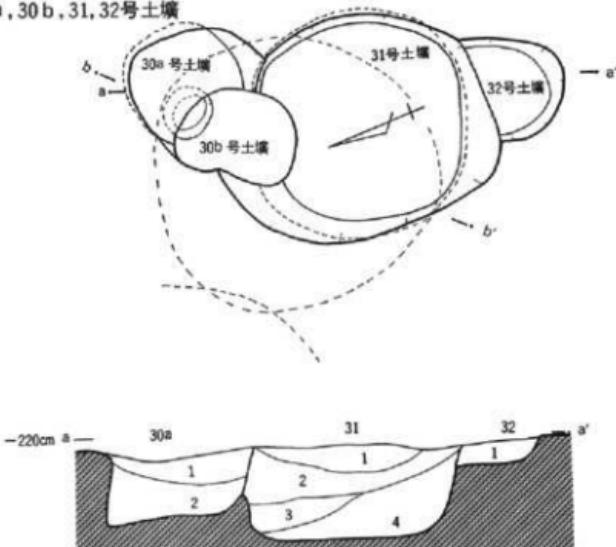
() 内数字は推定



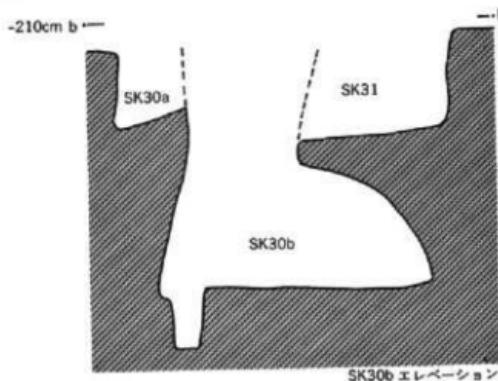
0 1m

第17図 縄文時代土壤 (1)

30a, 30b, 31, 32号土壤

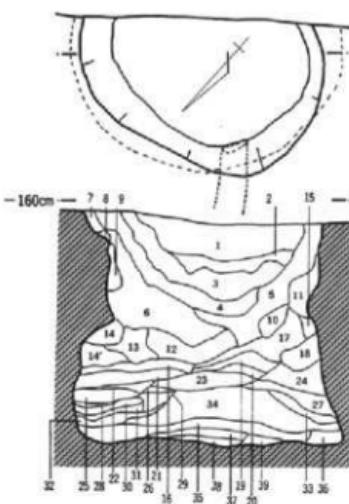


- 30a号土壤
 1: 黒褐色シルト (躍降り状に黄褐色地山ロームを含む)
 2: 墓褐色砂質シルト (躍降り状に黄褐色地山ローム、若干の炭化物を含む)
- 31号土壤
 1: 黒褐色粘土質シルト (色調は30aF1より黒味を帯び、3~5cmの大黄褐色地山ロームを斑状に混入する)
 2: 棕色粘土質シルト (黄褐色地山ロームを塊状に含む。炭化物も若干含む)
 3: 墓褐色粘土質シルト (黄褐色地山ローム、黒褐色粘土のブロック、細砂を含み、全体にザラザラとする)
 4: 墓褐色粘土質シルト (F3と比較し、黄褐色地山ロームの量が多く、全体にしまっている)
- 32号土壤
 1: 黑褐色シルト (黄褐色地山ロームブロック、若干の炭化物を含む)
- 30b号土壤
 基本的には墓褐色シルトと暗黄褐色シルト質粘土の5~10cm前後の互層となる。全体に覆土にしまりはなく若干の炭化物を含む。



第18図 縄文時代土壤 (2)

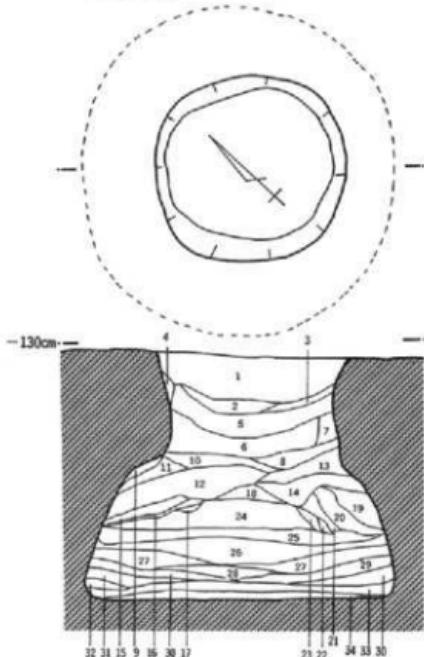
33号土壤



33号土壤

- 1: 墓褐色シルト(1cm前後の地山小ブロックを露むり状に含む)
- 2: 墓褐色シルト(1cm前後の地山より露む化粧を含む)
- 3: 墓褐色シルト(暗褐色土と混合。若干炭化物を含む)
- 4: 墓褐色シルト(深5mm前後の炭化物を所々含む)
- 5: 墓褐色シルト(4に比し多量の炭化物、灰化物を含む)
- 6: 墓褐色土(5よりさらに多量の炭化物を含む)
- 7: 墓褐色シルト(研ぎしまっている。比較的均質である)
- 8: 墓褐色シルト(暗褐色土をまばらに含む)
- 9: 墓褐色シルト(地山の小ブロックが混入する)
- 10: 墓褐色シルト(1cm上層は地山の小ブロックが混じる。炭化物少量含む)
- 11: 墓褐色シルト(2cm前後の地山より露む化粧を含む)
- 12: 墓褐色土(黄褐色土と暗褐色土と混じてある。若干炭化物を多量に含む)
- 13: 黄褐色シルト(質粘土と暗褐色土と混じてある。若干の炭化物を含む)
- 14: 黄褐色シルト(質粘土と暗褐色土の小ブロック。若干の炭化物を含む)
- 15: 黄褐色色土(質粘土と暗褐色土を含む。炭化物少)
- 16: 黄褐色色シルト質粘土(暗褐色土の小ブロック。若干の炭化物を含む)
- 17: 黄褐色シルト(質粘土と混じりあう。少量の炭化物を含む)
- 18: 黄褐色色シルト質粘土(暗褐色土と混じりあう。若干の炭化物を含む)
- 19: 黄褐色シルト質粘土(暗褐色土と混じりあう)
- 20: 黄褐色シルト(暗褐色土とブロック状に含む)
- 21: 黄褐色シルト質粘土(暗褐色土を含む。炭化物少)
- 22: 黄褐色土(比較的均質である)
- 23: 墓褐色土質シルト(暗褐色ローム質土のブロック。多量の炭化物含む)
- 24: 墓褐色シルト質粘土(地山ロームに混じてある)
- 25: 墓褐色シルト質粘土(地山ロームをブロック状に含む)
- 26: 墓褐色シルト質粘土(地山ロームをブロック状に含む)
- 27: 墓褐色土(多量の炭化物を含む)
- 28: 墓褐色シルト質粘土(地山ロームをブロック状に含む)
- 29: 墓褐色シルト質粘土(地山ロームをブロック状に含む)
- 30: 墓褐色シルト質粘土(地山ロームをブロック状に含む)
- 31: 墓褐色シルト質粘土(地山ロームをブロック状に含む)
- 32: 墓褐色シルト質粘土(地山ロームをブロック状に含む)
- 33: 赤褐色シルト質粘土(地山ロームに混じるブロック状に含む)
- 34: 黑褐色土(暗褐色ローム。やや多量の炭化物を含む)
- 35: 墓褐色シルト質粘土(地山ロームをブロック状に含む)
- 36: 墓褐色シルト質粘土(地山ロームをブロック状に含む)
- 37: 墓褐色シルト質粘土(赤褐色ローム。少量の炭化物を含む)
- 38: 墓褐色シルト質粘土(比較的均質)
- 39: 墓褐色シルト質粘土(地山ロームをブロック状に含む)

34号土壤



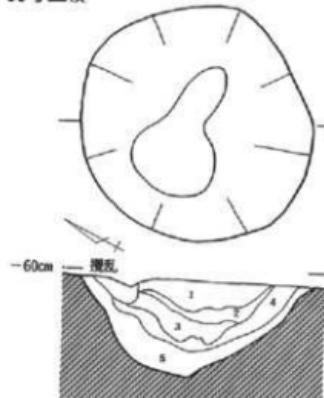
34号土壤

- 1: 墓褐色色粘土質シルト(比較的均質。炭化物が少量含まれる)
- 2: 墓褐色色粘土質シルト(1cm大の炭化物を多量に含む)
- 3: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色シルト質粘土をブロック状に含む)
- 4: 墓褐色色シルト(暗褐色土と露む。若干の炭化物を含む)
- 5: 墓褐色色シルト(炭化物、質粘土を含む。炭化物をブロック状に含む)
- 6: 墓褐色色シルト(炭化物、質粘土を含む。炭化物を含む)
- 7: 墓褐色色シルト(炭化物、質粘土を含む。炭化物を含む)
- 8: 墓褐色色シルト(炭化物、質粘土を含む。炭化物を含む)
- 9: 墓褐色色シルト(炭化物、質粘土を含む。炭化物を含む)
- 10: 墓褐色色シルト(質粘土と多量の炭化物を含む)
- 11: 墓褐色色シルト質粘土(地山ロームと小ブロック状に含む)
- 12: 墓褐色色シルト質粘土(地山ロームを小ブロック状に含む)
- 13: 墓褐色色シルト質粘土(地山ロームを小ブロック状に含む)
- 14: 墓褐色色シルト(暗褐色地山ローム。若干の炭化物を含む)
- 15: 墓褐色色シルト質粘土(地山ロームを小ブロック状に含む)
- 16: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色地山ロームを小ブロック状に含む)
- 17: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色地山の小ブロックと混じり合ふ)
- 18: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色地山の小ブロックと混じり合ふ)
- 19: 墓褐色色シルト(暗褐色地山ローム。若干の炭化物を含む)
- 20: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色シルトと混じり合ふ)
- 21: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色地山の小ブロックと混じり合ふ)
- 22: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色地山の小ブロックと混じり合ふ)
- 23: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色地山の小ブロックと混じり合ふ)
- 24: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色地山の小ブロックと混じり合ふ)
- 25: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色地山の小ブロックと混じり合ふ)
- 26: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色地山の小ブロックと混じり合ふ)
- 27: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色地山ロームを小ブロック状に含む)
- 28: 墓褐色色シルト(やや多量の炭化物を含む。炭化物を含む)
- 29: 墓褐色色シルト質粘土(質粘土と混じり合ふ)
- 30: 墓褐色色シルト質粘土(地山ロームの小ブロックを多量に含む)
- 31: 墓褐色色シルト質粘土(地山ロームを含む)
- 32: 墓褐色色シルト(若干の炭化物を含む)
- 33: 黄褐色色シルト質粘土(暗褐色シルト。若干の炭化物を含む)
- 34: 墓褐色色シルト質粘土(暗褐色シルトをまばらに含む)

0 1m

第19図 織文時代土壤（3）

35号土壤

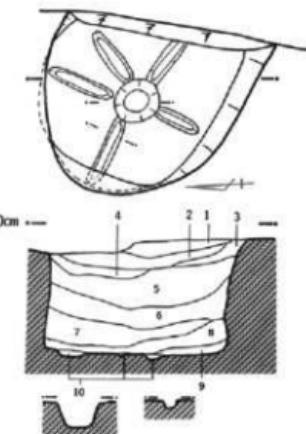


35号土壤

- 1 : 喀褐色シルト(均質でしまりあり。2~3mmの大の炭化物を若干含む)
- 2 : 喀褐色シルト(やや暗い色調。5~10mmの大の炭化物、地山小ブロックを含む)
- 3 : 喀褐色シルト(5~10mmの大の炭化物、地山小ブロック、赤色斑を含む)
- 4 : 喀褐色シルト(若干の炭化物、地山ブロックを斑状に含む)
- 5 : 喀褐色シルト(黄褐色地山ブロックをわずかに含む)

276号土壤

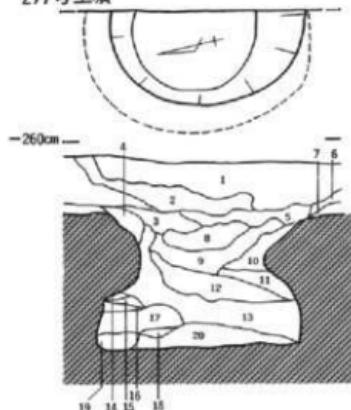
276号土壤



276号土壤

- 1 : 黒褐色シルト(しまりあり。炭化物を含む)
- 2 : 喀褐色粘土質シルト(5cmの大の地山ブロックを斑状に含む)
- 3 : 喀褐色粘土質シルト(比較的均質。少量の炭化物を含む)
- 4 : 喀褐色粘土質シルト(地山が強く、地山ブロック、喀褐色土を含む)
- 5 : 喀褐色粘土質シルト(地山が強く、地山ブロック、喀褐色土を含む)
- 6 : 喀褐色粘土質シルト(全体に均質。若干の地山ブロックを含む)
- 7 : 喀褐色粘土質シルト(F6に比しきらに均質。やや明るい色調)
- 8 : 喀褐色粘土質シルト(地山ロームに近い土質。炭化物を若干含む)
- 9 : 喀褐色粘土質シルト(F8とはほぼ同じ。やや明るい色調)
- 10 : 喀褐色シルト(若干の炭化物を含み、全体にしまりがない)

277号土壤



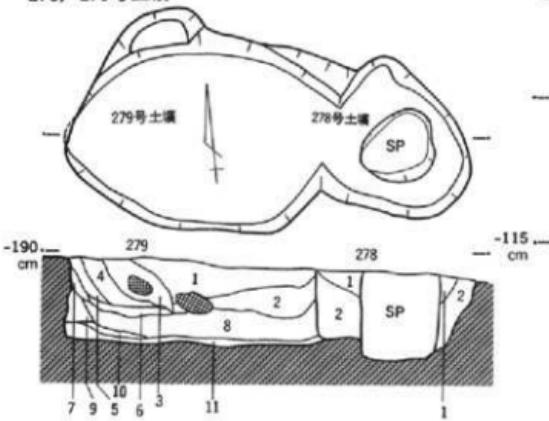
277号土壤

- 1 : 喀褐色シルト(地山ロームブロックを含む。基本的層位第三層と同層)
- 2 : 喀褐色シルト(1に比し黒い色調。道物。地山ロームを含む)
- 3 : 喀褐色シルト(地山ロームを斑状に多量に含む)
- 4 : 喀褐色シルト(3に比し地山ロームは少量含む)
- 5 : 喀褐色シルト(5mmの大の地山ローム粒。炭化物を含む)
- 6 : 喀褐色粘土質シルト(地山ロームブロックを少量含む)
- 7 : 喀褐色粘土質シルト(6に比し地山ロームブロックは少ない)
- 8 : 黄褐色シルト質粘土(喀褐色シルトを細く斑状に含む)
- 9 : 喀褐色シルト(地山ロームブロック。炭化物を含む)
- 10 : 喀褐色シルト(5mmの大の地山ロームをまばらに含む)
- 11 : 喀灰褐色シルト(炭化物。地山ロームをまばらに含む)
- 12 : 喀灰褐色シルト(炭化物。地山ロームをまばらに含む)
- 13 : 喀褐色シルト質粘土(粘性強。1~5mmの大の地山ブロックを離縫隙に含む)
- 14 : 喀褐色粘土質シルト(黄褐色ロームも混じり合う)
- 15 : 喀褐色粘土質シルト(14に比し喀褐色土の量が多く、炭化物も含む)



第20図 縄文時代土壤(4)

278, 279号土壤



282号土壤



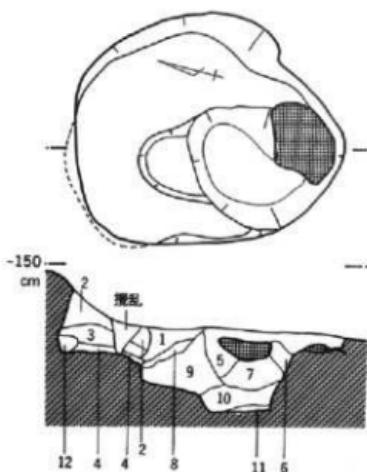
278号土壤

1: 黄褐色粘質土（全体にしまっており比較的均質）
2: 黑褐色シルト質粘土（大量のロームブロック、炭化物を含む）
SP 覆土: 黑褐色シルト（砂質でサラサラとする。炭化物を若干含む）

282号土壤

- 1: 噴褐色粘土質シルト（1cm大の炭化物、塊土粒、ロームブロックを含む）
- 2: 噴黄褐色粘土質シルト（若干の炭化物、大粒のロームブロックを斑状に含む）
- 3: 噴黄褐色シルト質粘土（F2に比し、黄褐色を含む。炭化物を多量に含む）
- 4: 暗褐色シルト質粘土（炭化物、黄褐色砂粒、ローム大ブロックを斑状に含む。人为的堆積と認められる）

281号土壤



279号土壤

- 1: 黑褐色シルト質粘土（若干の炭化物、塊土粒、砂質地山ブロックを含む）
- 2: 黑褐色シルト質粘土（F1に比し、ロームブロックが小さく雛鶏状となる）
- 3: 噴褐色シルト質粘土（大量的地山ローム粒を含む）
- 4: 噴褐色シルト質粘土（F3よりさらに大量の地山ローム粒を含む）
- 5: 黑褐色シルト質粘土（若干の地山ロームブロックを含む）
- 6: 黑褐色粘土（全体にしまっている。黄褐色ローム粒を若干含む）
- 7: 噴褐色シルト質粘土（炭化物を多量含む）
- 8: 噴褐色シルト質粘土（地山小ブロックを大量に含み雛鶏状となる）
- 9: 噴褐色粘土質シルト（比較的均質。わずかに地山ローム粒を含む）
- 10: 淡褐色粘土（F6と似る。全体にしまっている）
- 11: 噴褐色粘土質シルト（地山ロームの小ブロックを含む）

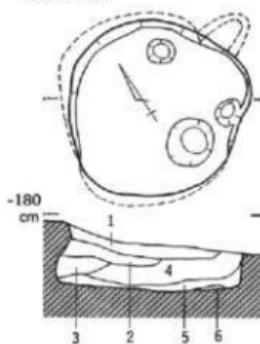
281号土壤

- 1: 噴褐色シルト質粘土（2~5cm大の地山ロームブロック、若干の炭化物を含む）
 - 2: 噴黄褐色シルト質粘土（極小の地山ロームブロック、微量の炭化物を含む）
 - 3: 噴黄褐色シルト（2~3cmの地山ロームブロックを斑状に含む）
 - 4: 黑褐色シルト質粘土（多量の炭化物、1~3cm大の地山ロームブロックを含む）
 - 5: 噴褐色粘土質シルト（均質でやや粘性あり、1cm大の炭化物を微量含む）
 - 6: 噴褐色粘土質シルト（均質でしまっている。炭化粒を微量含む）
 - 7: 噴褐色シルト質粘土（2~3cm大の地山ロームブロック、炭化物を大量に含み全体にしまりがない）
 - 8: 噴褐色シルト質粘土（均質で地山ロームをほとんど含まない）
 - 9: 噴褐色シルト質粘土（地山ロームブロックを大量に含む）
 - 10: 噴褐色シルト質粘土（地山ロームブロックを1/2程度含む）
 - 11: 黑褐色シルト質粘土（比較的均質で地山ロームはほとんど含まない）
- *7層、9層に大量の地山ロームブロックを含む。人为的に埋められた土壤と考えられる。

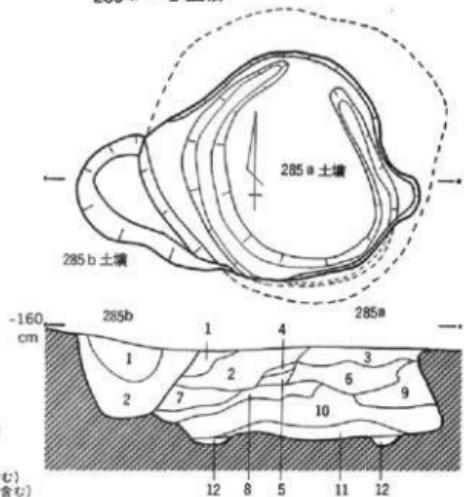


第21図 繩文時代土壤（5）

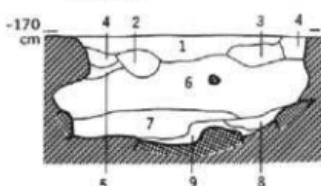
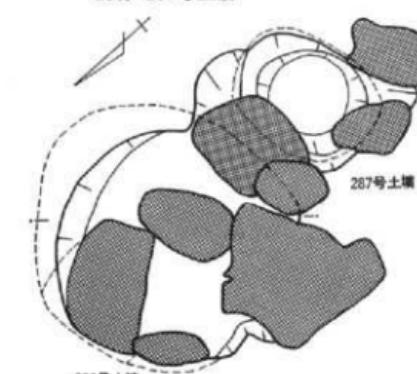
283号土壤



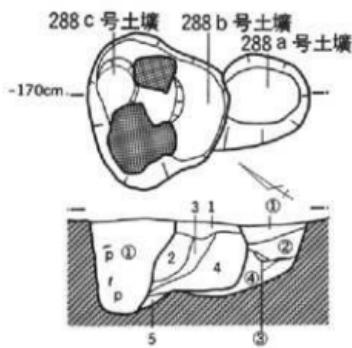
285 a + b 土壤



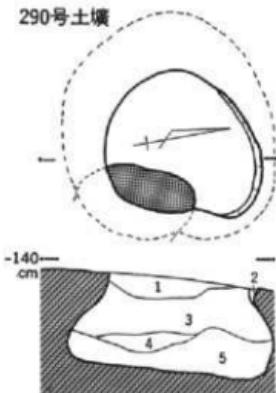
286, 287号土壤



第22図 縄文時代土壤 (6)



290号土壤

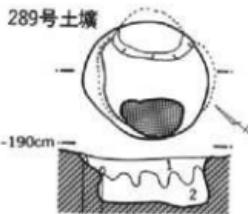


290号土壤

- 1 : 黒褐色砂質シルト (地土粒、炭化物、黄褐色粗砂、ロームブロックを含む)
- 2 : 増黄褐色シルト質粘土 (若干の粗砂を含む)
- 3 : 黑褐色シルト (若干の炭化物、ローム粒を離陸状に含む)
- 4 : 増黄褐色シルト (2cm大のロームブロックを斑状に含む)
- 5 : 増褐褐色粘土質シルト (炭化物、ローム小ブロックを若干含む)

295号土壤

- 1 : 増褐色砂質シルト (1cm大のロームブロックを斑状に含む)
- 2 : 增褐色シルト (增褐色シルトの小ブロック、炭化物を若干含む)
- 3 : 黄褐色シルト (F2に比しやや明るい色調、均質で若干砂質)
- 4 : 増褐色粘土質シルト (1cm大のローム・増褐色土ブロックを斑状に含む)
- 5 : 増褐色粘土質シルト (2cm大のローム・増褐色土ブロックを斑状に含む)
- 6 : 増褐色粘土質シルト (2cm大のローム・増褐色土ブロックを斑状に含む)
- 7 : 増褐色粘土質シルト (2cm大のローム・増褐色土を1:2の割合で含む)
- 8 : 増褐色シルト (比較的均質、若干ロームブロックを含む)
- 9 : 増褐色シルト質粘土 (粘性強、5mm大の増褐色土ブロックを若干含む)
- 10 : 増褐色シルト (しまりなし、1cm大のロームブロックがガサガサと混じる)

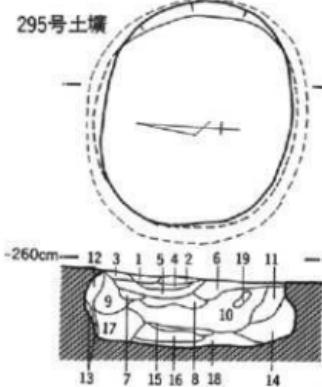


- 289号土壤
- 1 : 増褐色シルト質粘土 (比較的均質、やや暗灰色に近い)
 - 2 : 増褐色粘土質シルト (2~3cm大のロームブロック、若干の炭化物を含む)
 - 3 : 増褐色シルト質粘土 (ローム大ブロックが混入)

288a号土壤

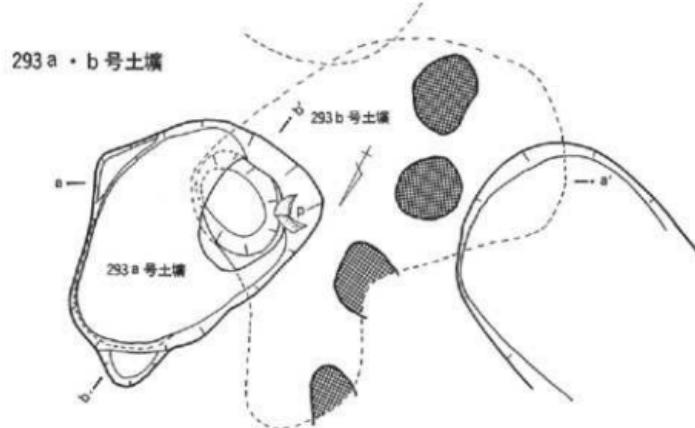
- ① : 増褐色シルト (1~2cm大のロームブロック、黄褐色粘土粒を含む)
 - ② : 増褐色シルト (ローム、増褐色土の各ブロックが半々に混じり合って現状となる)
 - ③ : 黑褐色シルト (多量の炭化物を含む)
 - ④ : 黑褐色シルト質粘土 (地山ロームに類似、微量の炭化物を含む)
- 288b号土壤
- 1 : 増褐色シルト (1cm大のロームブロック、微量の炭化物を含む)
 - 2 : 増黄褐色粘土質シルト (2~5cm大のロームブロックが斑状に混じる)
 - 3 : 増褐色粘土質シルト (3cm大のロームブロック、少量の炭化物を含む)
 - 4 : 増黄褐色粘土質シルト (F3に比しやや明るく黄褐色気味、土質は類似)
- 288c号土壤
- ① : 増褐色粘土質シルト (若干の炭化物を含む、地山ロームと類似する)
 - ② : 増褐色粘土質シルト (層下部で多量のローム小ブロックを含む、炭化物は全体にまばらに含まれる)

295号土壤

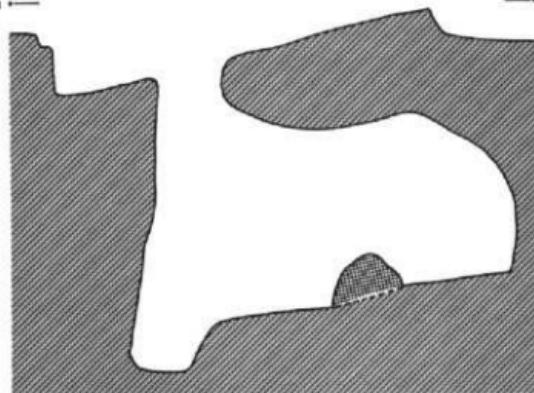


- 11 : 増褐色シルト (5cm大のロームブロックを含む)
- 12 : 増褐色粘土質粘土 (均質でまめの細い粒。やや赤味を帯びる)
- 13 : 増褐色シルト質粘土 (しまりなし、若干の炭化物を含む)
- 14 : 増褐色砂質シルト (しまりあり、ボソボソ増褐色土の小ブロック) を含む
- 15 : 増褐色シルト (しまりなし、若干の炭化物を含む)
- 16 : 増褐色シルト質粘土 (大ブロックのロームブロックを斑状に含む)
- 17 : 増褐色シルト (F1に似る、ロームブロックが多量が多い)
- 18 : 増褐色シルト質粘土 (ロームの大ブロックが混入)



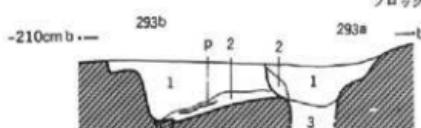


-210cm ← ————— a'



293a 号土壤

- 1: 黒褐色粘土質シルト（炭化物、ロームブロックを含む）
- 2: 黒褐色砂質シルト（若干の燒土、多量の炭化物を含む）
- 3: 黑褐色粘土質シルト（しまりなし。燒土ブロック、炭化物地山ブロックを含む）

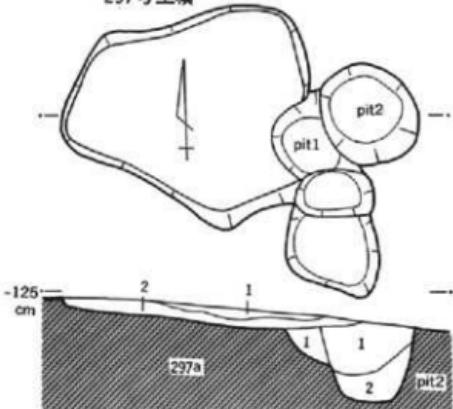


293b 号土壤

- 1: 黒褐色粘土質シルト（1cm大の炭化物と地山ロームブロックを露降状に含む）
- 2: 増褐色シルト質粘土（若干の炭化物、地山ロームブロックを含む。一括土器出土）

第24図 繩文時代土壤（8）

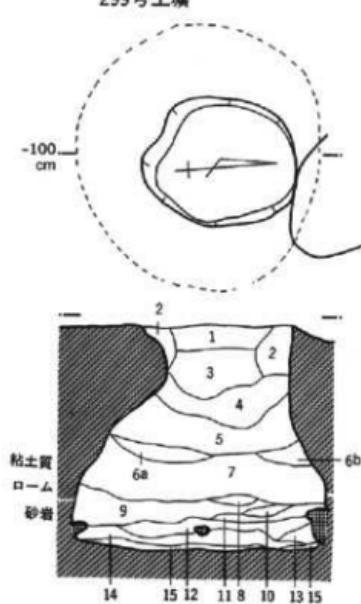
297号土壤



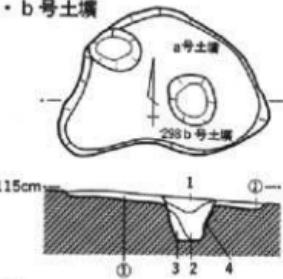
297号土壤

- 1 : 喀褐色シルト (均質でしまりあり)
 2 : 喀褐色シルトの小プロックを含む)
 pit2
 1 : 喀褐色粘土質シルト (2~3cm大のロームブロック。若干の炭化物を含む)
 pit1
 1 : 喀褐色粘土質シルト (5mm大のローム粒。炭化物を隠す状に含む)
 2 : 喀褐色粘土質シルト (F1に比しローム粒の量が多い)

299号土壤



298 a + b 号土壤



298 a 号土壤

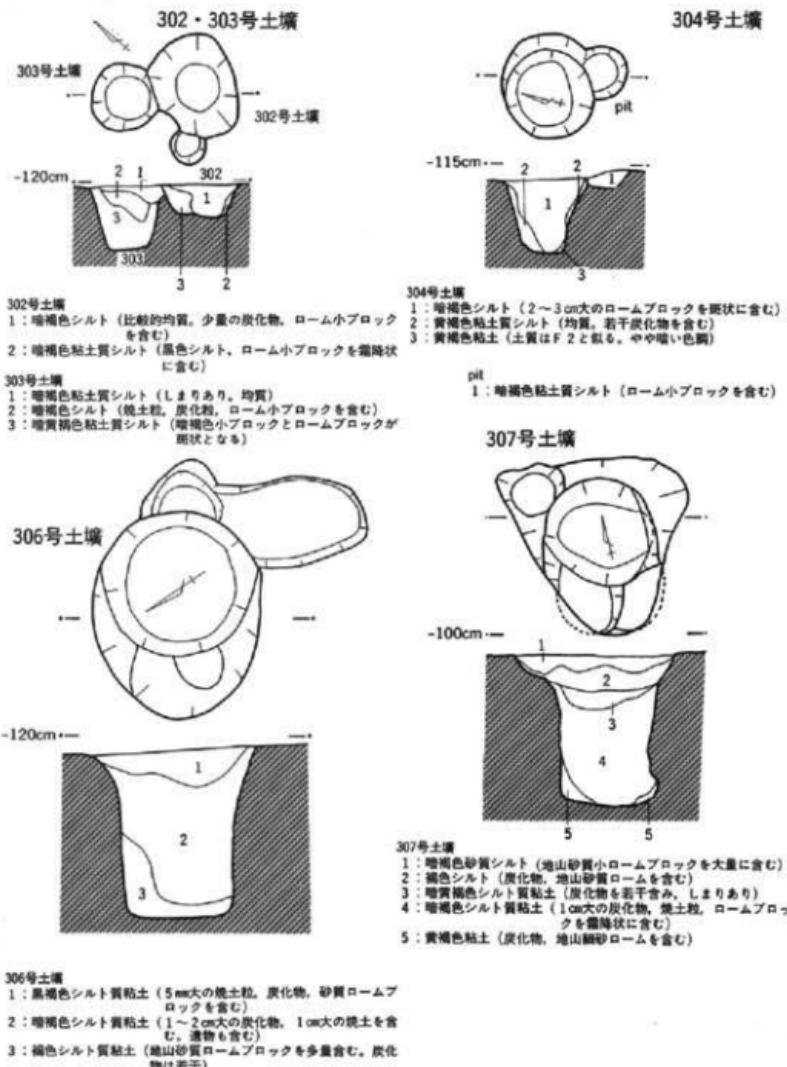
- ① : 喀褐色粘土質シルト (ロームブロック。喀褐色土を斑状に含む)
 298 b 号土壤
 1 : 喀褐色シルト (地土粒、炭化物を含む。やや苦味を帯びる)
 2 : 喀褐色粘土質シルト (F1に比し少量の地土粒。炭化物を含む)
 3 : 喀褐色シルト (大量のロームブロックを斑状に含む)
 4 : 黄褐色粘土質シルト (地山ロームに類似。葉の崩壊土か)

299号土壤

- 1 : 喀褐色砂質シルト (地土粒、炭化物、ロームブロックを含む)
 2 : 黑褐色シルト質粘土 (比較的均質、炭化物を若干含む)
 3 : 喀褐色粘土質シルト (大量の地土粒、ロームブロック、若干の炭化物を含む)
 4 : 喀褐色シルト質粘土 (大量的地土粒を含む。層下部で焼土が5cm前後堆積する)
 5 : 黑褐色粘土質シルト (大量的炭化物、若干の地土、ロームブロックで隔離状となる)
 6a : 喀褐色粘土質シルト (5mm大のロームブロックを含み F5に比し明るい色調)
 ⑥ : 黄褐色シルト質粘土 (焼土と炭化物を若干含む)
 7 : 黑褐色粘土質シルト (大粒の炭化物と焼土を含む)
 8 : 喀褐色シルト質粘土 (大粒の炭化物の他、砂を含みザラザラする)
 9 : 黑褐色粘土質シルト (F7に比しやや暗い。若干の炭化物、焼土を含む)
 10 : 喀褐色粘土質シルト (F6aに似る。やや暗い色調)
 11 : 喀褐色シルト質粘土 (燒土、炭化物を多量に含む)
 12 : 喀褐色粘土質粘土 (大粒の炭化物を少額含む)
 13 : 喀褐色粘土質シルト (地物、燒土粒を若干含む)
 14 : 黑褐色シルト質粘土 (多量の大粒の炭化物を含む)
 15 : 喀褐色砂質シルト (紫色を帯びる。地山砂岩が混じりザラザラとする)

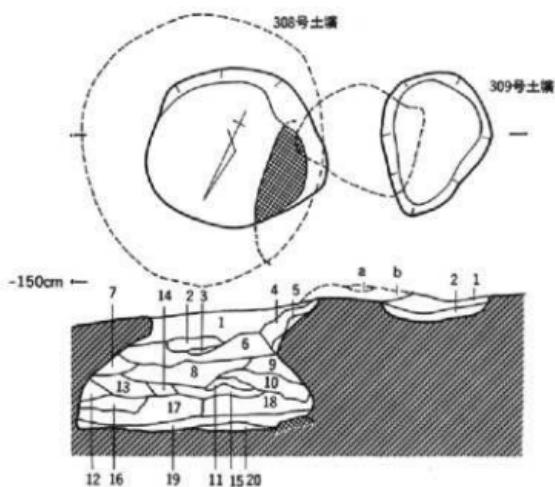


第25図 繩文時代土壤 (9)



第26図 繩文時代土壤 (10)

308・309号土壤



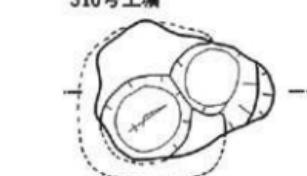
309号土壤

- 1: 喀褐色シルト (炭化物、焼土粒を少量含む)
- 2: 喀褐色シルト (焼粘土、若干の炭化物、焼土粒を含む)
- 3: 赤褐色シルト (真赤に焼けた焼土)
- b: 喀褐色シルト (焼土粒、炭化物を含む。やや硬い)

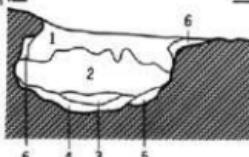
308号土壤

- 1: 喀褐色シルト (5mmの大ローム粒、若干の炭化物を含む)
- 2: 喀褐色シルト (F1に比し暗い色調、炭化物、焼土粒を含む)
- 3: 赤褐色粘土質シルト (焼土層、遺物、ローム小ブロック、炭化物を含む)
- 4: 喀褐色粘土質シルト (焼土粒、炭化物を含む)
- 5: 喀褐色粘土質シルト (少量の焼土粒、炭化物を含む)
- 6: 喀褐色シルト (5~10mmの大ローム小ブロック、焼土、炭化物を含む)
- 7: 喀褐色粘土質シルト (焼土粒、炭化物を含む)
- 8: 灰褐色シルト (多量の焼土粒、炭化物を含む)
- 9: 喀褐色シルト質粘土 (炭化物、ローム小ブロックを含む)
- 10: 喀褐色シルト (大量の焼土粒、小窓、ローム小ブロックを含む)
- 11: 喀褐色粘土質土 (焼土粒、炭化物、ローム粒を含む)
- 12: 喀褐色シルト (炭化物、明褐色小ブロックを含む)
- 13: 喀褐色粘土質粘土 (多量の焼土粒、若干の炭化物、ローム粒を含む)
- 14: 喀褐色粘土質シルト (焼土粒、炭化物、ローム粒、遺物を含む)
- 15: 喀褐色粘土質シルト (F14に比し焼土粒が少ない) (土質は似る)
- 16: 喀褐色シルト (焼土粒、炭化物を少量含む。硬くしまってい
- 17: 喀褐色シルト質粘土 (多量の炭化物、若干のローム粒、少量の遺物を含む)
- 18: 喀褐色シルト (多量の焼土粒、少量の炭化物、ローム粒を含む)
- 19: 喀褐色シルト質粘土 (少量の炭化物、ローム粒、少量の焼土粒を含む)
- 20: 灰褐色シルト (ローム小ブロックと混じり雑種状となる。少量の焼土を含む)

310号土壤



-80cm



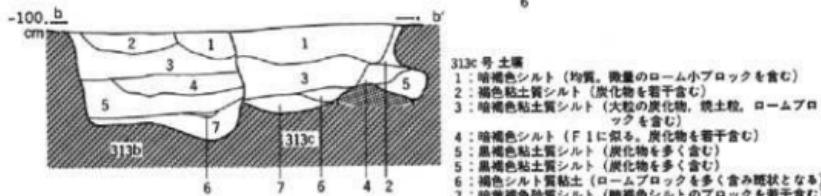
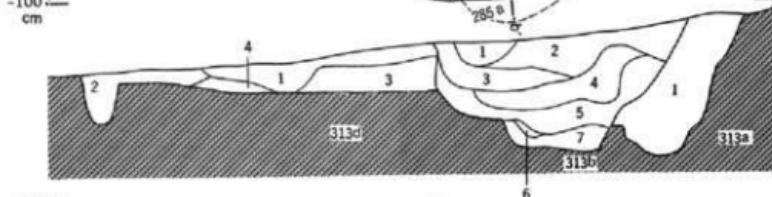
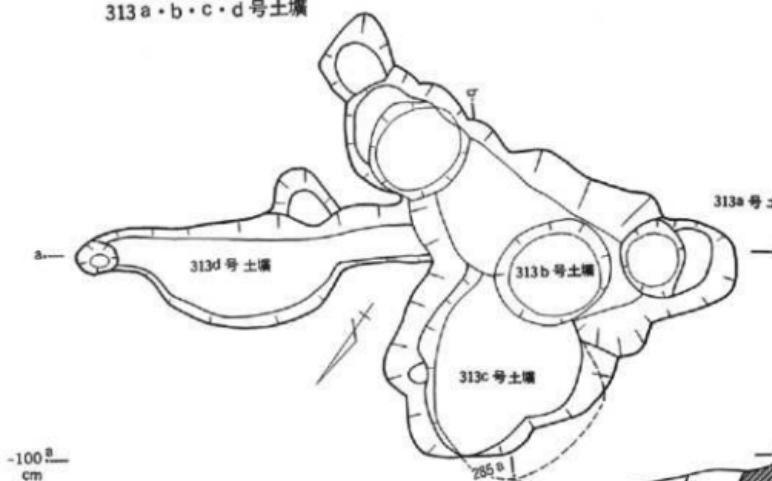
310号土壤

- 1: 喀褐色砂質シルト (ロームブロックと炭化物を若干含む)
- 2: 喀褐色シルト (焼土粒、炭化物を微量含む。全体にしまりがない)
- 3: 喀褐色粘土質シルト (少量だが大粒の炭化物を含む)
- 4: 喀褐色シルト質粘土 (砂質ロームブロック、炭化物を含む)
- 5: 喀褐色砂質シルト (地山砂質ロームに頗似する。若干炭化物を含む)
- 6: 喀褐色粘土 (粘性強。若干の炭化物を含む)



第27図 桶文時代土壤 (11)

313 a・b・c・d 号土壤



313a 土壤

1 : 喀褐色シルト (炭化物とロームブロックを含み塊状となる。
人为的な堆積と考えられる)

313c 号土壤

- 1 : 喀褐色シルト (均質。微量のローム小ブロックを含む)
- 2 : 褐色粘土質シルト (炭化物を若干含む)
- 3 : 喀褐色粘土質シルト (大粒の炭化物、燒土粒、ローム粒、ロームブロックを含む)
- 4 : 喀褐色シルト (F 1 に似る。炭化物を若干含む)
- 5 : 黒褐色粘土質シルト (炭化物を多く含む)
- 6 : 黑褐色粘土質シルト (炭化物を多く含む)
- 7 : 喀褐色シルト質粘土 (ロームブロックを多く含み塊状となる)
- 7 : 喀褐色シルト質砂質粘土 (喀褐色シルトのブロックを若干含む)

313b 号土壤

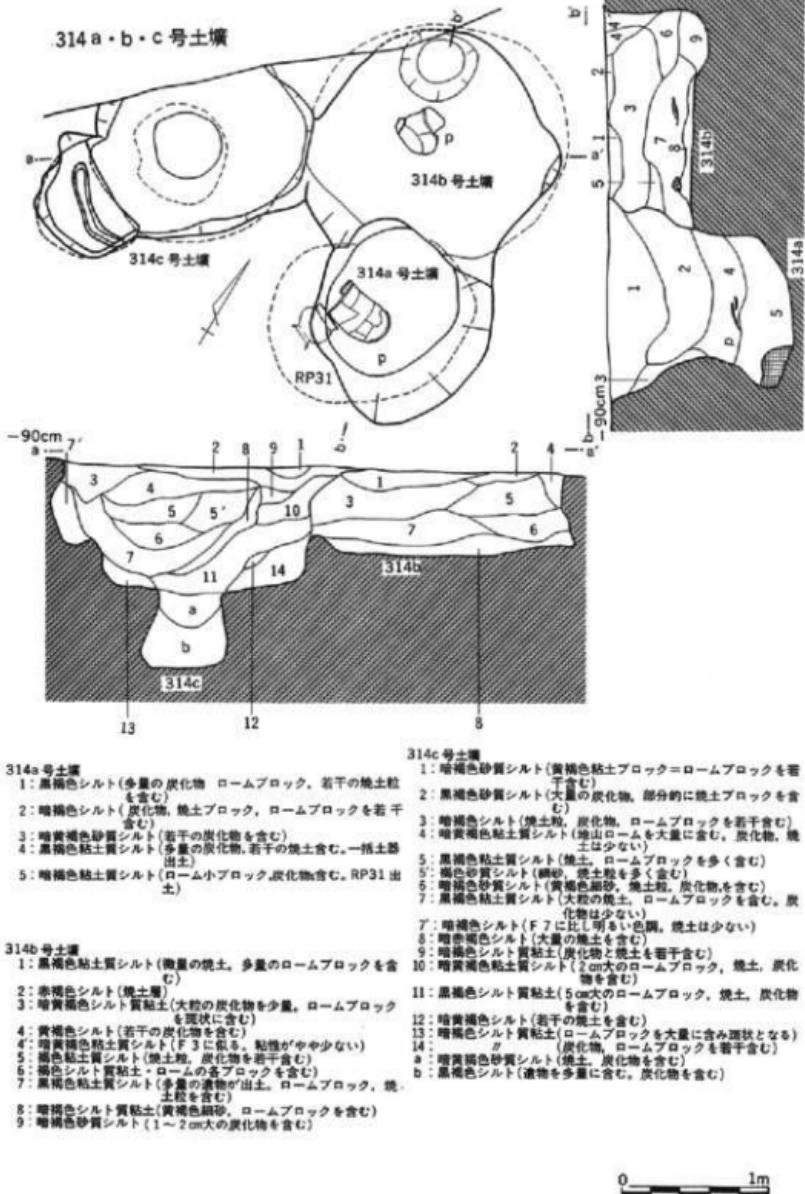
- 1 : 暗褐色シルト (燒土層。硬くしまっている)
- 2 : 喀褐色シルト (ロームブロック、燒土粒、炭化物を若干含む)
- 3 : 暗褐色シルト (均質。微量の炭化物を含む。ローム小ブロックを含む)
- 4 : 喀褐色粘土質シルト (黒褐色土。ロームの各ブロックを塊状に含む)
- 5 : 喀褐色シルト質粘土 (砂質、ロームブロック、若干の炭化物を含む)
- 6 : 黑褐色シルト質粘土 (若干の炭化物を含む)
- 7 : 喀褐色粘土質シルト (ローム小ブロック、炭化物を塊状に含む)

313d 号土壤

- 1 : 喀褐色シルト (ローム小ブロック、炭化物を若干含む)
- 2 : 喀褐色シルト (微量の炭化物を含む)
- 3 : 喀褐色シルト (微量の炭化物を含む。さらにロームブロックを含む)
- 4 : 喀褐色粘土質シルト (炭化物粒、ローム小ブロックを含む)

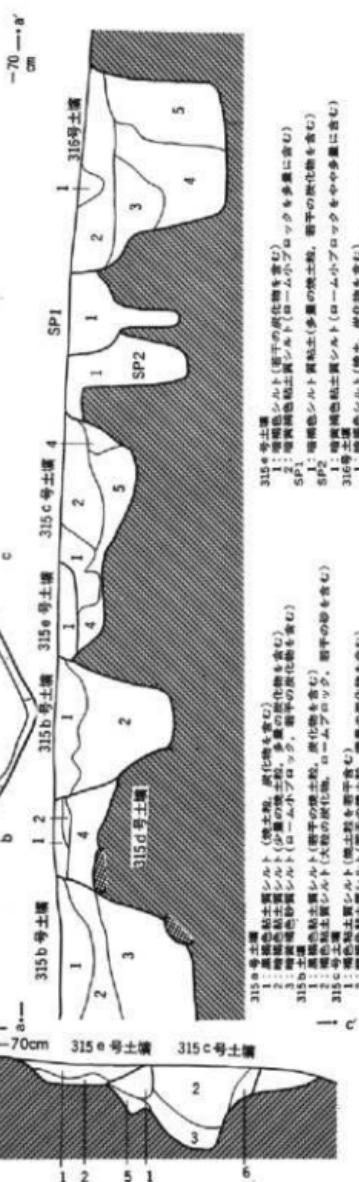
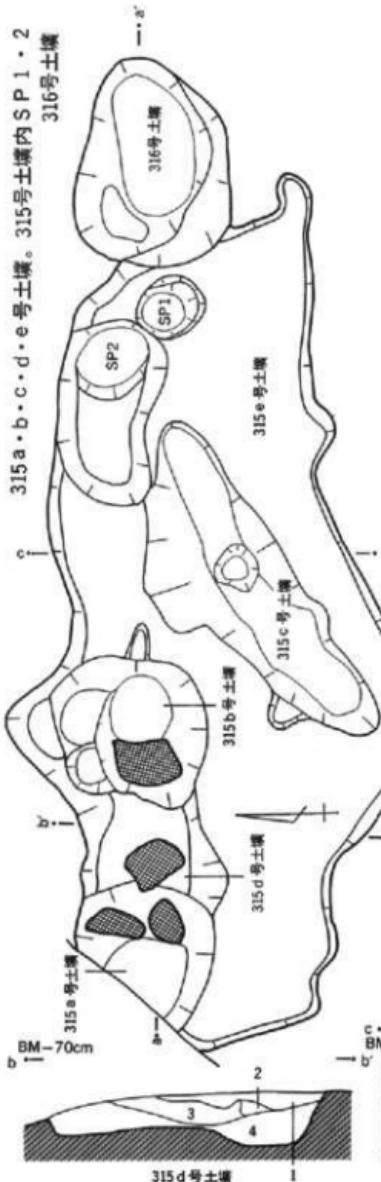


第28図 繩文時代 土壤 (12)



第29図 繩文時代土壤 (13)

315 a・b・c・d・e号土壤。315号土壤内 SP1・2
316号土壤



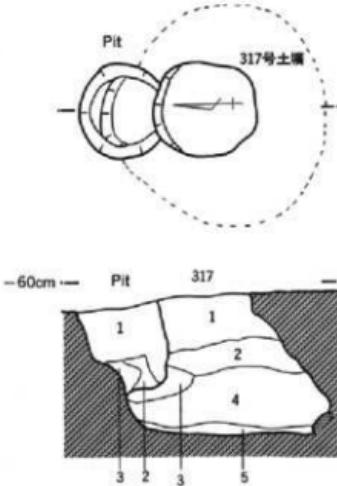
315号土壤
1 : 高張性セメントシルト (硬土質、炭化物を含む)
2 : 植物根の付着シルト (少量の植生砂、多量の炭化物を含む)
315a'号土壤
1 : 高張性セメントシルト (硬土質、炭化物を含む)
2 : 植物根の付着シルト (少量の植生砂、多量の炭化物を含む)
315b'号土壤
1 : 高張性セメントシルト (硬土質、炭化物を含む)
2 : 植物根の付着シルト (少量の植生砂、多量の炭化物を含む)
315c'号土壤
1 : 高張性セメントシルト (硬土質、炭化物を含む)
2 : 植物根の付着シルト (少量の植生砂、多量の炭化物を含む)
315d'号土壤
1 : 高張性セメントシルト (硬土質、炭化物を含む)
2 : 植物根の付着シルト (少量の植生砂、多量の炭化物を含む)
315e'号土壤
1 : 高張性セメントシルト (硬土質、炭化物を含む)
2 : 植物根の付着シルト (少量の植生砂、多量の炭化物を含む)
3 : 植物根の付着シルト (少量の植生砂、多量の炭化物を含む)
4 : 高張性セメントシルト (硬土質、炭化物を含む)
5 : 植物根の付着シルト (硬土質、炭化物を含む)
6 : 高張性セメントシルト (硬土質、炭化物を含む)

315号土壤
1 : 高張性セメントシルト (硬土質、炭化物を含む)
SP1 : 帶有褐色色斑点シルト (少量の炭化物を含む)
SP2 : 带有褐色色斑点シルト (少量の炭化物を含む)

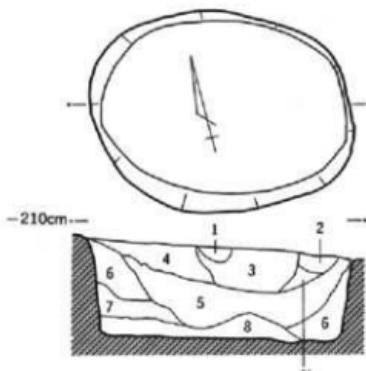
316号土壤
1 : 带有褐色色斑点シルト (少量の炭化物を含む)
2 : 带有褐色色斑点シルト (少量の炭化物を含む)
3 : 带有褐色色斑点シルト (少量の炭化物を含む)
4 : 带有褐色色斑点シルト (少量の炭化物を含む)
5 : 带有褐色色斑点シルト (少量の炭化物を含む)

第30図 繩文時代土壤 (14)

317号土壤



319号土壤



317号土壤

- 1: 黒褐色シルト(炭化物、ロームブロック、遺物を含む)
- 2: 墓塗色粘土質シルト(ローム小ブロック、5~10cmの炭化物を斑状に含む)
- 3: 墓塗色粘土質シルト(粘性やや強。10cmのロームブロック。炭化物を斑状に含む)

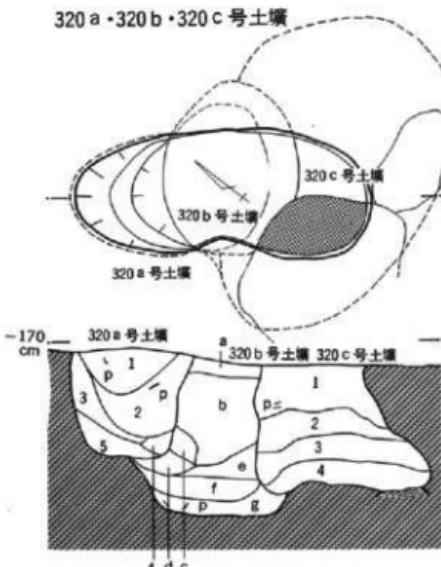
PR

- 1: 墓塗色シルト(3~5cmのロームブロック。若干の炭化物を含む)
- 2: 墓塗色粘土質シルト(1~3cmの大ブロック、5cmの炭化物を含む)
- 3: 墓塗色シルト質粘土(地山ロームブロックを大量に含む。堅い墓塗土か)

319号土壤

- 1: 墓塗色粘土質シルト(10cmの大羅ムブロック。5cmの大ロームブロックを斑状に含む)
- 2: 墓塗色土(燒土層。粒子の細い焼土層となっている)
- 3: 墓塗色シルト(地山小ブロック、炭化物、ロームブロックを斑状に含む)
- 4: 墓塗色粘土質シルト(1cmの大ロームブロック。青色燒土層をまきに含む)
- 5: 墓塗色粘土質シルト(5cmの大ロームブロック。炭化物を斑状に含む)
- 6: 墓塗色シルト(均質でしまりあり)
- 7: 墓塗色粘土質シルト(5cmの大ロームブロックを若干含む)
- 8: 墓塗色シルト(しまりあり。ロームブロックを若干含む)

320 a - 320 b + 320 c 号土壤



320 a 号土壤

- 1: 墓塗色シルト(大量的炭化物を含む。ロームブロックを層中央部に含む)
- 2: 墓塗色粘土質シルト(F 1に比しシテが炭化物。ロームブロックを含む)
- 3: 墓塗色シルト(質粘土・粘性質。若干の炭化物を含む)
- 4: 墓塗色粘土質シルト(炭化物。地山砂質ロームブロックを含らる)
- 5: 墓塗色粘土質シルト(均質でしまりあり。青色燒土を若干含む)

320 b 号土壤

- 1: 墓塗色シルト(均質的均質。1~2cmの大ロームブロックを斑状に含む)
- 2: 墓塗色粘土質シルト(2~3cmのロームブロック、5cmの炭化物を斑状に含む)
- 3: 墓塗色粘土質シルト(微量の炭化物を含む。比較的均質)
- 4: 墓塗色粘土質シルト(均質。地山砂質ロームブロックを含らる)
- 5: 墓塗色粘土質シルト(均質でしまりあり。青色燒土を若干含む)

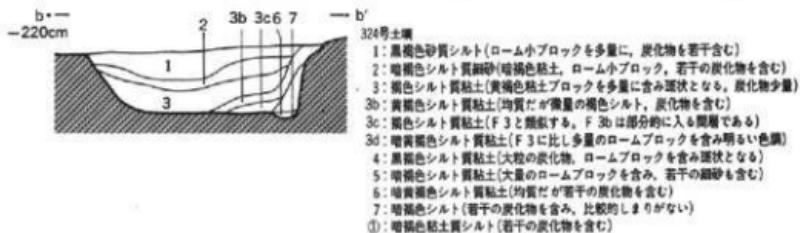
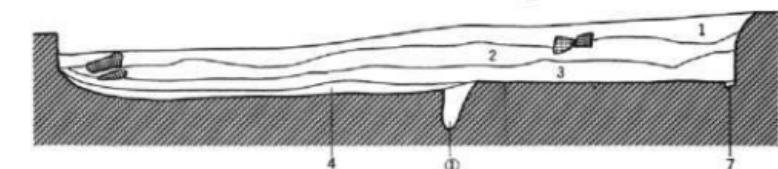
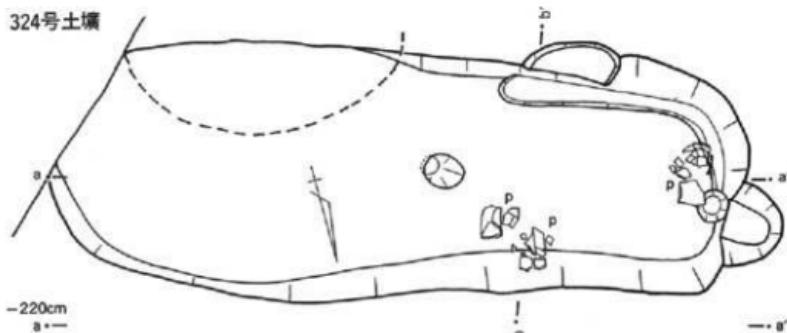
320 c 号土壤

- 1: 墓塗色粘土質シルト(比較的均質。層下部に赤色粒子。ロームブロックを含む)
- 2: 墓塗色粘土質シルト(均質。砂質層。若干の炭化物を含む)
- 3: 墓塗色粘土質シルト(F 2に比し青い色調。遺物を若干含む)
- 4: 墓塗色シルト(ロームブロックを斑状に含む)

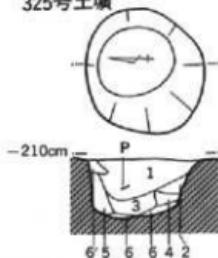
0 1m

第31図 繩文時代土壤 (15)

324号土壤



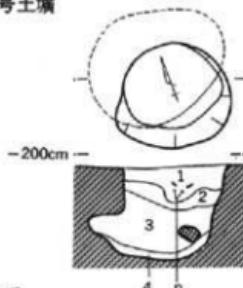
325号土壤



325号土壤

- 1: 墓褐色シルト(5mm大のロームブロック、2mm大の炭化物を複数状に含む)
- 2: 墓褐色粘土質シルト(1~2mm大のロームブロックが若干混じる)
- 3: 墓褐色粘土質(2F 2に比し明るい色調、5~10mm大の炭化物を含む)
- 4: 墓褐色シルト質粘土(墓褐色土とロームブロックを斑状に含む)
- 5: 墓褐色シルト質粘土(大量のロームブロックを含み斑状となる)
- 5': 墓褐色シルト質粘土(地山ロームブロックがF 5にブロックで包まれる)
- 6: 墓褐色シルト(均質でやや砂質、微量の炭化物を含む)

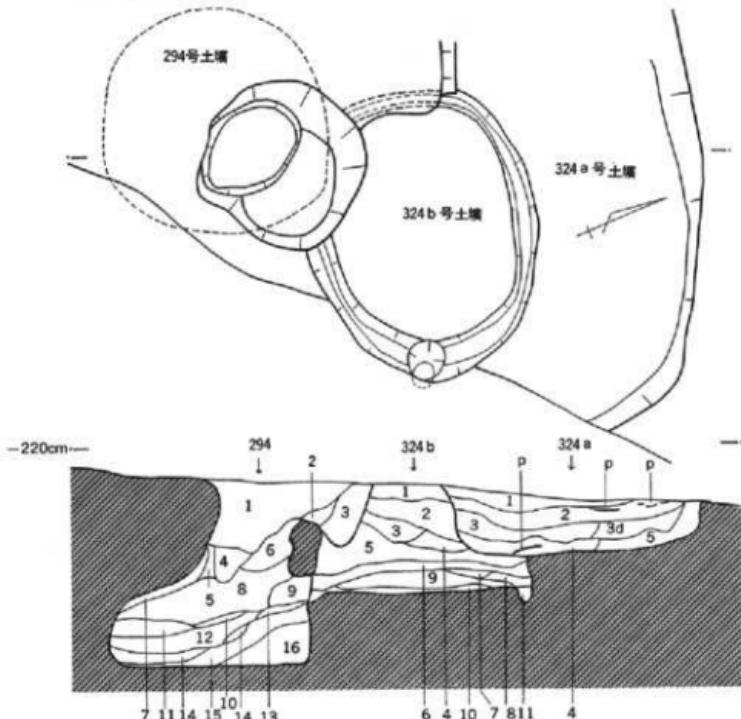
328号土壤



328号土壤

- 1: 墓褐色シルト(均質でよりよりあり。炭化物、ロームブロックは極少である)
- 2: 墓褐色粘土質シルト(均質でよりよりあり。炭化物、ロームブロックは極少である)
- 3: 墓褐色粘土質シルト(暗褐色、大量の炭化物、5~10mmのロームブロックを含む)
- 4: 墓褐色シルト質粘土(暗褐色シルトの小ブロック。若干の炭化物を含む)

294・324 b 号土壤



294号土壤

- 1: 黒褐色シルト[ロームブロック, 塵化物, 焙土粒を若干含む]
- 2: 増褐色砂質シルト[ロームブロック, 塵化物, 焙土粒を若干含む]
- 3: 増褐色色鉛鉱砂[ロームブロック, 焙土, 塘化物, 小礫を若干含む]
- 4: 黃褐色シルト質粘土[地山ロームの基礎と考えられる]
- 5: 増褐色シルト質粘土[増褐色シルトを斑状に含む]
- 6: 黑褐色砂質シルト[黄褐色ロームを斑状に, 塘化物を若干含む]
- 7: 増褐色シルト[しまりなし, 若干のロームブロックを含む]
- 8: 黑褐色シルト[塘化物, 焙土粒を大量に含む]
- 9: 暗褐色砂質シルト[ロームブロック, 塘化物を若干含む]
- 10: 暗褐色砂質シルト[F 9に比し塘化物の量が多い]
- 11: 黑褐色粘土質シルト[F 8に比しやや多い]。塘化物, 焙土粒は少ない
- 12: 黑褐色粘土質シルト[F 8・11に比し塘化物は少く, 焙土粒は含まない]
- 13: 黑褐色砂質シルト[若干の塘化物, 増褐色鉛鉱砂を含む]
- 14: 黑褐色砂質シルト[F 13に比し塘化物の量が多い]
- 15: 増褐色色鉛鉱砂[均質だが若干ロームブロックを含む]
- 16: 暗褐色シルト質鉛鉱砂[ロームブロック, 增褐色シルトブロックを含む]

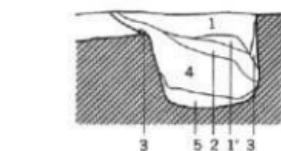
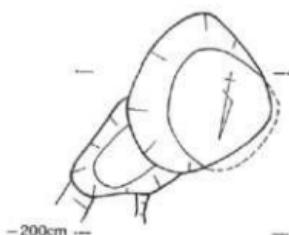
324 b号土壤

- 1: 黑褐色粘土質シルト[しまり強, 塘化物, ロームブロックを若干含む]
 - 2: 増褐色シルト質粘土[ロームブロック, 増褐色砂のブロックを多く含み, 塘化物を若干含む]
 - 3: 黑褐色シルト質粘土[ロームブロックを斑状に含む, 塘化物は少ない]
 - 4: 増褐色シルト質粘土[ロームブロックを斑状に含む]
 - 5: 暗褐色粘土質シルト[全体にサラサラし, ロームブロック, 鉛鉱砂を斑状に含む]
 - 6: 増褐色シルト質粘土[若干の塘化物, 斑状のロームブロックを含む]
 - 7: 増褐色粘土[塘化物を若干含む]
 - 8: 黑褐色シルト質粘土[ロームブロックを斑状に含む, 塘化物は少ない]
 - 9: 暗褐色粘土質シルト[比較的均質, 若干のロームブロック, 鉛鉱砂を含む]
 - 10: 増褐色粘土質シルト[比較的均質, 若干の塘化物を含む]
 - 11: 暗褐色砂質シルト[ロームブロックと塘化物を若干含む]
- * SK324aについては第32図に注記を記載。

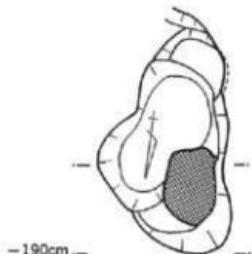


第33図 繩文時代土壤 (17)

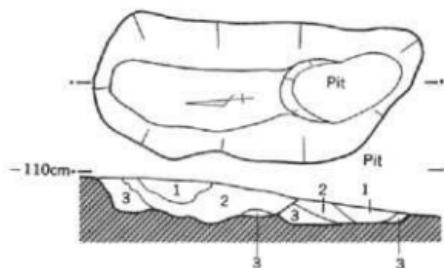
329号土壤



333号土壤



338号土壤



338-a号土壤

- 1: 黒褐色シルト質粘土(5mm大の炭化物、ローム小ブロックを霜降状に含む)
- 2: 黒褐色シルト(均質、微量の炭化物を含む)
- 3: 増黄褐色粘土質シルト(暗褐色シルトのブロックと斑状に混じりあう)

338-b号土壤

- 1: 増褐色シルト(比較的均質、1mm大の炭化物、ロームブロックを若干含む)
- 2: 増褐色シルト(均質、微量の炭化物を含む)
- 3: 増黄褐色シルト(1~5mm大のロームブロックを霜降状に含む)

Pit

- 1: 増褐色粘土質シルト(しまりあり、1~2mm大のロームブロック、5mm大の炭化物、土器を含む)
- 2: 増褐色シルト質粘土(粘性強、2~5cm大のロームブロックを斑状に含む)
- 3: 増黄褐色シルト(しまりなし、ロームブロック)

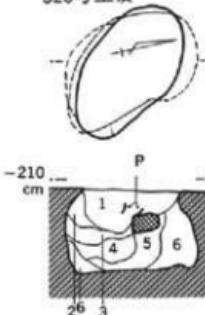
333号土壤

- 1: 増褐色シルト質粘土(炭化物、青褐色ロームブロックを含む)
- 2: 増黄褐色シルト質粘土(多量の炭化物、ロームブロックを多く含む)
- 3: 青褐色粘土質シルト(若干の炭化物を含む)
- 4: 增褐色シルト質粘土(F1に似る。燒土を含む点で異なる)

329号土壤

- 1: 黒褐色シルト質粘土(青褐色細砂、ロームブロック、炭化物を含む)
- 1': 黑褐色シルト質粘土(F1にさらに大量のロームブロックを含む)
- 2: 増褐色シルト質粘砂(若干の炭化物、少量のロームブロックを含む)
- 3: 褐色粘土質均質で、炭化物は含まない)
- 4: 増黄褐色シルト質粘土(若干の炭化物、黒色粘土のブロックを含む)
- 5: 増褐色粘土質シルト(若干の炭化物、黒色粘土のブロックを含む)

326号土壤



第34図 繩文時代土壤 (18)

3 土 器

今次の調査で出土した縄文時代の土器は、整理箱にして79箱である。うち遺構内より出土した土器片は整理箱に約20箱、一括・完形土器は32個体を数える。時期は、縄文時代の前期後葉・中期初頭・後期後葉の時期に分けられ、その大半は縄文時代前期後葉の一群が主体を占めている。とくに今回は、縄文時代の住居跡や土城内の覆土層中から出土した、前期後葉や中期初頭の土器を中心に簡単に分類を行ない、それぞれの描出された技法や文様ごとに類別し概括することにし、土器の縄文原体の記述については施文された方向によって書き表わすことにした。

1) 土器片の分類 (図版28~45)

a 類土器 竹管や半截竹管あるいは棒状工具などの施文具によって、沈線文様や爪形・円形刺突文様などを描出している一群である。

(a 1類)

深鉢形土器の器面全体に施される。1条～数条の沈線を組み合せて斜状・下方向に直線や屈曲線になるもの。あるいは1～2条の沈線で格子目状の文様を描出している。また口縁部では口唇と平行に走る沈線や鋸歯状の沈線などもみられる。

(a 2類)

半截竹管による爪形文を施すものである。口唇の真下や隆縁の上部・側面などにやや間隔をおいて刺突するもの。他方、粘土紐の貼付に細かく連続して押引いているものもある。

(a 3類)

大きく外反する深鉢形土器の口唇ならびに口縁部に、細い円形の竹管が施され、1～2条の沈線によって区画されている。また、鋭利な棒状工具の先端を利用した、不規則な刺突が施されてるものもみられる。

(a 4類)

いわゆる集合沈線の一群で、口唇部や口縁部に主体的に施されている。

b 類土器 細隆粘土紐貼付によって、円形・山形・鋸歯・平行線文などの文様を描しており、口縁部から胴中半部にかけ文様が主体的にみられる。ときには、a 2類でみられた連続的な爪形文と施文の方法が一致する。文様の構成は、円形(渦巻状)・鋸歯状文などと連結し、横位方向に文様の構成が成り立っている。

(b 1類) 単純に粘土紐を貼付している。

(b 2類) 粘土紐貼付により連続爪形文が施される。a 2類と一部共通する。

c 類土器 各種の縄文原体の一群である。単節縄文・絡条体文・異条斜条文などがある。

(c 1類)

単純縄文や前々段多条文（0段多条文）などによる原体を用いて、口唇付近から胴下部にかけての器面全体に施している。施文の方向は、斜状や縦位方向に走るものが大半であるが、横位方向になるものは羽状縄文になっている。なお、前々段多条文の撚紐は3～5本まで確認されている。

(c 2類)

単軸や多軸を用いた絡条体文の一群で、各種の撚糸文が施されている。今回確認された各種の撚糸文は、木目状・網目状文のこの時期に特徴的なもの他に、0段3本多条の複節の撚糸になるものもある。多軸を用いた平織状撚文は、L 1条を4本軸に左巻にするものなどがある。

(c 3類)

いわゆる異条斜条文の一群である。斜条文の条をみると、3段L R Lの複節をもつ1条と、一段Rの無節2条が互にあらわれ、斜状方向に施されているものもある。

2) 完形・一括 (第35・36図 図版46・47)

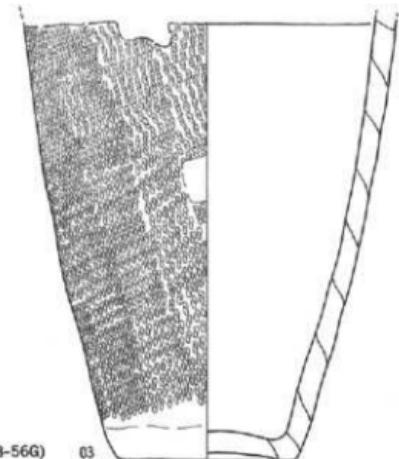
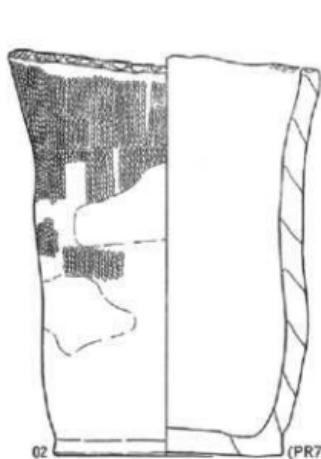
(0 1) 器形は、口縁部が外反し胴上半部の脹らみが最大となり、下半部はほぼ直立するキャリバー形の深鉢土器である。口径22.0cm・現存高19.5cm・胴最大部22.5cmである。文様は、口縁部帯と頸部帯がほぼ同様な構成で、沈線による半円重弧や平行沈線によって描出され、横位方向に4単位の構成となっている。縄文の原体は、前々段4本多条のLRの原体を斜状に施している。

(0 2) 器形は、口唇が若干外反する深鉢形土器で、口径16.7cm・器高19.7cm・底径12cmである。口唇部には棒状工具による刺突や刻目がみられる。縄文原体は、R無節の単軸絡条体による撚糸文で、縦位方向に不連続的に施文する。胎土に纖維を混入している。

(0 3) 器形は深鉢形土器で、現存高21.0cm・底径9.1cmである。胴部には、多軸絡条体(L 1条の4本多軸)の原体を、斜位方向に回転している。胎土には纖維が混る。

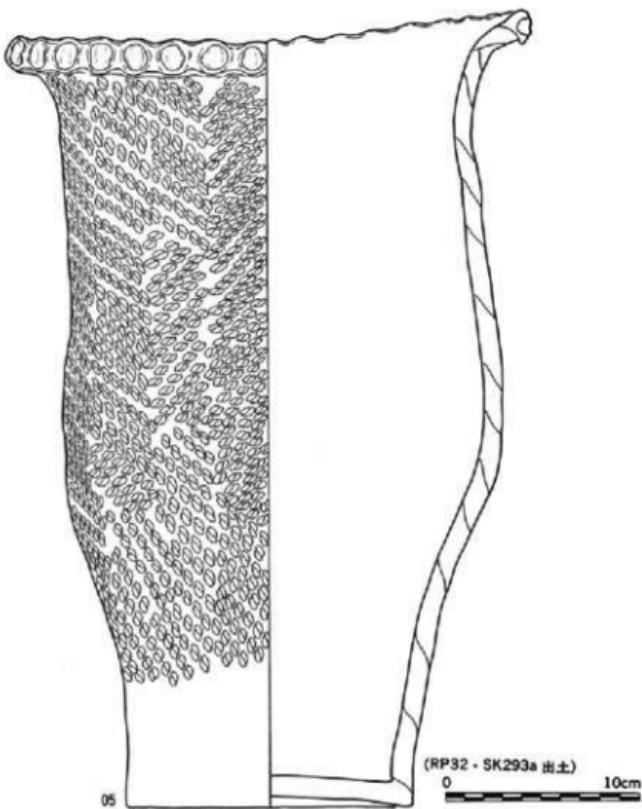
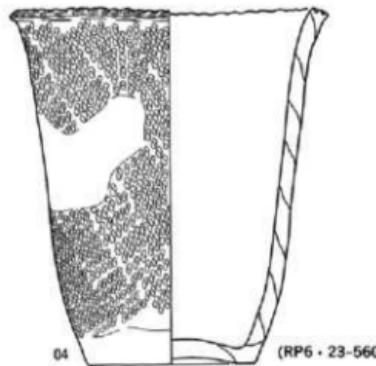
(0 4) 器形は、口縁部が大きく外反し胴中下間に脹らみがあるキャリバー形の土器で最大径(口径)27.9cm・器高41.0cm・底径14.7cmである。口唇には指頭による浮文がみられる。胴部には、RLR複節の単軸絡条体を地文とし、斜位方向に回転し施している。

(0 5) 器形は、口唇部が若干外反する小形の深鉢土器で、口径16.4cm・器高18.0cm・底径8.3cmである。口唇部や胴部には、地文を多軸絡条体(R 1条の無節・4本多軸)の原体を斜状方向に回転施文している。



0 10cm

第35図 繩文土器実測図（1）



4 石器・石製品

今次調査によって出土した石器には石鎌、石錐、尖頭器、石匙、寛状石器、削器、磨製石斧、磨石、凹石、石皿、石錘の各器種がある。しかし、toolが多い割合に剝片類は整理箱にして4箱と少なかった。これらの石器についても、縄文土器と同様、二次調査の資料が出揃った段階で検討することとし、今回は略記するにとどめる。なお、石製品として玦状耳飾りが1点出土している。

石 鎌 (図版48)

石鎌は70点の出土がある。形態的には1～4次調査で出土したものとはほとんど変わることがないが、1点だけ有茎のものがある。この石鎌には頭部から尖頭部下端にかけアスファルトが付着している。無茎の石鎌は2～3cmの長さで最大幅が2cm前後の中形で基部に深い抉入のあるものと、長さが3～4cmで最大幅が1.5～2cmの細身で中形のもの、それに長さが4～6cmの大形の一群の三類に大きく分けられる。後二者は、基部に抉入をもつものと、基部が丸味を帯びる円基鎌や直線状を示す平基鎌がある。基部にアスファルトが付着したものは、有茎鎌を入れて5点あった。

石 锥 (図版49 上段)

石錐は5点出土した。尖頭部とつまみ部の区別が容易であるもの（上段右2点）と棒状で、つまみ部との境界が不明瞭、断面三角形ないしは菱形の尖頭部をもつもの（左端の2点）、全体的に柳葉形となり凸レンズ状の尖頭部をもつもの（下段右2点）の三者がある。上段右端の石錐は使用による摩滅で、磨製の石器と見間違うような光沢をもっている。

尖頭器 (図版49 下段)

両面加工ないしは半両面加工で尖った先端部をもち基部側も尖頭状もしくはやや丸味を帯びるものを尖頭器として分類した。横断面はすべて凸レンズ状を呈する。14点の出土がある。長さが5cm前後の小形のもの（上段左端）と、10cm前後の長さをもち柳葉形を呈するもの（中央）、それに、長さが10cmあるいはそれ以上となり、幅広で木葉形になるもの（下段、右端の4点）の三者がある。

石 匙 (図版50～51)

基部につまみが形成されている石匙は全部で69点出土した。打製石器では石鎌に次ぐ量となっている。これらは大きく縦形（図版50）と、横形（図版51）に分けられるが、その中間的な形態をもつものもある。

縦形の石匙には、両面加工となって先端が尖がり、つまみがなければ尖頭器と言えるようなものと、両面加工であるが先端部が丸味をもつもの、片面加工で先端にフルーティング様の剥離をもち三縁刃が刃部となるもの、そして、周辺に急角度のプランティング様の

剥離を施すものなど多様である。また、図版にはのせなかったが、両側縁や末端部にノッチが入るものも認められた。

横形の石匙は縦形の石匙にくらべて量は少ない。両面加工や片面加工など、面的な加工が施されたものではなく、ほとんど周辺加工によって刃部が形成されている。末端の刃部が直線状になるものと、弧を描くものがある。

amatōshi (図版52)

両面加工や、片面加工などの面的な加工が施され、長軸の末端に刃部をもつ石器で36点が出土した。断面は凸レンズ状またはカマボコ形を示すものが多く、先端部にフルーティング様の剥離が認められるものと、それがないものがある。

kōki (図版52下段右2点)

剥片の縁辺に調整加工を施して刃部を作出した石器で27点の出土がある。調整加工は縁辺部に限られ、緩い角度で浅い剥離が施されている。

mōseki (図版53)

全部で19点出土したが完形品は少なく、刃部だけ、あるいは基部だけという資料が多い。上段の左から2番目の石斧は硬玉製の玉斧で擦切り手法によって製作されている。他の石材は緑泥片岩ないし石英安山岩製で定角式になるものが多く、初期整形の際の敲打痕を残す資料も多い。また、薄手の棒状の礫の先端だけを磨いたものも2点出土しており、なかには縦に折れた資料の先端部を研磨して再生した資料もある（中上段の中央）。

mōseki (図版54)

今次調査で出土した石器のなかで最も多いのが磨石である。土壌などの遺構から139点そしてI～V層の包含層から319点の合わせて458点が出土した。大半は平坦な河原石の両面に磨痕をもつものであるが、なかには球形を呈するものや、断面三角形の長い礫の一角が面取りされたようなものもある。また、両面と両側、あるいは上下端など磨痕が三ヶ所以上に認められるものもある。下段左は断面三角形の三角柱を呈する素材の全面に磨痕をもち、さらに、それぞれの稜線にも面取りのような磨痕がある特異な磨石である。

ikiteki (図版55)

凹石は10点だけで磨石にくらべ少ない。両面に1ヶ所づつの凹痕をもつものの他、複数の凹痕のあるものもある。

seki (図版55下段右)

多孔質の石材の一面に深い磨面をもつ石皿が2点出土した。

seki (図版55下段左)

扁平な円礫の両端から打欠きが施された礫石錐で1点だけの出土である。

V まとめと課題

1 平安時代の遺構と遺物について

今次調査によって庄内地方では類例の少なかった竪穴住居跡群が検出された。これらは方形プランでカマドをもつ4号住居跡、方形プランであるが掘り込みが深く地床炉をもつ5・6・7号住居跡、長方形のプランをもち同じく地床炉をもつ1号住居の三タイプが確認された。5～7号住居跡は遺物の量も少なかったことから、三者が年代差をもつかどうかについては明確な答を出すことはできなかつたが、4号住居と1号住居では前者がより古い様相をもつようである。2次調査の予定地となるY列80以南においても竪穴住居の一角落にみられる遺構を検出しており、これらの関係については来年度の調査で明らかにすることが課題となろう。

遺物では輪積痕を明瞭に残す土器の性格が問題となろう。本遺跡では各住居跡から出土しており、特に1号、4号住居跡からはかなりまとまった量が出土した。1号住居跡では焼面を伴う遺構から、また、4号住居跡ではカマド付近から出土し、例外なく二次的な火熱を受けていた。この種の土器は若狭や能登の平安時代前期の製塩土器に共通し（米沢1980他）、庄内でも製塩に使われた土器として扱われ（川崎他1981）、筆者らもこの考えを踏襲した（阿部・渋谷）。しかし、本遺跡を除けば、この種の土器が出土した遺物は現在の海岸線からは5～10kmも離れており、遺跡内で製塩を行ったとした場合、海水準の変動を考慮に入れても、海水の運搬は避けられないことであり、「せいぜい4kmのところまで海であった時期があったのだから——中略——海水の運搬にはさして困難をきたさなかつたであろう」（川崎他1981）という理解が当を得ているとは考えにくい。たとえ濃縮されたものとは言え、海水のままで数キロの道のりを運搬してまで内陸部の遺跡で製塩を行う必然性がどこにあるかという点に納得のいく説明が必要であったと考える。本遺跡の場合は、これらの遺跡にくらべ海岸までの距離は近いが、海進を考えたとしても10m内外の標高差をもつ台地上まで海水を運ぶことは容易なことではなかつたと思われる。

この種の土器が内陸部あるいは海岸から近い距離にあるが標高差をもつ遺跡から出土した例として今までの知見によれば庄内地方以外の北部日本海側では次の二遺跡、三例がある。ひとつは、越後国衙または、頸城郡衙として擬定されている新潟県新井市の栗原遺跡である。栗原遺跡は現在の海岸線からは15km程内陸部に入った所に位置し、昭和56年の第四・5次調査においてSD1から奈良時代の須恵器と共に出土している。口径20.2cm、推定器高18.5cmで器形は平底で口縁がやや開く深鉢形となる。やはり、製塩土器として評価されている（坂井1982）。もう一遺跡は秋田城跡で昭和50年の第17次調査と、昭和51

年の第18次調査で竪穴式住居跡から出土している（石郷岡1975、小松1976）両調査区とも現在の海岸線からは2～3kmに位置し、標高は30～40mである。17次調査では10世紀以降と推定された201号住居跡埋土から3個体出土している。図示されたものは、口径11.2cm、器高21cmで底部からほぼ垂直に立上り、平坦な口唇部をもつことなど吹浦遺跡出土の例に類似する。また、18次調査でも289号住居跡の床面から出土している。実測図から判断して口径12.5cm前後、器高13.2cm前後でやや内湾気味に立上っている。201号出土のものは「円筒形土器」と呼ばれ、289号住居跡のものは土師器の一種の「円筒状土器」として扱われている。この二遺跡の位置的な状況から見れば、出土した場所において土器製塩が行なわれた可能性は少ないとみて良いだろう。

しかし、この種の土器は若狭・能登の海岸部においては、製塩に使われたことは事実である。そして、また、内陸部で出土したものでも例外なく二次的に強い火熱を受けていることが特徴でもあり、出土した集落において土器製塩が行なわれた可能性が少ないとすれば、それが存在する理由として次の二つのことが考えられる。ひとつは、海岸部で土器製塩に供され二次的な火熱を受けた土器が何らかの理由で内陸の集落に運び込まれたこと。もうひとつは製塩のための土器として製作されたが、内陸の集落では強い火熱を要する、または結果的に強い火熱を受ける、別の用途に使われたこと、である。

吹浦遺跡は以上の諸例から見れば、海岸に近く標高も土器製塩の可能性を完全に否定しうるほどのものではないにしても、後者の可能性を追求してみることも必要ではないかと考える。その場合のヒントとして、本遺跡の1～4次調査の際に出土された「煮沸用具」との見地に立って検討する必要もあるのではないかとも思われる。すなわち、柏倉、江坂氏によって縄文時代の煮沸用土製品として紹介されたものである（柏倉、江坂他1955、PP 91～93）。このうち、器台と報告された土製品は、正式な発掘調査の前に土取りによって壊滅した住居址から発見・採取された「輪積法による厚手土器」であり、側壁に四個の小孔が穿っていることと、蓋、底を欠く土管状であることを除けば、今回、平安時代の住居跡から出土したものと極めて良く類似することに気付く。この土器が炉跡から出土したものとすれば、住居址は平安時代の竪穴住居となるであろうし、その出土状況から、コンロ形の煮沸用具としての用途が推定されるのであれば、それは当然、平安時代の煮沸用具と言えるのである。今回の調査では、このような推定を結論づけるような状況的な証拠を得ることはできなかったが、丸底の甕や鍋の存在からして、興味ある仮説と思われる。二次調査においても、この種の土器は多く出土することが予想されることから、内陸部から出土するこの土器の性格を解明するためにも、その状況的な属性を把握することは重要な課題となるであろう。

2 繩文時代の遺構と遺物について

1) 遺構

今回の調査において、検出された縄文時代の遺構は竪穴住居跡2棟・土塙93基（うち精査したもの81基）、その他不明のピット群である。その分布状況は、平安時代の遺構群とは調査区域の中央部の平坦地で若干の複合の状態がみられたものの、これら遺構群とはある程度分布の状況が異なるものである。縄文時代の住居跡や土塙群は、台地の平坦地より移傾斜地に在り、とくに土塙群が調査区域の東側に延びている。住居跡と土塙群の位置的関係は、今回は住居跡の検出が2棟と少ないため、次回調査にてその点が明らかになると考えられ、本県における縄文時代前期後葉期の集落構成単位を知るうえで、貴重な好資料といえよう。

住居跡は、300・301号住居跡とも平面プランが不整の隅丸長方形を呈し、長軸径の大きさが5~6m前後となっている。炉跡は、いずれも平面形が不整形を示し、若干の掘り込みをもつ地床炉であり、定形化された構築として造られておらず不明瞭であるが、2つの炉跡とも住居跡の中央部から北側や東側によっており、住居跡と炉跡の位置関係が共通しており、縄文時代前期後葉期の特徴を示している。柱穴の構成は、301号住居跡は炉を中心にある程度の間隔をもって巡っており、一定の規則性がみられる。300号住居跡はその柱穴の構成が不明確である。このように住居跡は、2棟と限られた検出のため構築の状態や柱穴構成あるいは炉跡などの詳細な不明であるが、県内では数少ない住居跡の検出例をもつ、立川町東興屋B遺跡の8・9・36号住居跡を参考例として、住居跡について検討を加えていく必要があろう。

今回の調査で検出された土塙は80基である。これら土塙の形状は、平面形は円形あるいは橢円形を基調として不整形などがあり、平面形態での一定の規則性はみられない。断面形を主体に形状をみた場合は、大きく3つに分けられサラ・タライ形、袋状形、フラスコ状形になり、サラ・タライ形52基、袋状形15基、フラスコ状形14基である。各形態別の土塙の分布状況は、現地点では各土塙とも規則性はみられず、相互の関係も不明確である。

2) 遺物

今次調査で出土した縄文時代の遺物は、整理箱97箱のうち土器79箱・石器18箱である。遺物に対する考察は、次回の調査をまつて資料が出揃った段階で、検討を加えることにし土器や石器については略記したものである。

出土した土器は、a類・b類・c類土器まで描出された文様や施文技法によって、簡単に分類した。分類した土器の時期は次の通りである。

a類土器は、竹管や半截竹管あるいは棒状工具などの施文具を使用して、沈線文様や爪

形・円形状の刺突文などを描している。a 1類・a 2類・a 3類は沈線による格子目・曲線・爪形などの文様がみられ、縄文時代前期の大木6式に比定される。a 4類は、いわゆる集合沈線の一群で、北陸・中部・関東地方にみられる中期初頭の特徴であり、縄文時代中期大木7a式に比定され、とくに県内でも小国町谷地遺跡・墓窪遺跡、尾花沢市原の内A遺跡、最上町水木田遺跡、羽黒町郷の浜J遺跡など遺跡数としてはわずかであるが、量的には多く出土し、原の内遺跡や水木田遺跡など県内の奥羽山系沿いの遺跡でも出土していることは、興味深い。なお、完形土器P R31はこの時代の時期に相当し、いわゆる俗称“吹浦式土器”と呼ばれている土器である。

b類土器は、粘土紐の細隆による貼付をして、各種の円形・山形・鋸歯・格子目などの文様を描出して、文様構成の一群をなす土器である。貼付する技法は、b 1類の単純に貼付する場合、b 2類半截竹管による細く連続する爪形を施しており、b 1・b 2類とも縄文時代前期大木6式に相当する。b 2類はその手法からみて、関東地方の十三苔台式に併行する。

c類土器は、各種の縄文原体の施文法を集めてみたもので、c 1類単節縄文など、c 2類絡条体文、c 3類異条斜条文などで、若干縄文時代中期初頭が含まれる可能性があるが、総体的には縄文時代前期大木6式に比定される。R P32他の完形土器はこの類に含まれる。

参考・引用文献

- 安部 実・佐藤庄一 (1983) 「新青渡遺跡第1次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第67集
- 阿部明彦 (1982) 「第四章 繩文時代中期」 『村山市史 別巻1 原始古代編』 pp271~398
- 阿部明彦・賀谷孝雄 (1983) 「宅田遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第72集
- 阿部明彦・佐藤正俊・佐々木洋治 (1984) 「水木田遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第75集
- 赤堀長一郎 (1969) 「概説 四 繩文時代(II) 一前期・中期」 『山形県史 資料篇11 考古資料』 pp55~60
- 石鄉岡誠一 (1976) 「III-(2) 発見遺構と出土遺物」 『秋田城跡』 昭和50年度秋田城跡発掘調査概報 pp18~48
- 小笠原好彦 (1974) 「円筒土器文化の崩壊とその意義」 『東北の考古・歴史論集』 平重道先生還暦記念会編 pp55~77
- 柏倉亮吉・江坂輝輔・酒井忠純・酒井忠一・加藤 栄 (1955) 「山形県鶴ヶ城跡発掘調査報告」 荘内古文化研究会
- 柏倉亮吉・加藤 栄・佐藤慎宏・佐藤慎雄 (1973) 「V鳥海山・飛島の考古 鳥海山麓の考古学的調査」 『鳥海山飛島』 pp328~374 山形県総合学術調査会編
- 川崎利夫・安部 実 (1981) 「境興野遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第46集
- 小松正夫 (1977) 「II-(2) 発見遺構と出土遺物」 『秋田城跡』 昭和51年度秋田城跡発掘調査概報 pp8~18
- 斎藤弘吉 (1963) 「吹浦村遺跡発掘家犬骨について」 『羽陽文化』 60号 pp8~9
- 坂井秀弥 (1982) 「栗原遺跡第一第4・5次発掘調査概報」
- 佐藤庄一・野尻 侃・安部 実 (1982a) 「上ノ田遺跡 北堤遺跡 橋掛遺跡 大日塚遺跡 土橋遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第52集
- 佐藤庄一・野尻 侃・安部 実 (1982b) 「地正面遺跡 前田遺跡 塚田遺跡 佐渡遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第51集
- 佐藤正俊・名和達朗 (1982) 「基庭遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第58集
- 佐藤正俊・名和達朗・阿部明彦・長橋 至 (1983) 「谷地遺跡 後原遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第63集
- 佐藤正俊・長橋 至 (1983) 「原の内A遺跡第2次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第71集
- 佐藤慎宏 (1976) 「庄内を掘る」 致道博物館
- 賀谷孝雄・佐藤正俊 (1981) 「東興野B遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第44集
- 野尻 侃・川崎利夫・安部 実 (1981) 「郷の浜」遺跡発掘調査報告書 山形県埋蔵文化財調査報告書第50集
- 長谷部晋人 (1919) 「羽後吹浦一本木貝塚」 『人類學雑誌第34卷第8号』 pp276~278
- 林 謙作 (1965) 「II 繩文文化の発展と地域性 2 東北」 『日本の考古学 II』 pp64~96
- 保角里志 (1974) 「所謂吹浦式土器について」 『郷土考古第2号』 pp67~76
- 山形県教育委員会 (1974) 「庄内広域宮内団地農道整備事業関係遺跡分布調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第1集
- 山形県教育委員会 (1978) 「山形県遺跡地図」
- 山形県教育委員会 (1981) 「分布調査報告書(8)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第45集
- 山形県教育委員会 (1983) 「分布調査報告書(10)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第74集
- 米沢義光 (1980) 「志賀町米沢遺跡一県営圃場整備事業埋蔵文化財一調査報告書1」

図 版



遺跡遠景



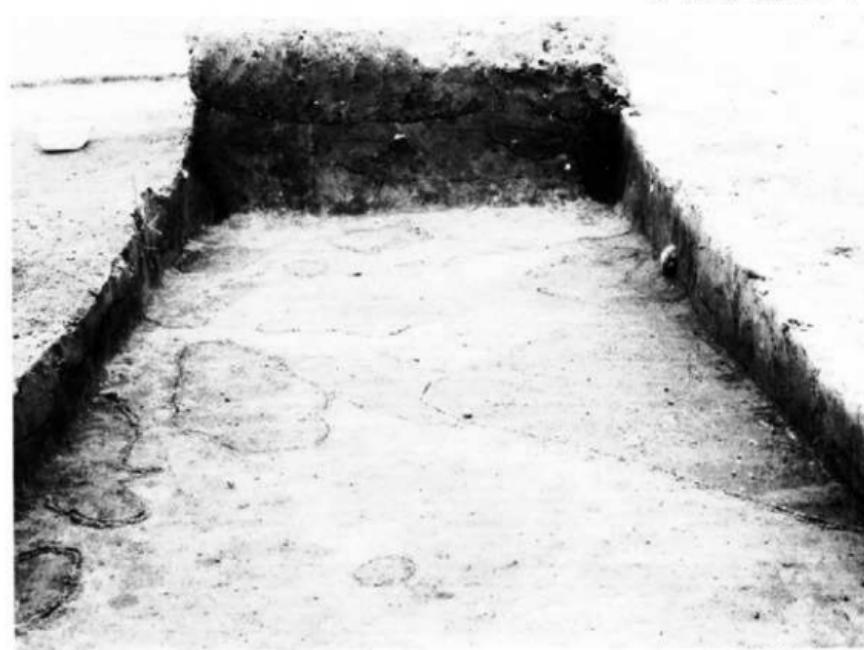
遺跡近景



トレンチ試掘状況



発掘調査風景





プラン確認状況



ST1 土層セクション



ST1-② 土層セクション



ST1-③ 土層セクション



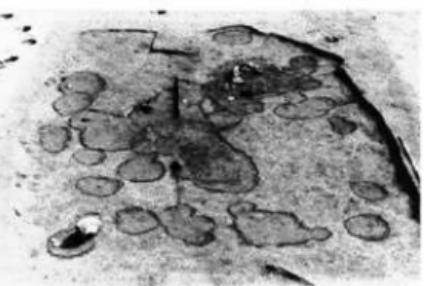
ST1-① 土層セクション



ST1-③・④ 土層セクション



ST1-⑤ 土層セクション遺物出土状況



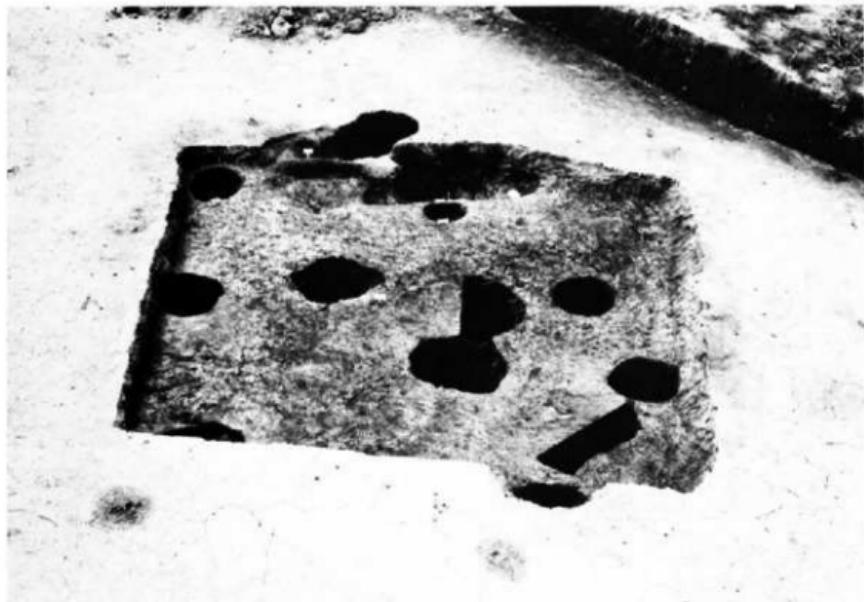
ST1 床面検出状況



ST1 完掘状況（北↑）



ST1 完掘状況（東↑）



ST4 完掘状況（北↑）



ST4 プラン確認状況



ST4 土層セクション



ST4 床面精査状況



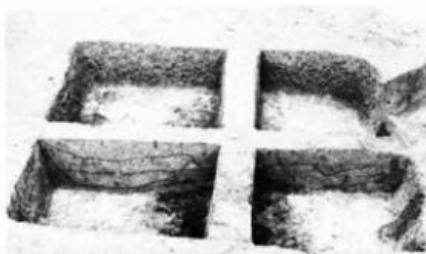
ST4 カマド



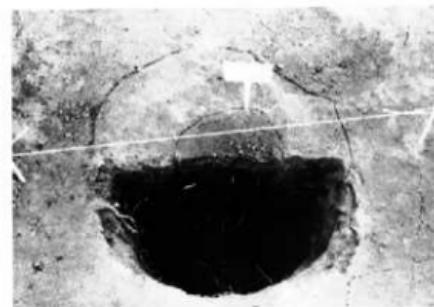
ST5・6 実掘状況（手前 ST5 西↑）



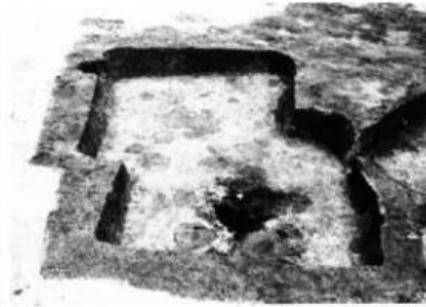
ST5・6 プラン確認状況



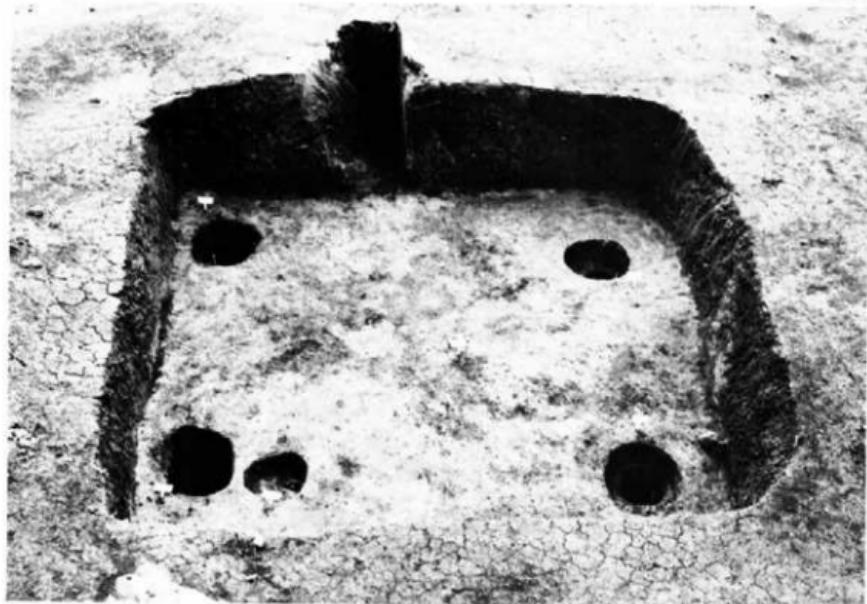
ST5 土層セクション



ST5 ピット 8 セクション



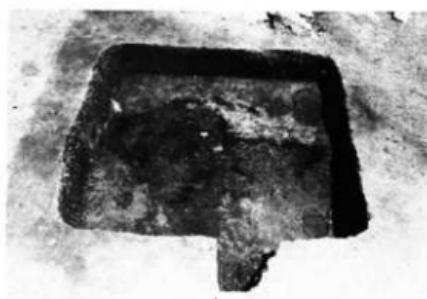
ST5・6 床面精査状況



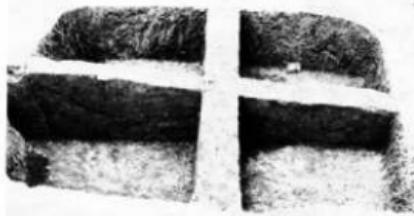
ST7 完掘状況（東↑）



ST7 ブラン確認状況（東↑）



ST7 床面精査状況（西↑）



ST7 土層セクション（南↑）



ST7 土層セクション（西↑）



23~26-55~57G V層一括土器出土状況



RP5



RP7・8・9



RP13



RP14



RP15



RP16



RP17



RP18



RP19



RP20



RP21



RP22



RP23 - 24



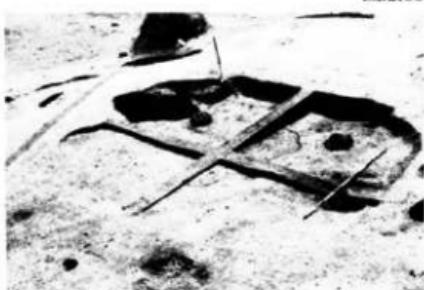
出土状况



出土状况



ST300 プラン確認状況



ST300 床面精査・土層セクション



ST300 完掘状況（東↑）



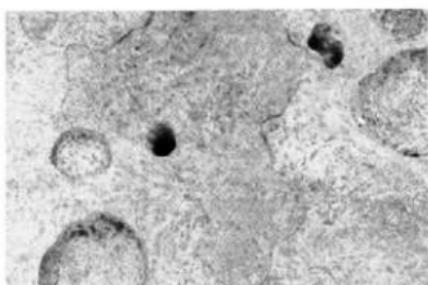
ST300 完掘状況（北↑）



ST301 プラン確認状況



ST301 床面精査・土層セクション



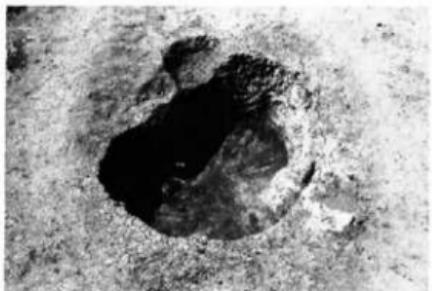
ST301 床面焼土検出状況



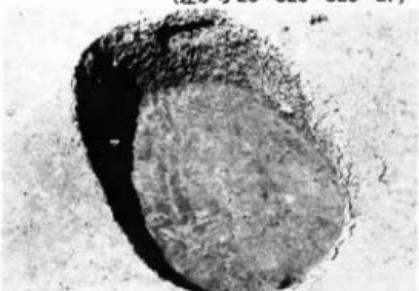
ST301 完掘状況（南↑）



SK15 土層セクション

SK26・27・325・326
(左から 26・326・325・27)

SK26 完掘状況



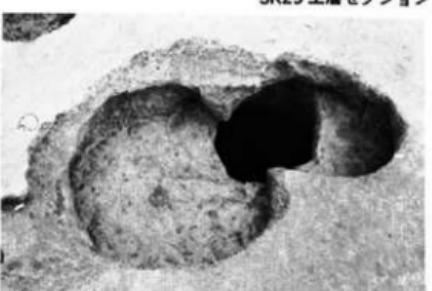
SK27 完掘状況



SK29 土層セクション



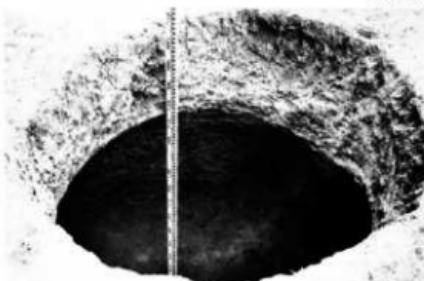
SK29 完掘状況

SK30a・30b・31・32 完掘状況
(右から)

SK33 土層セクション



SK34 土層セクション



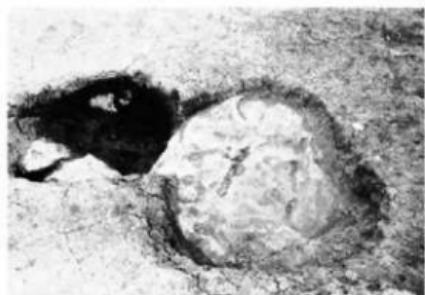
SK34 完掘状況



SK35 土層セクション



SK35 完掘状況



SK38 完掘状況



SK275a・b 土層セクション
(右a, 左b)



SK276 壤底



SK277 土層セクション



SP278(右)・SK279 土層セクション



SP278・SK279 完整状況



SK280(左)・318 土層セクション



SK281 完整状況



SK282 完整状況



SK282(左)・284 完整状況



SK283 土層セクション



SK283 完整状況



SK285 完掘状況



SK286 土層セクション



SK287 土層セクション



SK288a・b・c 土層セクション
(右から)



SK288a・b・c(左)SK289 完掘状況



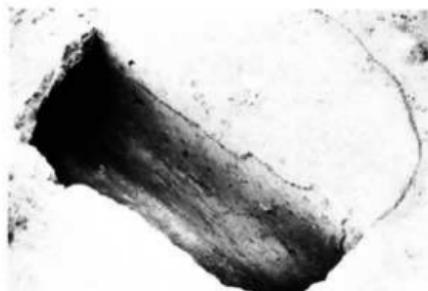
SK288a・b・c SK289 完掘状況



SK289 完掘状況



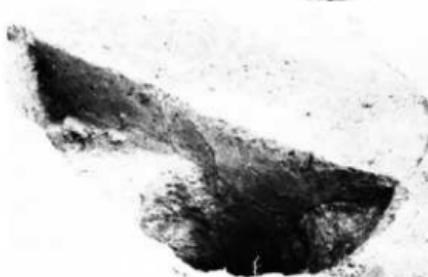
SK289 土層セクション



SK290 土層セクション



SK290 完掘状況



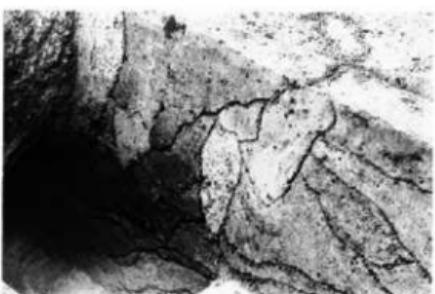
SK293a・b 土層セクション



SK293a 遺物出土状況



SK293a・b 完掘状況



SK294 土層セクション



SK294 完掘状況



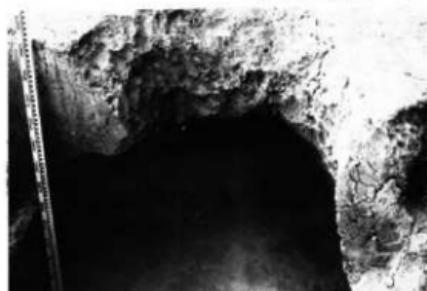
SK295 土層セクション



SK297 土層セクション



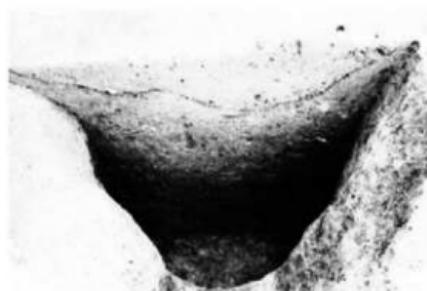
SK299 土層セクション



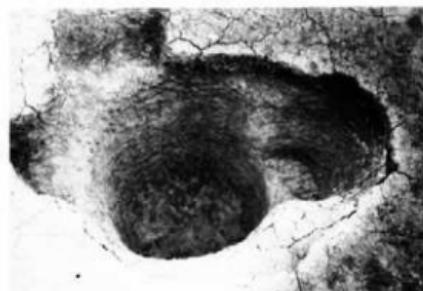
SK299 完掘状況



SK302・303・304 完掘状況
(左から)



SK306 土層セクション



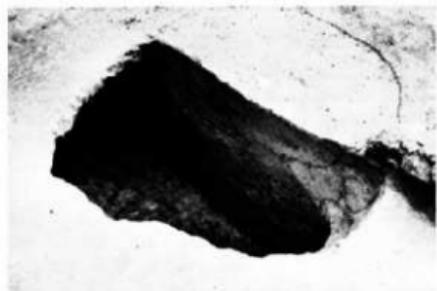
SK306 完掘状況



SK307 土層セクション



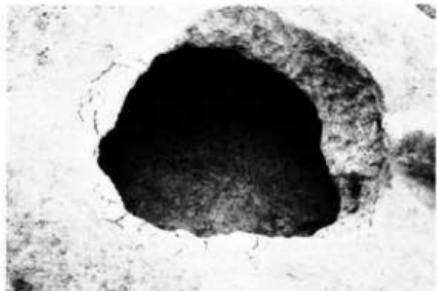
SK307 完掘状況



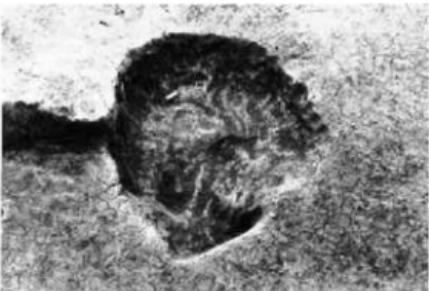
SK308 土層セクション



SK308 土層セクション



SK308 完掘状況



SK309 完掘状況



SK310 土層セクション



SK310 完掘状況

SK313 土層セクション
(b + c の重複)SK313 土層セクション
(a + b の重複)



SK313a・b・c 完掘状況



SK314a・b・c 土層セクション



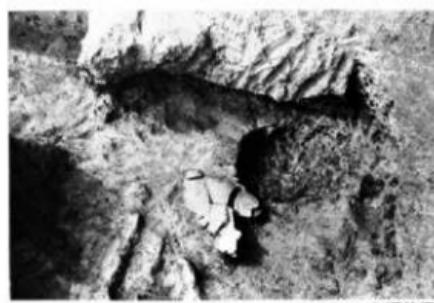
SK314a 完掘状況



SK314a 遺物出土状況



SK314a 遺物出土状況



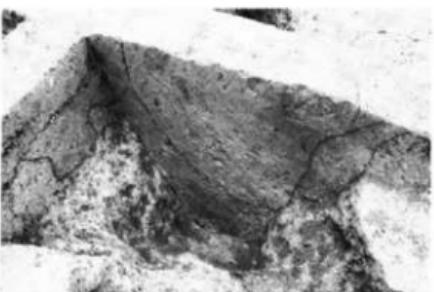
SK314b 完掘状況



SK314c 完掘状況



SK314a・b・c 完掘状況
(奥から c・b・a)





SK316 土層セクション



SK316 完掘状況



SK317 土層セクション



SK319 土層セクション



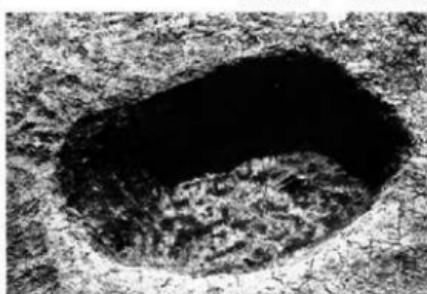
SK319 完掘状況



SK320a・b・c 完掘状況



SK321 完掘状況



SK322 完掘状況



SK324.a・b・SK294 プラン確認状況



SK324a・b, SK294 完掘状況（東↑）



SK324a 土層セクション



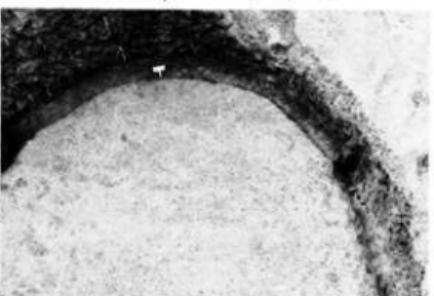
SK324 の土層セクション



SK324a・b, SK294（手前）土層セクション



SK324b, SK294（手前）完掘状況



SK324b 壤底周溝



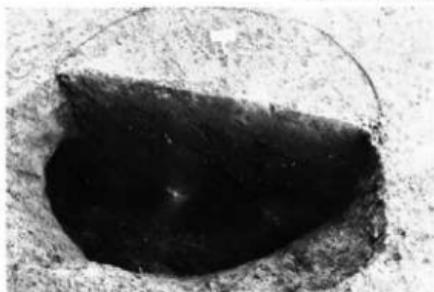
SK294, 324a・b 完掘状況（南↑）



SK325 完整状況



SK326 完整状況



SK328 土層セクション



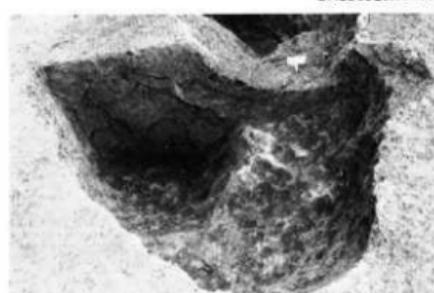
SK329 土層セクション



SK330 完整状況



SK329 遺物出土状況



SK333 土層セクション



SK338a・b 土層セクション
(奥から)

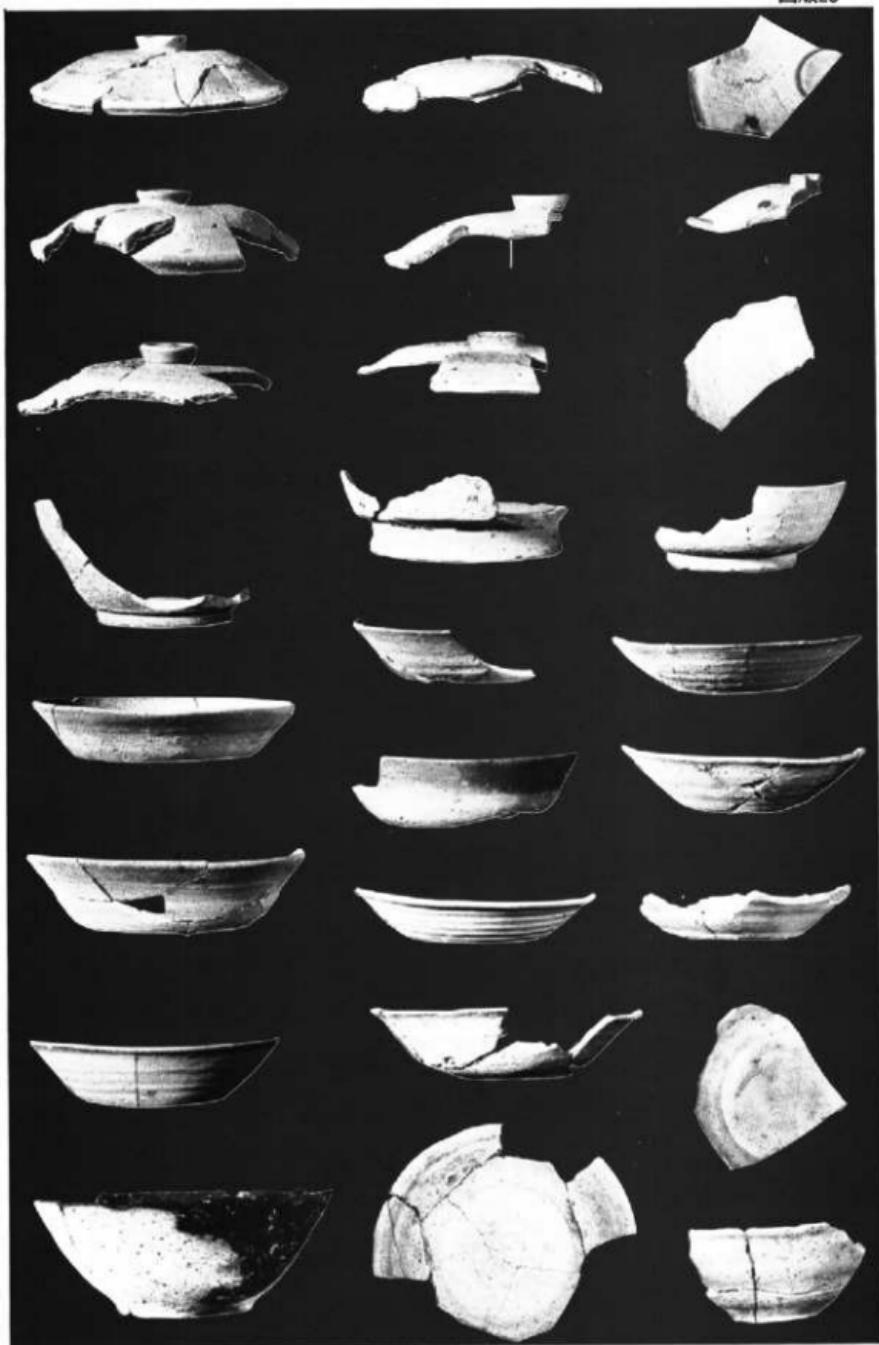


平安時代ピット群全景東側（北東↑）



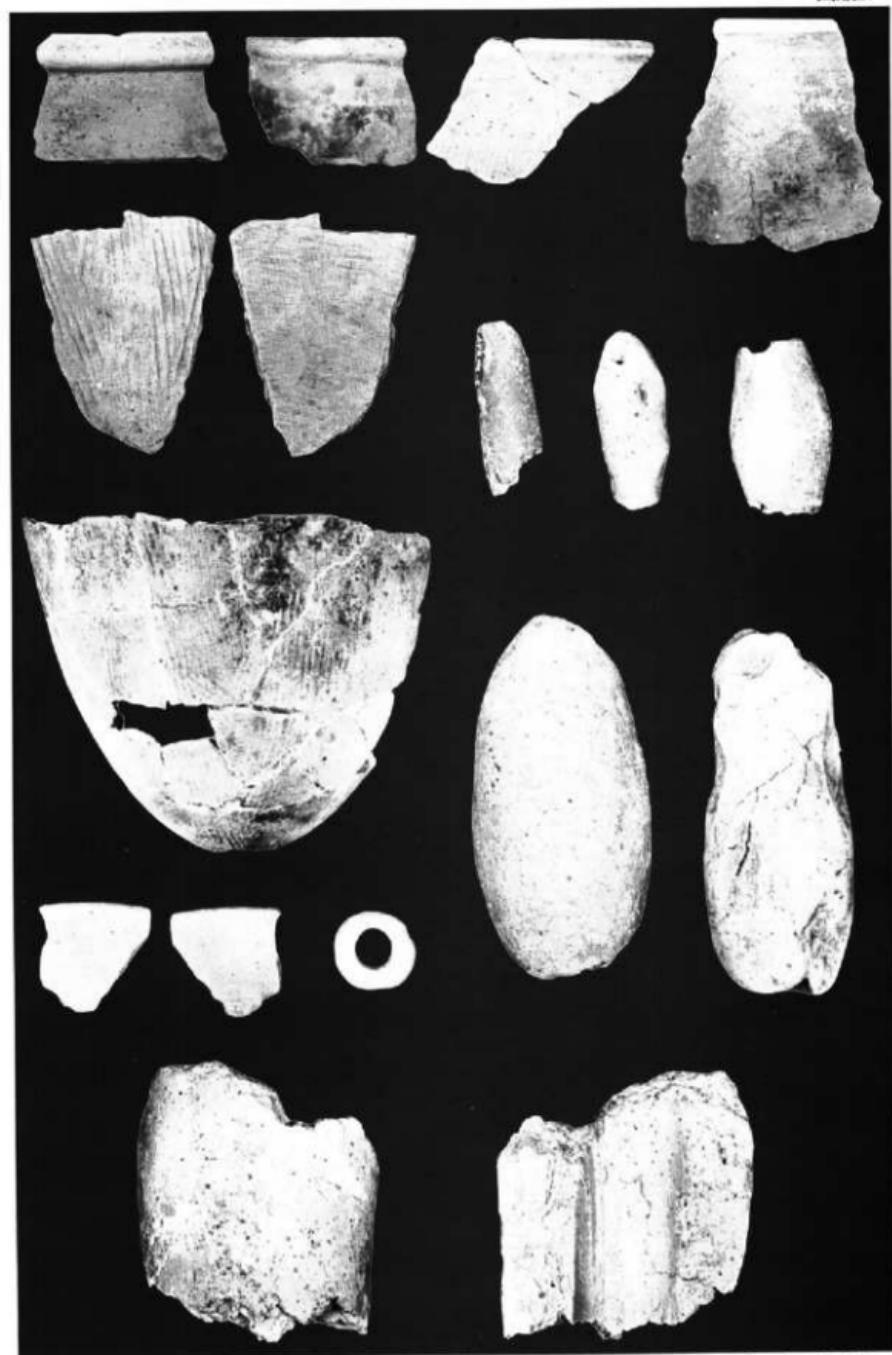
同左西側（東↑）

縄文時代包含層・遺構プラン確認状況
(15~29-54G付近)同 左
(20~29-58~64G付近)縄文時代遺構群発掘状況
(20~25-55~61G付近)同 左
(25~29-58~64G付近)縄文時代遺構群発掘状況
(15~19-55~62G付近)同 左
(25~29-58~64G付近)

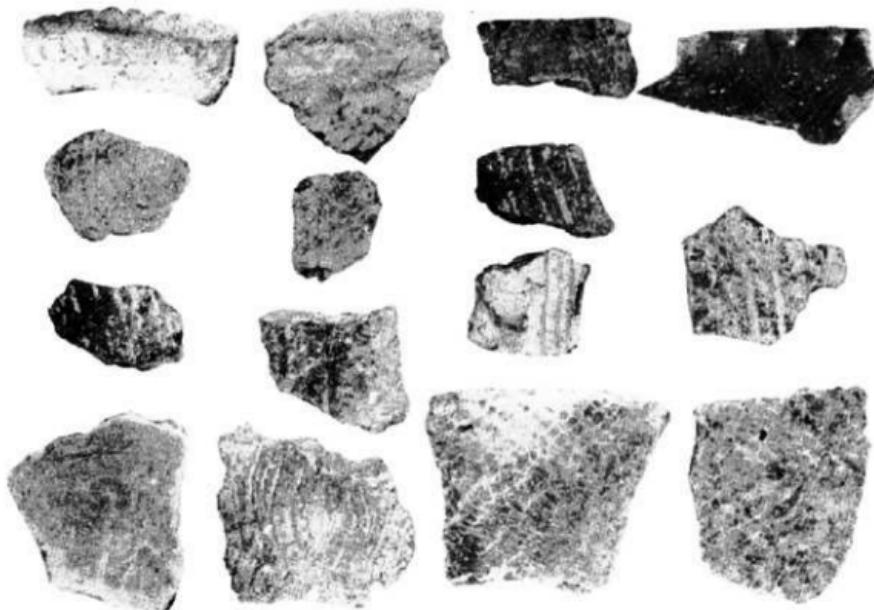




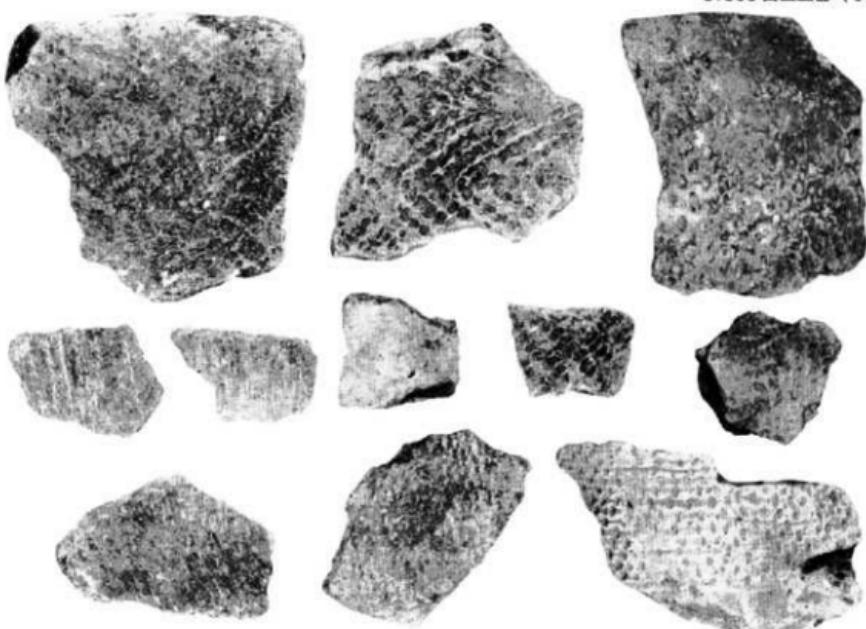
平安時代の土器（2）



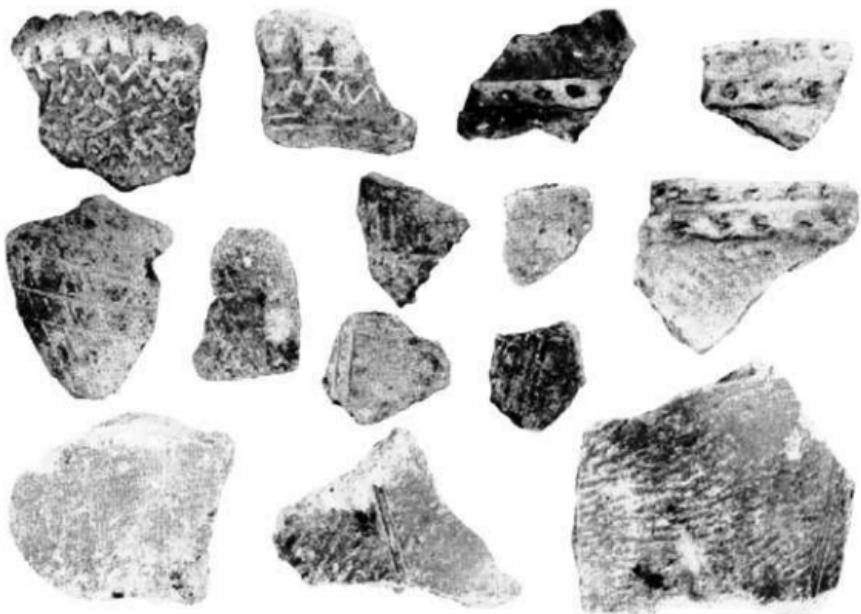
平安時代の土器（3）・土製品



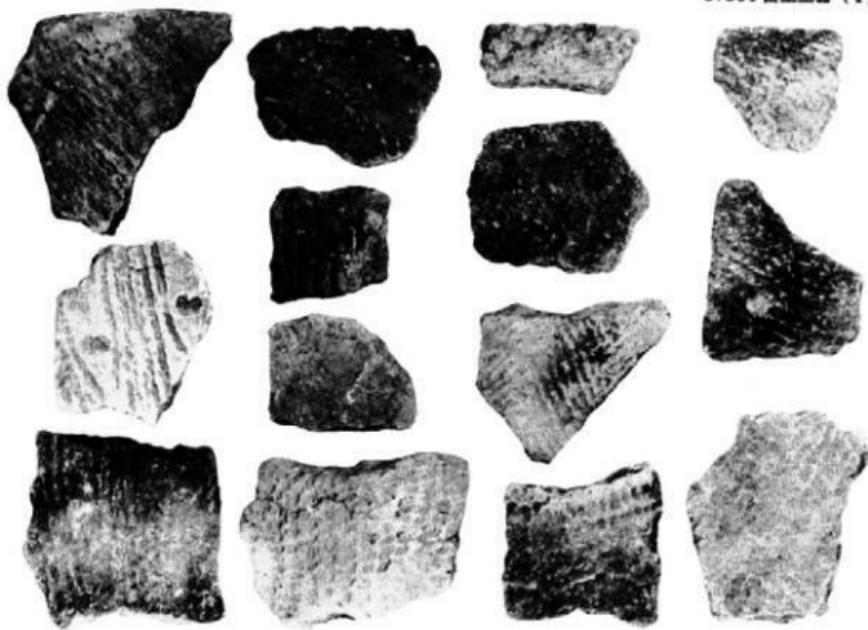
ST300 出土土器 (1)



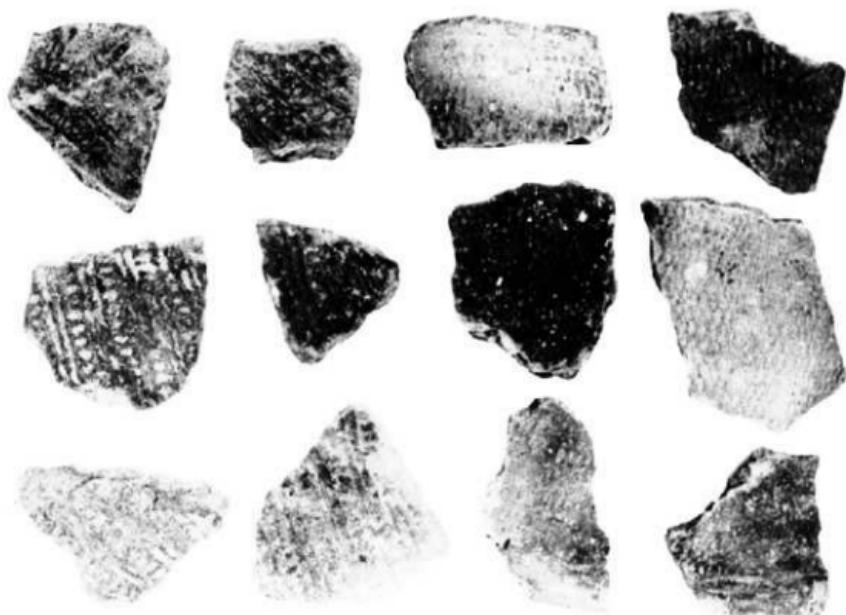
ST300 出土土器 (2)



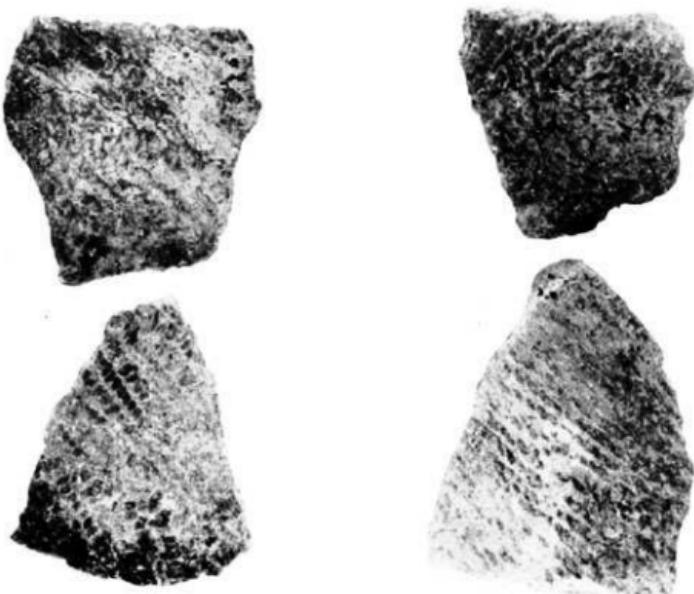
ST301 出土土器 (1)



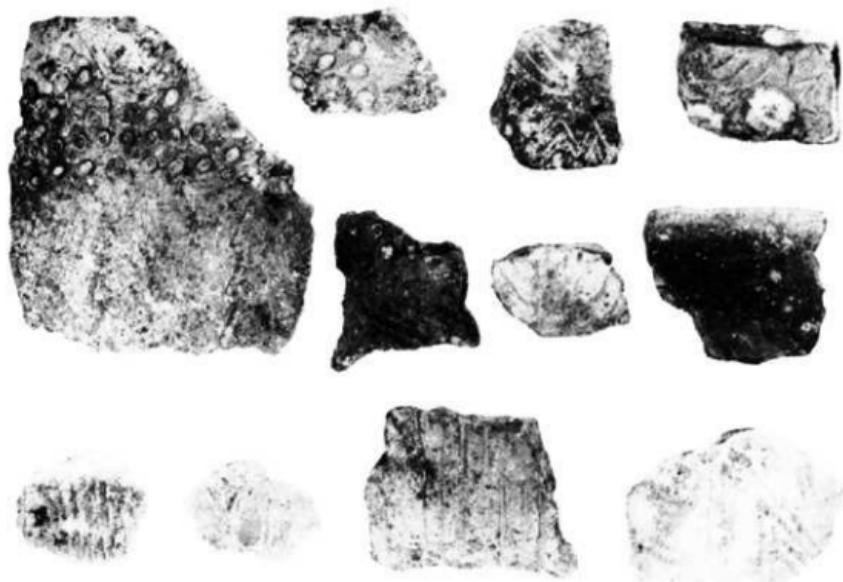
ST301 出土土器 (2)



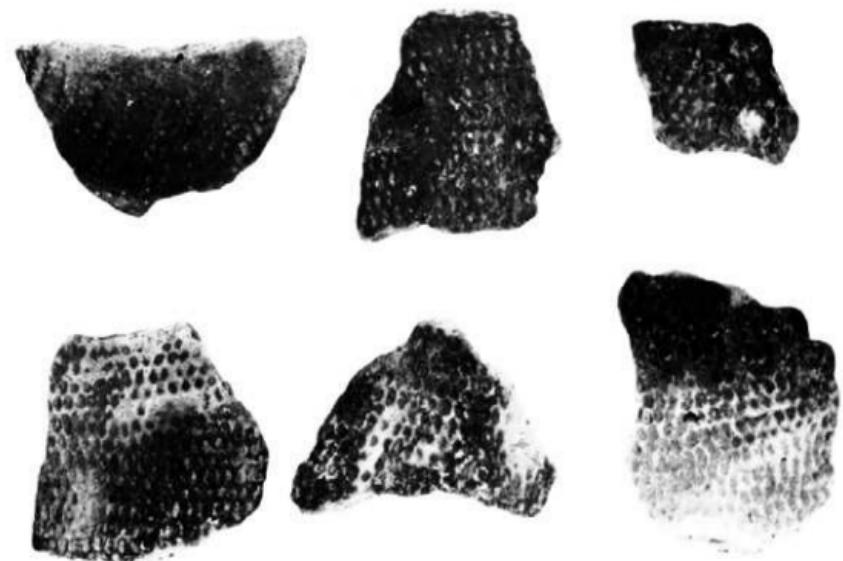
ST301 出土土器 (3)



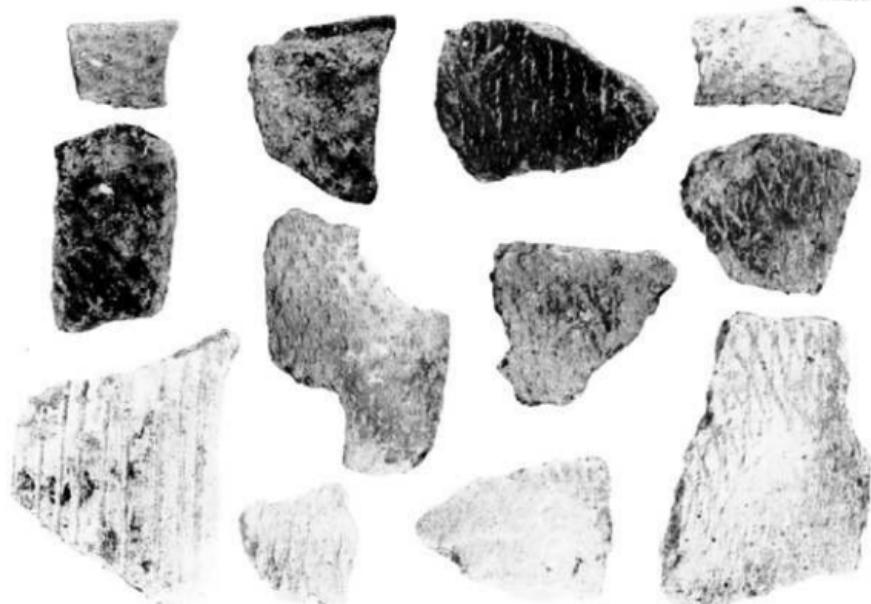
ST301 出土土器 (4)



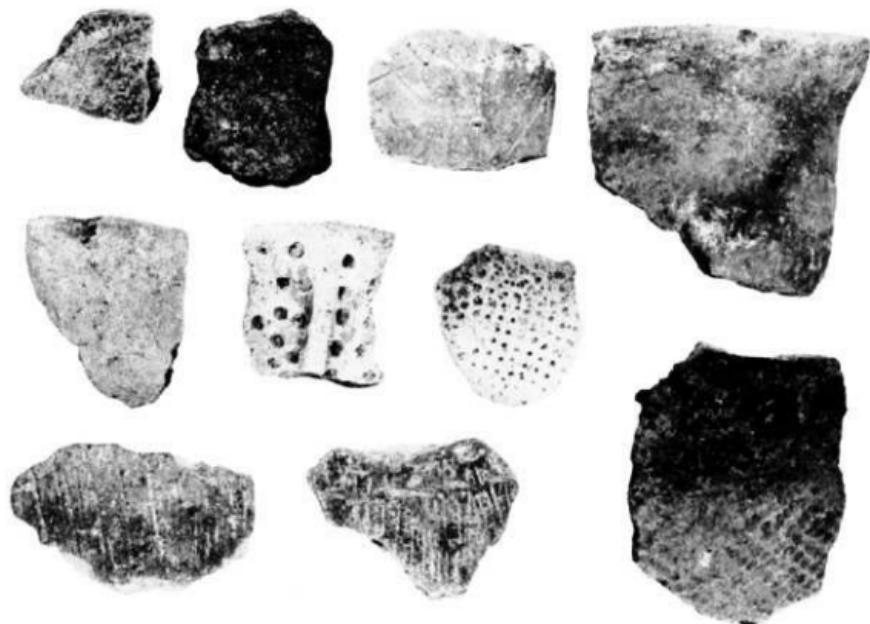
SK30 出土土器（1）



SK30 出土土器（2）



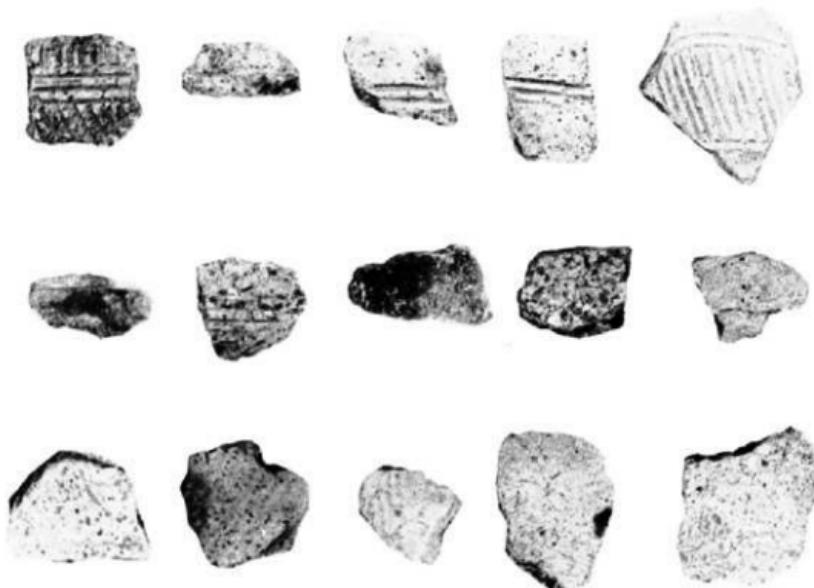
SK28 出土土器



SK29 出土土器



SK34出土土器



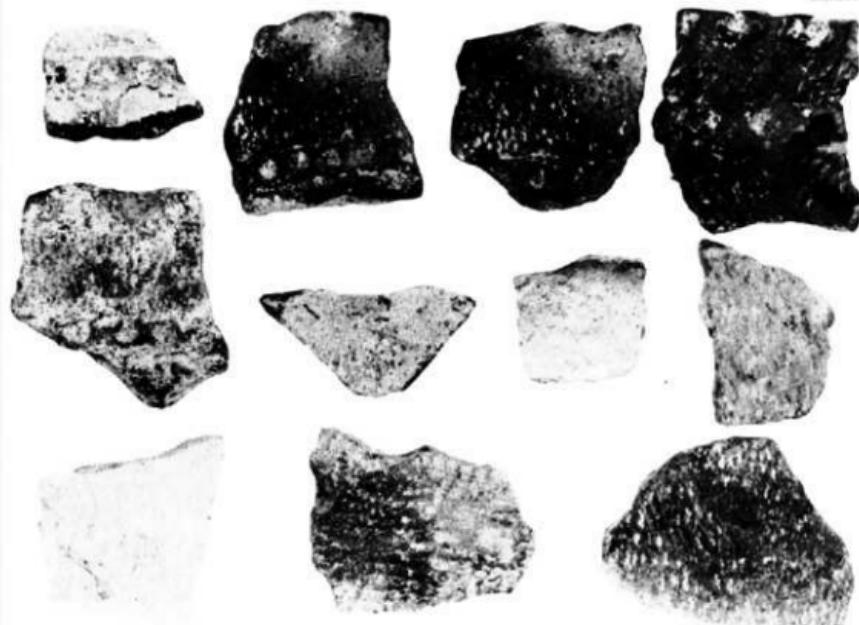
SK35 出土土器



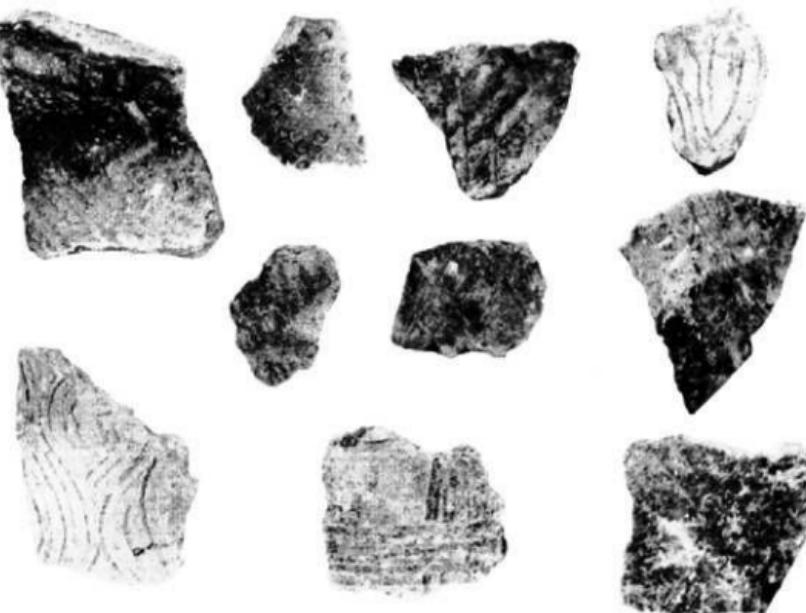
SK278・279・282 出土土器



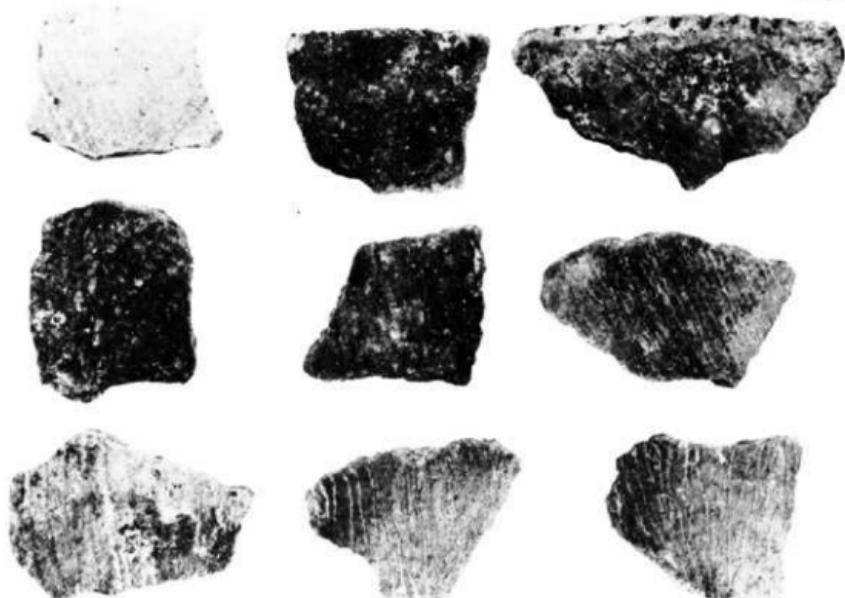
SK284 出土土器



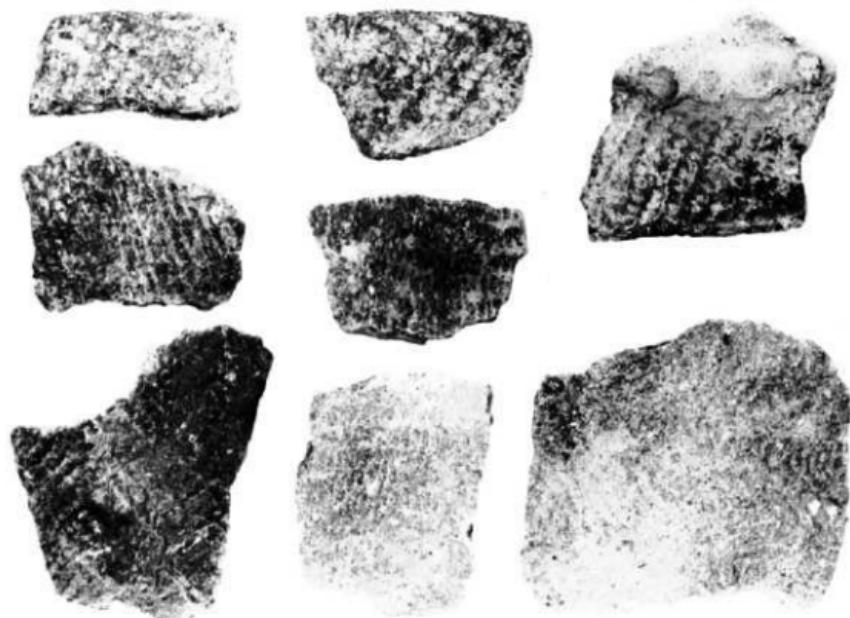
SK285 出土土器



SK293a 出土土器（1）



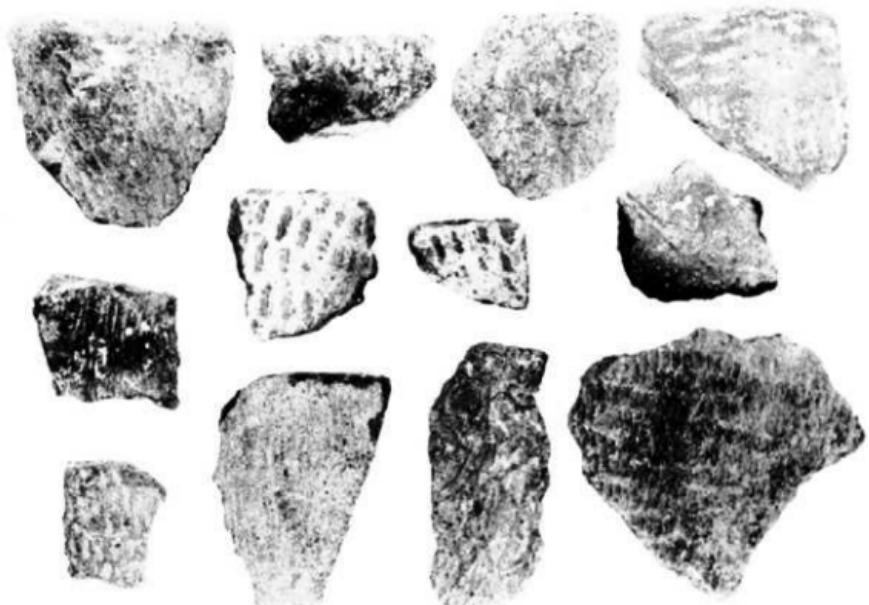
SK293a 出土土器 (2)



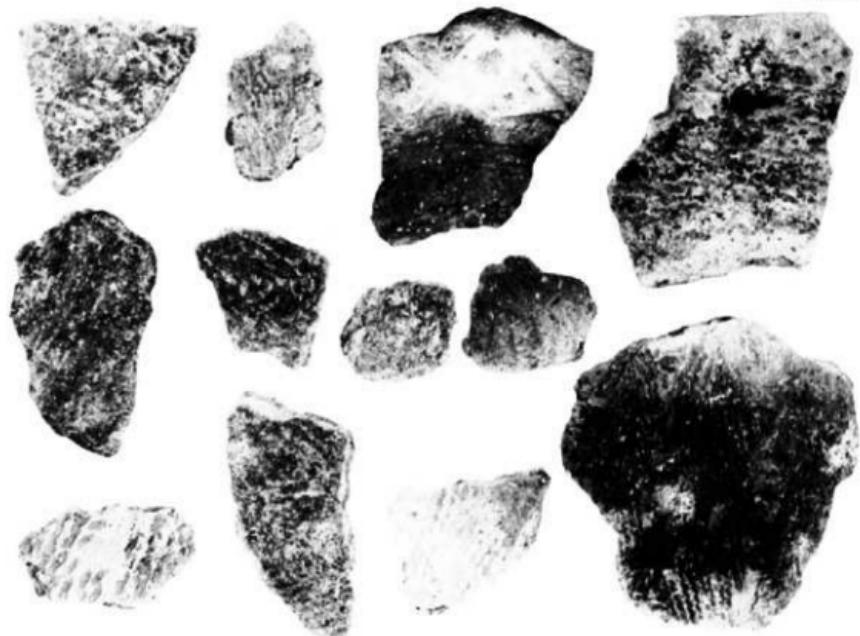
SK293a 出土土器 (3)



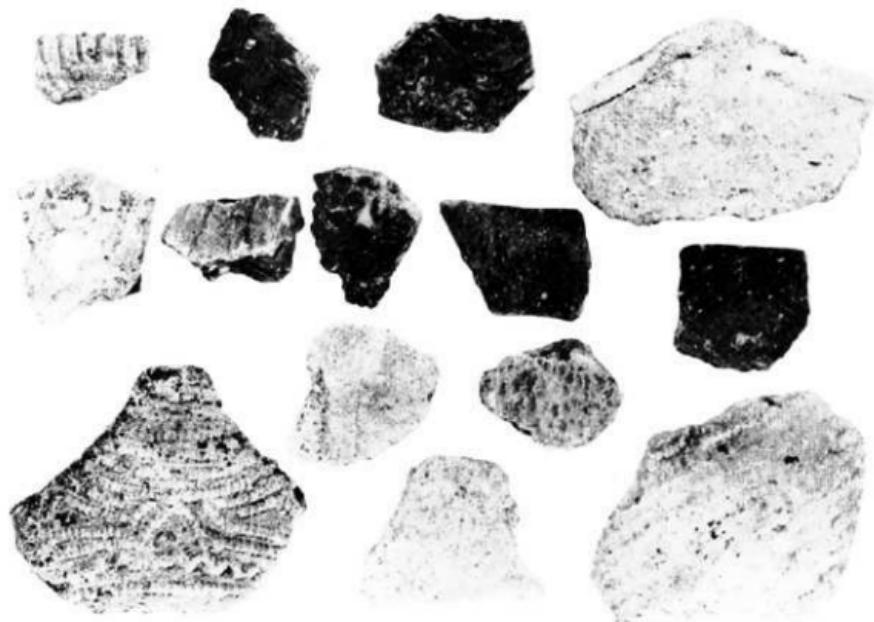
SK293b 出土土器



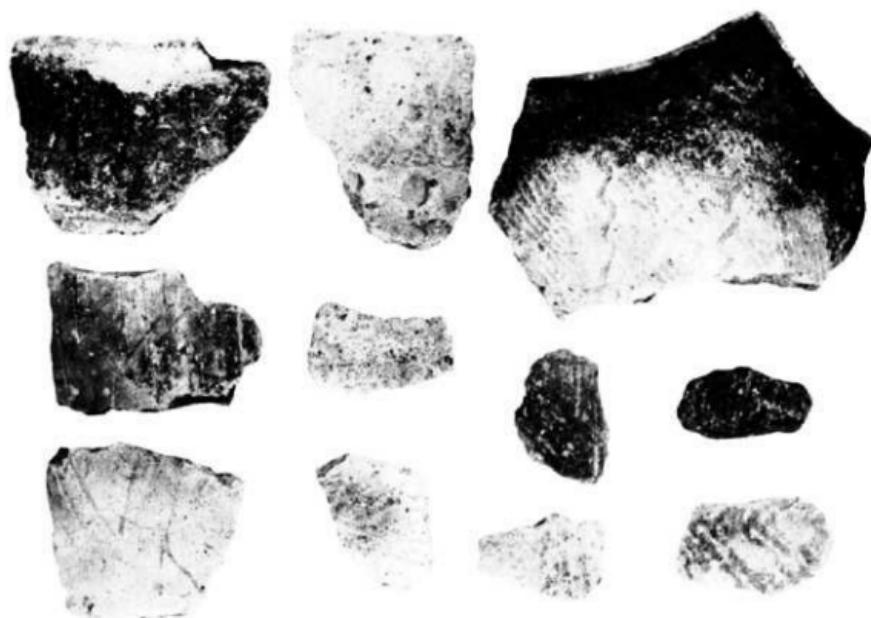
SK286・290 出土土器



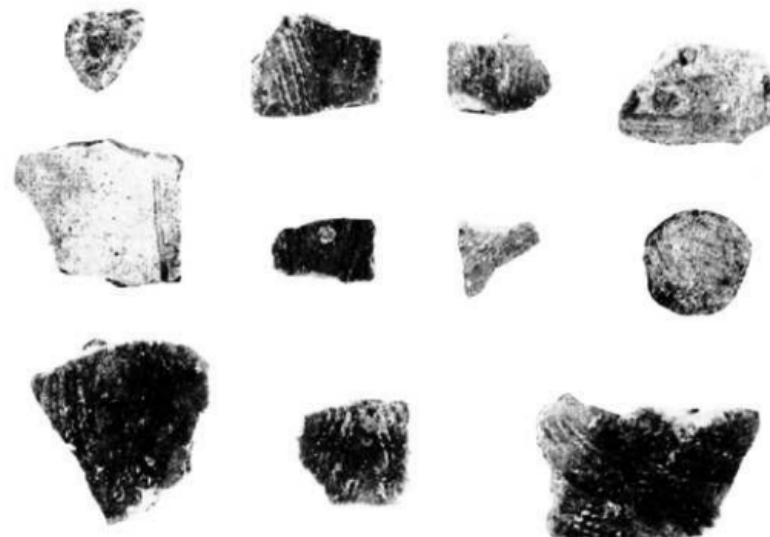
SK294・299 出土土器



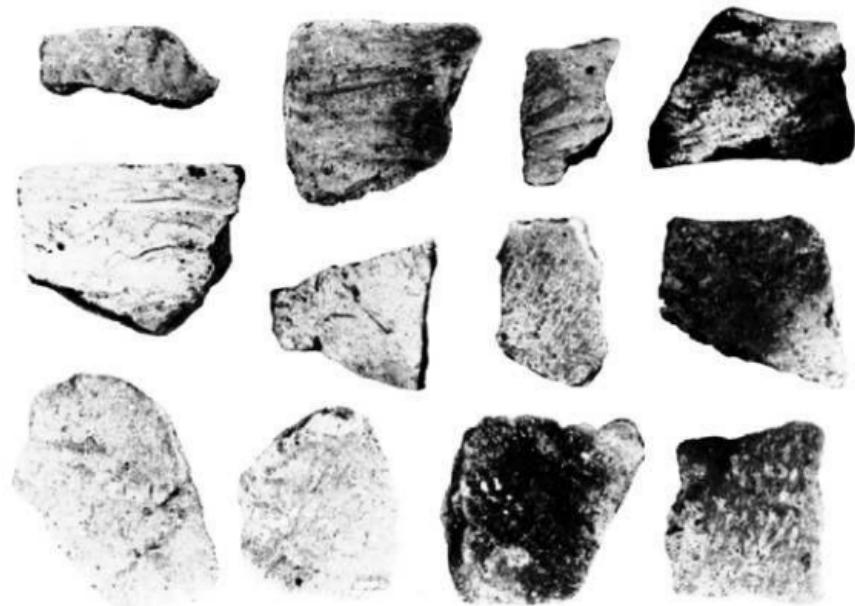
SK305・306 出土土器



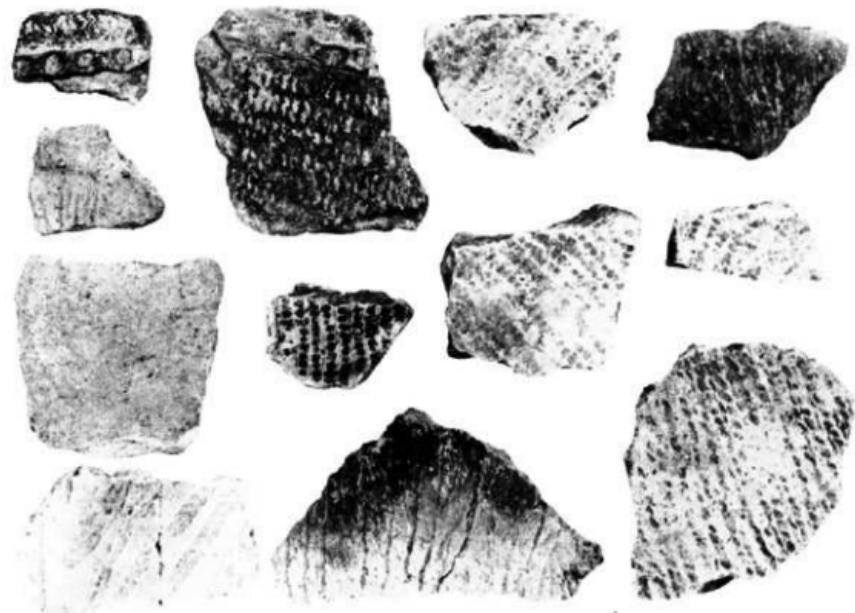
SK308 出土土器



SK310・311・312・313 出土土器



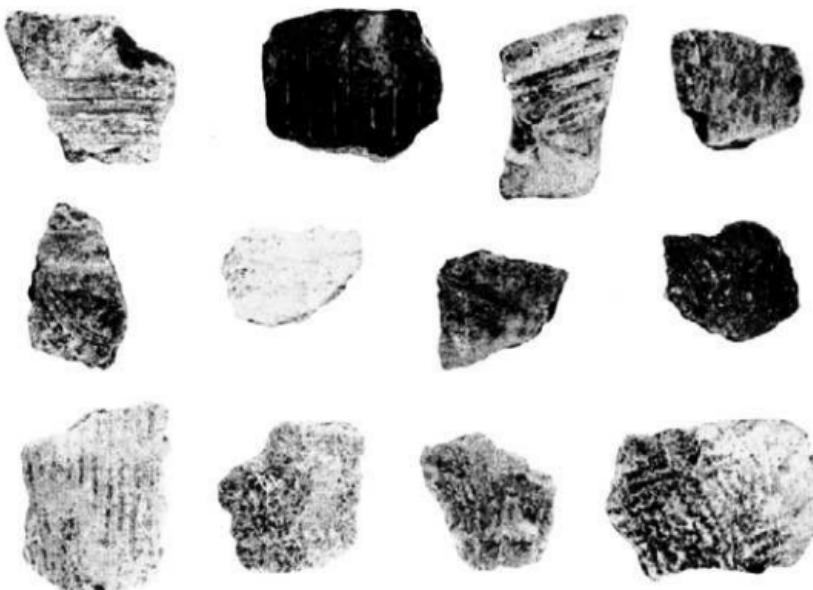
SK314a・d 出土土器



SK314b 出土土器



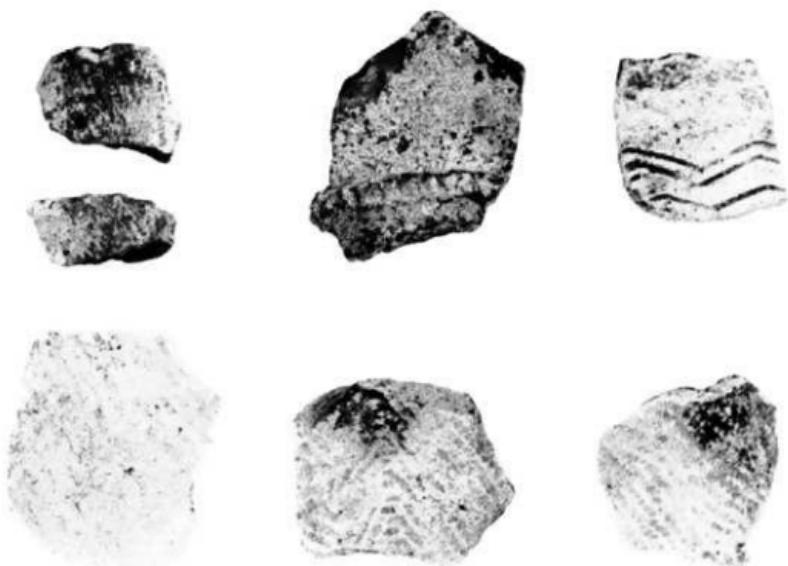
SK314c 出土土器



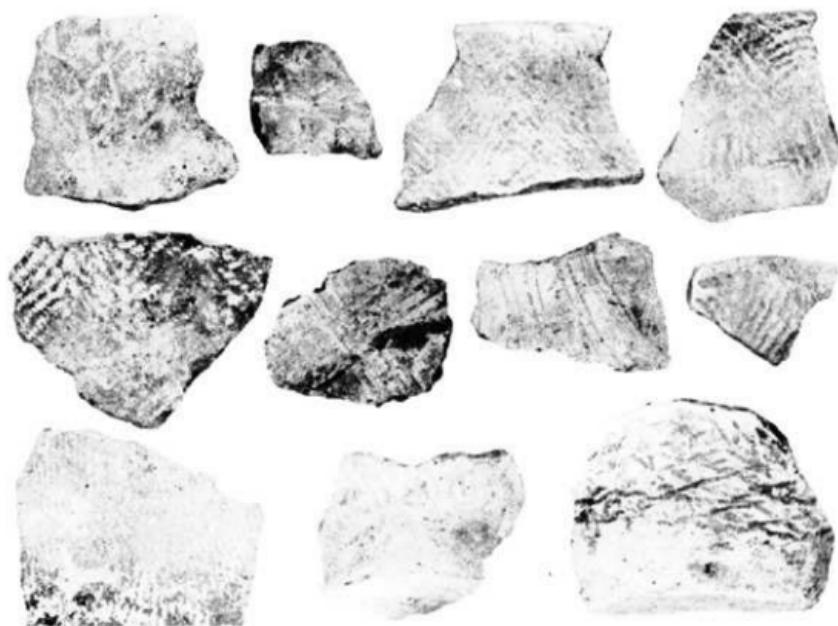
SK315a・d 出土土器



SK317・319 出土土器



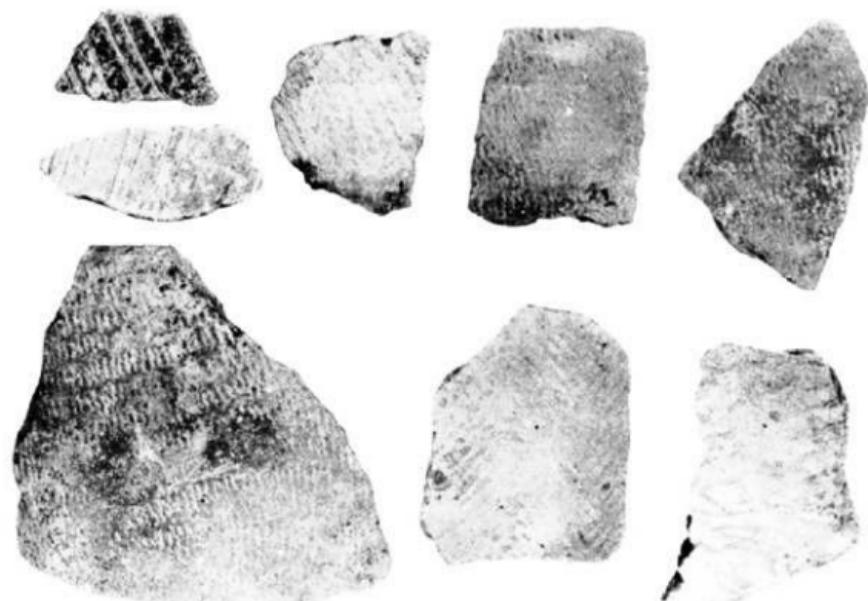
SK320b・c・324 出土土器



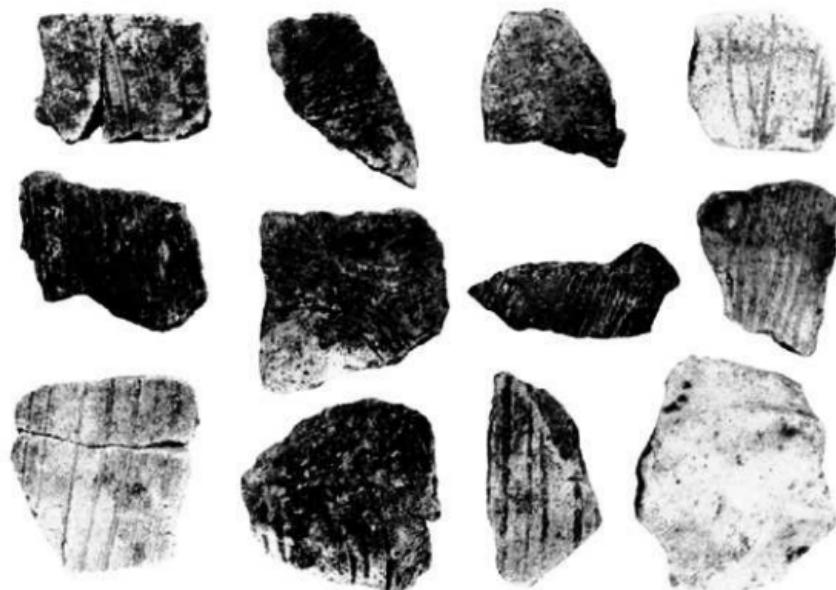
SK324 出土土器 (1)



SK324 出土土器 (2)



SK324 出土土器（3）



SK327・328・330 出土土器



SK332 出土土器



SK333・334 出土土器



一括完形土器（1）



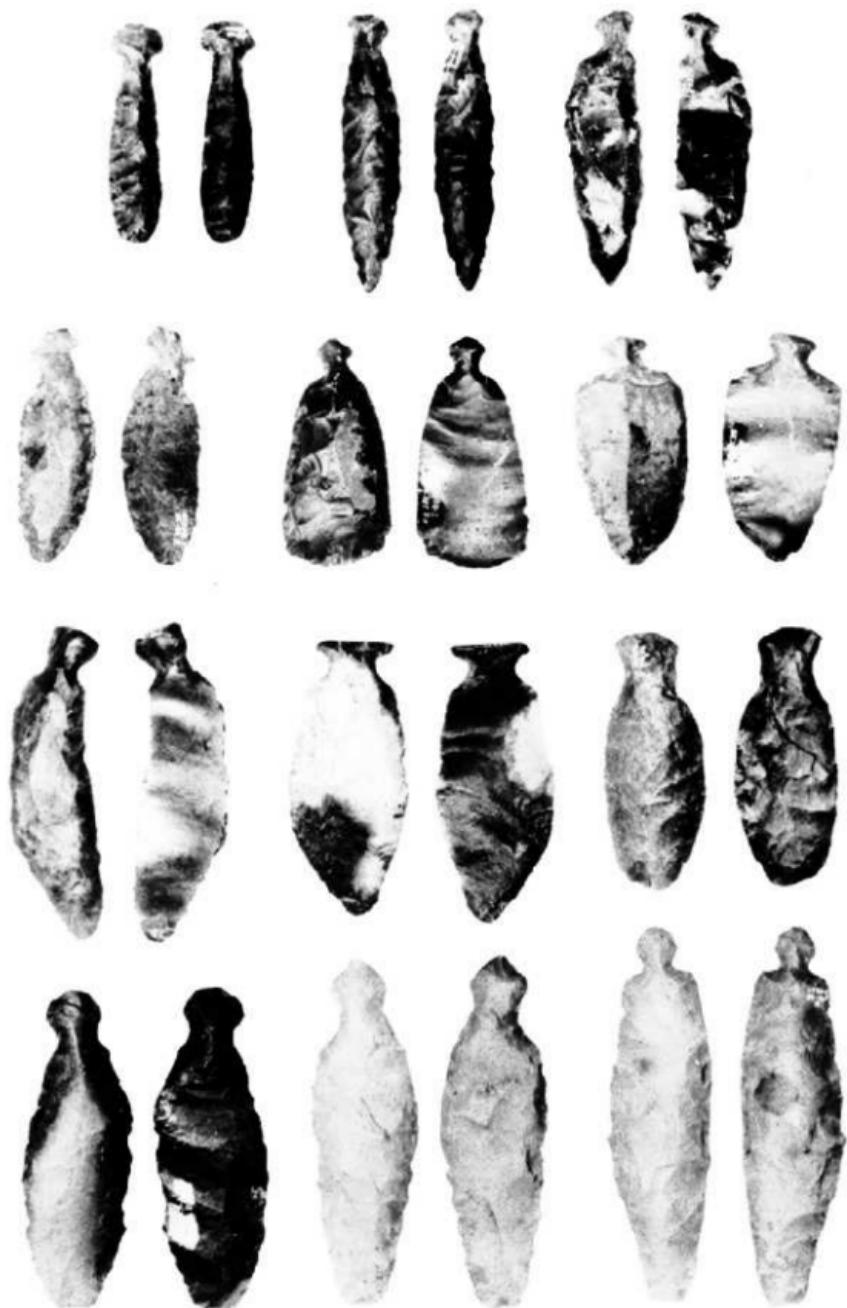
一括壳形土器（2）



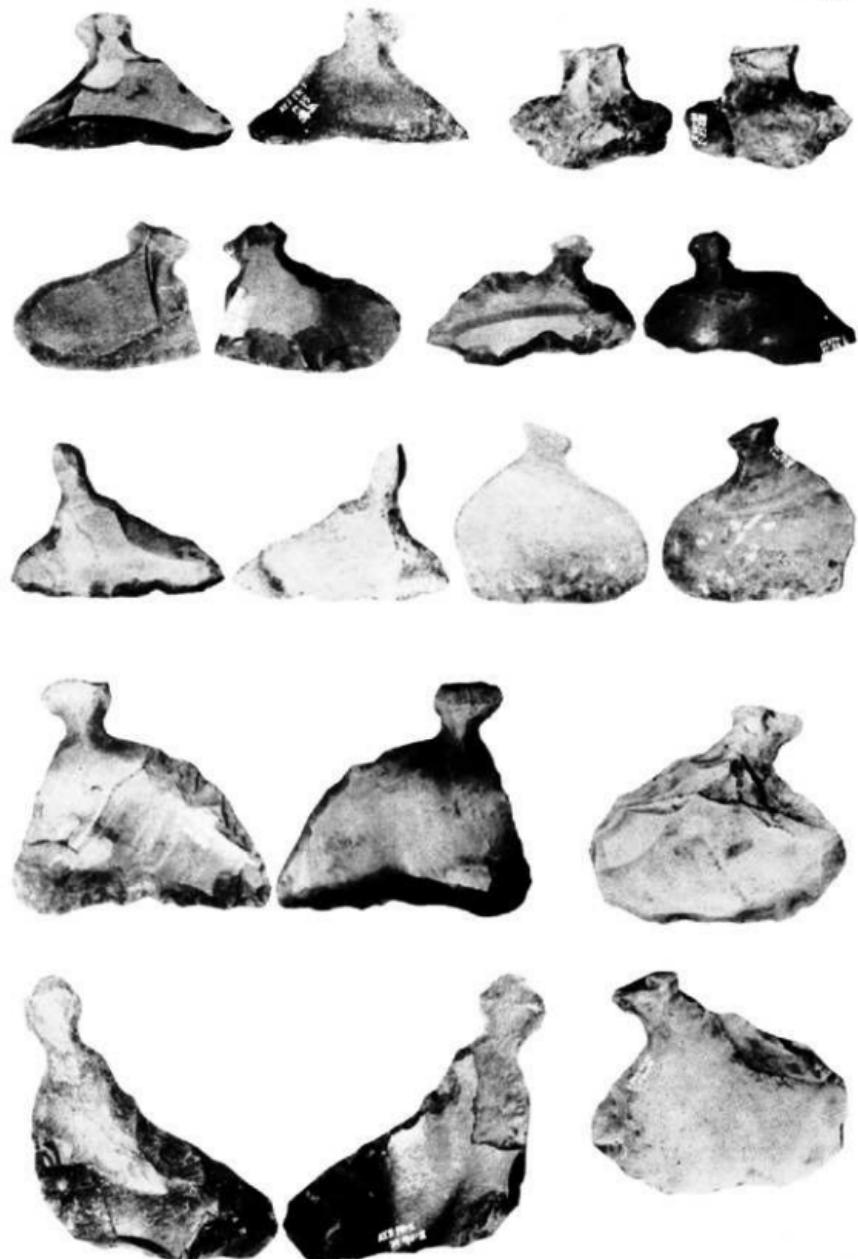
出土石器 (1) 石 鐛



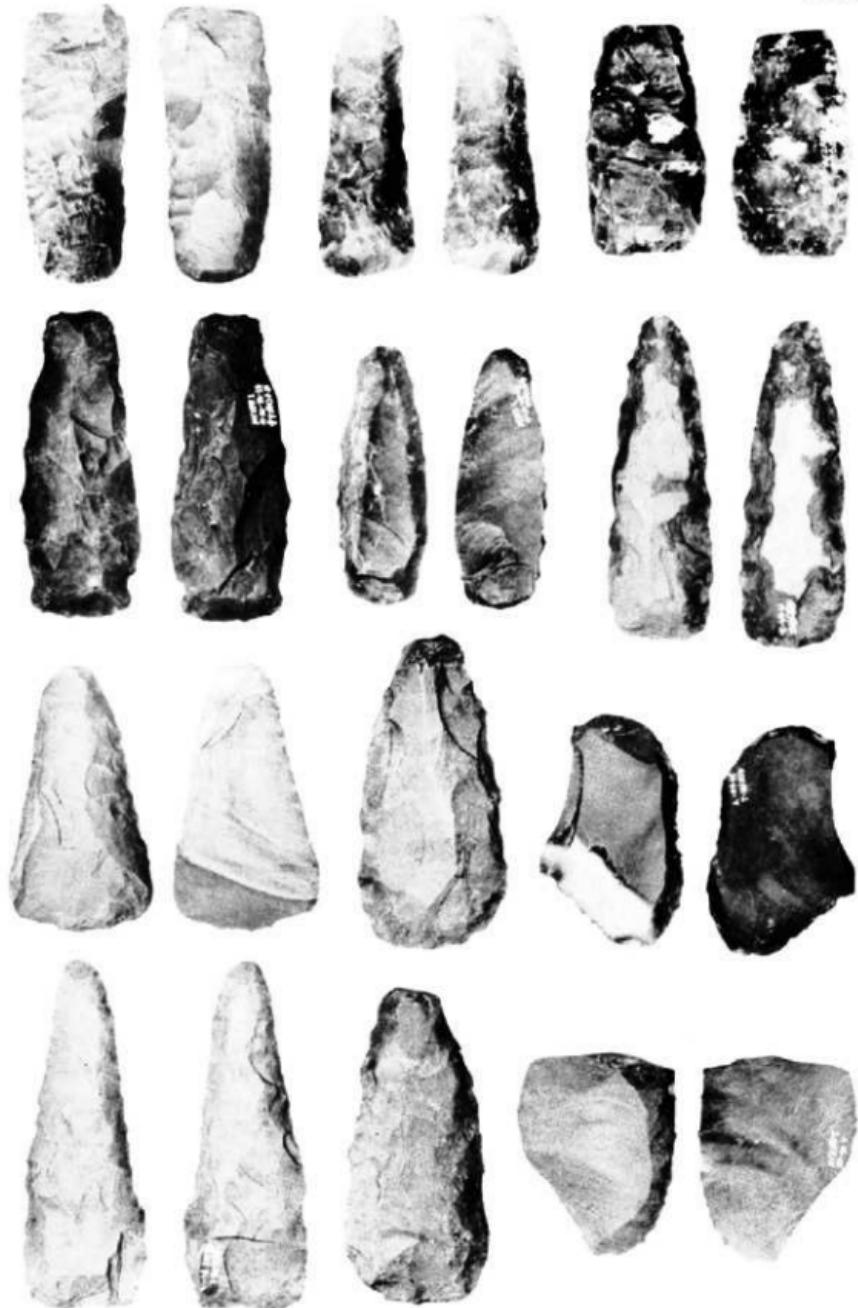
出土石器（2） 石錐、尖頭器



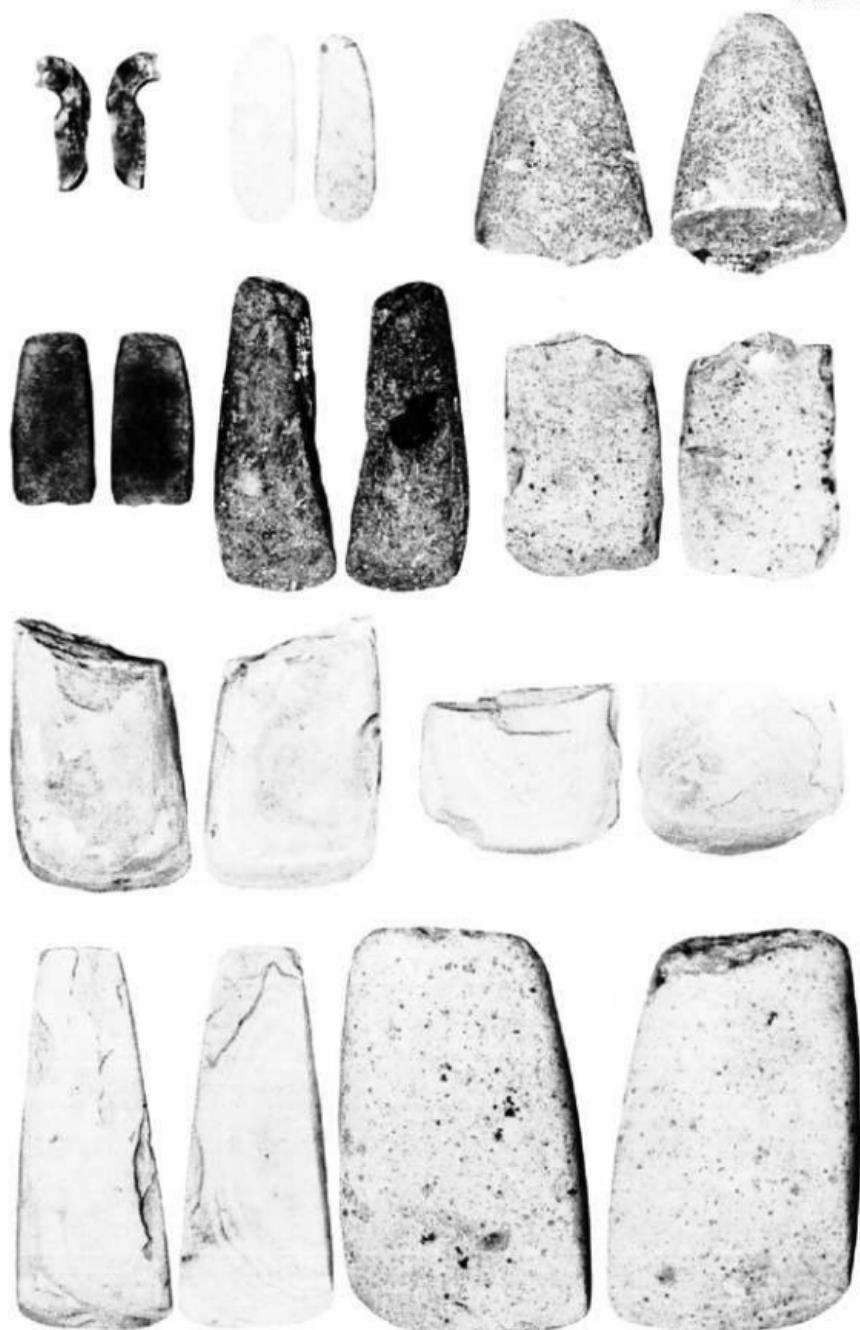
出土石器（3） 石匙（1）



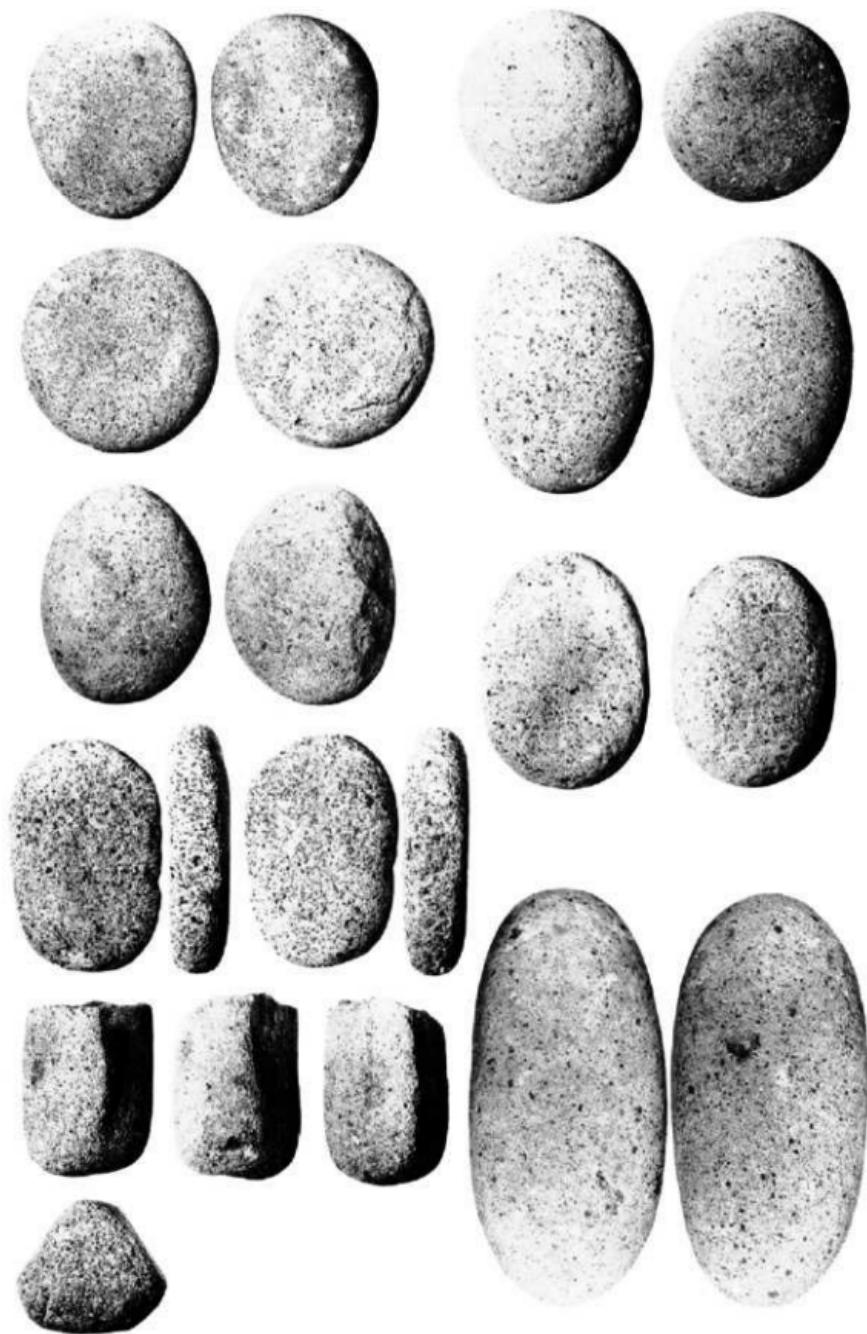
出土石器（4） 石匙（2）



出土石器（5）箒状石器・削器



出土石器（6）磨製石斧 他



出土石器(7) 磨石



出土石器（8） 凹石，石皿，石錘

山形県埋蔵文化財調査報告書第82集

ふくら
吹 浦 遺 跡

第1次緊急発掘調査報告書

昭和59年3月15日 印刷

昭和59年3月21日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 横大風印刷
